
ヴァルキリー家の娘事情

田浪亜紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァルキリー家の娘事情

【Nコード】

N1349W

【作者名】

田浪亜紀

【あらすじ】

不思議は常日頃から私たちの周りをうろついている。そんなある日、一人の少年多田野辰巳は玄関先で金髪碧眼の少女セラフィと出会った。この物語はわたしたちの身の回りに実はあった不思議の物語。一人の少女の家出物語。

物語の始まり

第一章

ある人は言った。

この世には不思議が溢れている、と。

そう、この町にも不思議があった。

「いつてきまーす」

とある家から少年がでて来た。

少年の名は多田^{ただの}野辰^{たつみ}巳。近所の中学校に通う三年生だ。といつても、なりたてだが。

しかし、辰巳はさきほど勢いよく飛び出したのにも関わらず、足を止めた。その理由は簡単、辰巳の目の前に何かが倒れているからだ。

「・・・・・・は？」

呆然と立ち尽くす辰巳。これしか言葉が出なかったのだ。玄関の前に何かが倒れていればその理由にしっかりとマッチするだろう。

倒れているのは漆黒色の甲冑を着ているだろう——人。

（何だこれ。どっかの業者さんがコスプレマネキンでも忘れてったか？）

最初、こんな単純な考えで済んでしまったのだが、後から新たに疑問点が溢れてくる。

が、しかし、そんな疑問を処理する時間を、神は授けてくれはしなかった。

「水が欲しい・・・・・・」

と、どこからとなく声が聞こえる。

辰巳は最初戸惑い、焦るものの、

「水……」

もう一度聞こえると、辰巳はその声の発生源である場所が分かった。

そう、倒れている少女からだ。

辰巳は一瞬一歩後ずさつてしまうものの、何とかその場を踏みとどまる。

「み、水か……」

「あ、ああ」

辰巳は意図を理解し水を持つてくるべく台所へと向かう。途中、辰巳は母に捕まり質問攻めにあつたが、そんなものはささつとかわし、その場を乗り切る。

「持つて来たぞ」

どうやら辰巳が水を持つてくるまでに少女は起き上がっていたらしく、顔を押さえていた。目の色は碧眼だった。

（やつぱ可愛いじゃん……）

下心丸出しの辰巳の顔を見て、少女は少し気分が悪いような顔になる。

「誰だ貴様は、あとその気持ちが悪い顔は止める。吐き気がする」
さきほど水を求めた青年——辰巳にそんな嫌味を言った。

「悪かつたな、そんな気持ち悪い顔つきで」

そんな言葉にも打ち負けない精神力を持つ辰巳は軽くあしらい、持つて来た水を少女へと渡す。

「ああ、先ほどの君だったのか。なんだかすまないな」

さっきの嫌みのことなど微塵も反省していないような口調で、辰巳が持つて来た水を受け取り、一気に飲み干す。

「ついでに少年、ご飯なども頂けると有難いんだが……」

「飯か？ あるにはあるけど朝の残り物だぞ。そんなんでいいのか？」

「いや、いただけるだけでいいのだが」

そ、そうか、と確認を取ると、辰巳はまた家の中へと入り、母に

朝の残り物でいいから出してくれと頼んだところ、良心溢れる辰巳の母は快く了承してくれた。

外に出て、許可が出たことを言いに行こうと戻ったら、『歩けないからそこまでおんぶしていけ』とご命令が出た。

（まあ可愛いし、少しは我慢するか・・・）

また下心丸出しで甲冑姿の少女を背負い、台所へと向かった。

向かおうと歩き出した時、ふっと少女の髪が辰巳の顔の目の前に落ちた。

（ぬお！ なんだこいつ、髪めっちゃ良い匂いしてやがるぞ！？ いや、待て俺！ 正気を保つんだ）

二度三度深呼吸して、心を入れ替え、話題を変えるべく、辰巳は頭をフル回転させる。しかし、こういうときに考えられる話題などたかが知れていた。

「あの——」

「なんだ？ つまらんことは話すなよ。時間の無駄だ」

酷い言われ方だな、と辰巳は思いながらも話題をだした。

「重いつすね」

この時辰巳は甲冑の方を言っただつもりなのだが、どうやら少女は体重の方と受け取ってしまったらしく、顔を地平線に沈む太陽のように真っ赤にさせてブルブルとエネルギーを蓄える。

「——で悪かったな」

「へ？」

「重くて悪かったな——！」

「ば、ばか！ こんなトコで暴れん——おわあああ！？」

ドスン、という効果音が合うくらいに派手に倒れた辰巳と少女。
「いてててて——」

ぶつけた前頭部を擦りながら起き上がろうとする。しかし、起き上がれない。辰巳は疑問に思い、首だけ動かし後ろを見る。

そこには馬乗り状態で少女が乗っていた。

少女はまだ頭を擦り、うずくまっていた。だが、そんな事はいつ

までも続かず、頭を擦り終えた少女は、この状況を見て目を丸くした。

「な、何をしているのだ貴様は!!」

言いながら、少女はバツ! と起き上がる。

「この――」

体をブルブル震わせて、

「破廉恥野郎が!!」

渾身の力であろう右ストレートパンチ（漆黒色の鋼鉄製ガントレット付き）が辰巳の後頭部に炸裂する。

しかし、案外痛くなかったのが辰巳にとって幸いだったろう。だが、ここで『痛くない』と言ってしまったら面倒なことになる、と考えた辰巳は一瞬の判断で演技をすることにした。

「いてえええええ! テメーいきなり何しやがるんだ!？」

もう一度言っておこう。これは演技である。

少女は腰に備え付けていた剣を抜き、辰巳に突きつけた。

グレートソード。

平均的長さは一〇〇から一八〇センチメートルもする太刀だ。そのため、取り扱い方が太刀さばきというより槍に近い形で使われる。しかし、これはさつき説明したものと違い、見た目はグレートソードに近いのだが、長さは約八〇センチメートルといったところだろう。多分、この小柄な少女に合わせて造られたのかもしれない。

「お、おい!？ 何だその剣は! 待て、不可抗力だあああ!!」

ズサササッ! とごくごくその辺にいる少年、辰巳は尻をこすりながらも後ろへと退避する。

「戯言を申すな! どんな理由であれ、この私に屈辱を抱かせたことを後悔するんだな」

フッフッフ、と不気味な笑みを浮かべる甲冑姿の美少女。

「ちょ、お前表情がない!? って、待て! いいからその剣で俺を団子四兄弟状態にしようとすんな! 不可抗力だって言っただろ!」
しかし、そんな反抗は今の少女には通用するはずがなかった。

「ふん、せいぜい神に懺悔でもするんだな。ま、貴様は毎日お祈りらしき儀式もやっていないようだが」

物語の始まり（後書き）

二重投稿作品ですが、よろしく願います。

この世の不思議（前書き）

感想出来ればください

この世の不思議

しかし、痛みは無かった。

あるのはただ無情にも過ぎていく時間のみ。しばらくたっても何の変化も起きないため、辰巳は思い切って目を開けた。

そこには――

「なぜ、なぜ当たっていない？」

驚いている少女だけだった。

達也は疑問に思う。

（何が……？）

思わずあたりを見回すために首を動かす。

ふと、右を向いた時、辰巳の目には玄関のタイルが黒こげになっている箇所が飛びこんできた。

「――ッ!？」

直感だけで、考えることも必要なしで分かった。

コイツは普通じゃない。

さらに追撃を受ける、と思った辰巳だったが、少女がとった行動は真逆だった。

「チ！ まあいい。それより、ご飯を頂けるかな？」

下げた剣を腰に備え付けている鞘に戻すと、少女はそのまま辰巳を見下ろした。

しかし、辰巳的にはこんな場合じゃなかった。

ふざけんじゃねえ！ の一言でも言いたい気分、状況なのだが、今そんなことを言ってしまったら人生が終わってしまう。

つまり、

今ここでは少女には逆らわない方がいいということが辰巳の中で結論付けられた。

そういうことで、案内することになったのだが、もうおんぶをする必要は無いらしく、少女は普通に立っていた。

台所は玄関を上がり、そのまま真っすぐ行った所にある。そこに四人がけの木製のテーブルが設置されていた。

どうやらもう既に、先ほどの事情を聞いていた辰巳の母は、台所にて調理を開始していた。

「母さん、連れて来たけど」

背後を警戒しながら辰巳は言う。

「ん？ あらそう。じゃあ座つてるといいわ」

後ろにいる少女のことはスルーで、母は席を勧めた。

「ではお言葉に甘えて」

言葉通り、少女は席へと座った。

さすがに辰巳にあんなことをさせた相手だ。母をあんな危険要素満載な美少女さんと二人きりでいさせるなんて到底出来るわけがなかったみたいで、辰巳はその少女の反対側の席を取った。

幸運なことに、まだ学校までに時間はあった。

しばらくすると、料理を持った辰巳の母が辰巳たちがいるテーブルへとやってきた。

「ごめんね、こんなつまらないものしかなくて……」

本当に申し訳なさそうな顔をする辰巳の母。

（いや母さん、こんな得体の知れない服装をしたヤツに料理を出してやるだけでもすごいことだぞ）

対して、辰巳は少女のことを警戒していた。

「いえいえ、そんな。頂けるだけで有難い事ですよ」

料理を受け取った少女は、目をキラキラ輝かせながら料理を受け取る。

母は辰巳の隣の席に座り、

「（どうしてあんなのに料理上げるんだよ）」

少女が母の持って来た料理にガツッしているうちに、辰巳は母に小声で言った。

「（あら、あなたがここに連れて来たって事は、それなりに信頼できる人なのでしょう？　だから、よ）」

（いや、連れて来たっていうよりは、あんな事をされて強制的に連れてこされたというのが正しいんだけど、何か変な事もあったし、どうせ信じてもらえねーだろうし。はあ、今日の運勢最高だったのに、逆じゃねえか）

はあ、と溜息をついた辰巳。

「そっぴゃあ、名前は？」

味噌汁を飲んでいる少女に辰巳は尋ねた。

まあこんな状況で聞くのは危険を伴うだろう。しかし、そんな危険を冒しても聞かねばならない事が少しならずあるのだ。

「ん？　名前か？　私の名前はコロスーゾーヴァルキリーだ」

不思議の始まり

瞬間、辰巳の頭の中で危険信号が発していた。

（いや、今何か変な単語混じってなかったか！？　もしかして日本語ではそういう意味なのかもしれないけど、別の国では違う意味ってことか？　どっちにしる危ないな。名前を付けた親の気がしれねーぜ）

内心、冷や汗をかきまくっているのだが、まずはこの少女の名前が分かっただけよしとしよう、と勝手に結論を出す。

「いや失敬。噛んだ。正しくはセラフィーナー・ヴァルキリーだ。まあなんだ。長いからセラフィとでも呼べばいいだろう。こちらはそんな気にしておらんからな」

間違えるな！！　と辰巳は叫び、名前に関する疑問は消え去った。言い得終えると、セラフィと名乗る少女は終盤の野菜炒めへと箸を伸ばしていた。

しかし、まだ大いなる疑問が他にあった。辰巳はその疑問点を探すべく、頭をエンジンのようにフル回転させ——る必要は無かった。それは、服装だ。どう見たっておかしいこの服装。

漆黒色の甲冑に、胸、腕、腰、足といった重要な所にしか着物を付けていないのだ。そんなの、誰もが疑問に思っべき事だろう。

「それで、セラフィさん、でいいんだっけ？」

「いや、呼び捨てでいい」

「・・・セラフィ、何でそんなその——」

動かしかけた口を一旦止める。言にくい、と考える。何でそんな格好してんだ？　と聞けるわけがない。そんな事が平気で聞ける方がおかしい。いわゆる無神経というやつだ。

「何だ？　そんないちいち言葉を区切るな。こちらとしても何だかイライラするんな。何でも聞いていいぞ。こちらとしてもやはりその方がいい」

「じゃあ聞くけど、何でそんな服装なんだ？」

（まさかコスプレなんて事じゃあるまいし）

その質問に、セラフィは躊躇することなく、

「ああ、何だその程度の事か。私はてつきり貴様が私の事を変な目で見てその辺のホテルにでも連れて行ってあんなことやこんなことをさせるための口実でも言うんだと思っていたのだが」

言った瞬間、辰巳の母の見つめる目が肌身も凍るほど冷たくなった。

「そして――」

「分かったもういいから、俺が聞きたかったのはその程度のくだらないことですから。もうそれ以上何もいわないで！」

泣きつく辰巳。なんだか一方的にやられているように見える。

「そうか、ならやめよう」

言つと、セラフィは野菜炒めを食べ終え、お茶をすすっていた。

「この服についてだったな」

お茶を飲みえ、ようやくセラフィは先ほど辰巳に聞かれた質問の回答にようやく着手した。

「これはその、英国騎士団の制服兼戦闘服というのだがな、決してコスプレというような不純な目的のために作られたのではないぞ。

ただ、英国騎士団の団長がこういう特殊な趣味を持った人であって私が独自に制作したものではないっ！ 決してだ！」

顔を青森産のリンゴのように真っ赤にさせたセラフィ。

（貴様、今世界中のコスプレイヤーの人たちを全否定したぞ！？）

心の中では絶叫しているのだが、辰巳はそういう風な趣味は持ち合わせていない。

「てか、何だ？ 英国騎士団って………？」

真っ赤な顔を深呼吸で落ち着かせ、セラフィは答えた。

「ふむ、英国騎士団というものは、主に世界のバランス、つまり平和を乱さぬように世界の裏で暗躍する組織であって、その行動範囲は全世界にも上っている。そのため、世界にさまざまなパイプも築

き上げている。まあ、主な活動は大雑把に言っしまえばこんなものだ」

「裏でつて、警察みたいなもんか？ 例えるならアメリカの『CIA』とか『FBI』みたいなさあ——」

まあそんなの当たり前か、と思って答えた辰巳だったのだが、セラフィの顔色が突然射生き生きした感じになった。

「ふん、そんな表そうちの小規模な組織と一緒にされては少し困る。『CIA』などという極小規模範囲でしか活動できない組織とな・・・」

（また言っちゃったよコイツ。全世界の『CIA』『FBI』で働いている人の事全否定しちつまたよ！！）

また、心の中で絶叫している辰巳。

しかし、そんな辰巳のことなどお構いなしに、セラフィは話を続ける。

「それで、この頃妙な組織が現れたのだ。大抵の事ならすぐにかたがつく。しかし、この組織はそうはいかないのだ。私もよくはその組織については知らない。私は下っ端に近い存在だからな」

妙な組織。英国騎士団は、大抵の事ならすぐにかたがつく、とセラフィは言っていた。その大抵のことと言うのはテロリストの即殲滅。盗まれた絵画作品の回収といった、そう簡単にはいかない事柄ばかりだ。テロリストの殲滅といっても作戦という名のトラップを二重三重と仕掛け、突入し、殲滅ではなく、指令を受けたら即出勤し、あっさりと殲滅するということでの事で、だ。

そんな凶悪なテロリストをもあっさり殲滅させるような組織が、そう簡単には行かない、と断言しているのだ。

「じゃあ、お前はその組織を追って、ここまで来たってことなのか？」

「いや、そうであるのだが——」

質問に言葉を濁すセラフィ。

「ってことは、朝お前が倒れていたのはその組織に追われて、やら

れたというのか？」

つまり、それはこう解釈することもできる。

朝何時に襲撃されたのかまでは定かではないが（朝かも分らないが）、まず、セラフィが襲われたというすると、ここ近辺でということになるだろう。さすがに襲われた状態で何キロも歩くことは無理がある。となると、やはり、ここ近辺で襲撃されたということに間違いは無いだろう。

つまり、

まだこの近くにその襲撃者がいるということになるのだ。

しかし、襲撃されたと仮定したとしても、その当人であるセラフィに襲われたような外傷は見当たらなかった。

「いや、確かに、襲われたと解釈するなら、そういう考えも浮かぶであろうな。だが、違う」

セラフィは辰巳の発言を否定し、自信満々の表情を顔に浮かべ、こう言った。

「私は英国騎士団から給付される今月の金をすべて使い果たし、拳句の果て、今月の食費が無くなってしまったのだッ！！」

（ようはただ単に最初調子こいて金を使いすぎたってところか、まあ簡単に言つとドジったってことだな）

思った途端、

「まあそういうことだ」

辰巳は口を開いていないのに、セラフィがまるで辰巳の心を読み取ったかのように言った。

辰巳の母は、『何でこの子独り言言ってるんだろう？』といった感じの表情になり、辰巳は内心疑問符がたくさんでて、訳が分からなくなっていた。

（つーか今心の中読んだ？ でも、そんなの本当にありえんのか？ もしかすると、ただ自分で考えていた事が口に出て偶然被ったってことも——）

「それはないな。私は確かに貴様の心の中を読んだ」

即答だった。

セラフィは食事を食べ終え、腕を組んで言ったのだ。

「まあこれは私たちにとってごくごく当たり前の技術だ。そんな驚くことは無い」

（いや、当たり前前の技術って、そんなの――）

思わず顔を苦くする。

「え？　ちよつと、たっちゃん、さっきからどうしたの？　顔色悪いわよ？」

たっちゃんとは家族内の愛称だろう。そこに、嫌味度マックスの顔色になったセラフィが会話に入り込んでくる。

「ふん」

鼻先で笑った。

嫌な奴だ、と思う辰巳。

人生そんなもんだ。

顔を真っ赤にさせ、俯いていると、

「私はこれで失礼させてもらう。おいしいご飯すまなかったな」
言い、もう一度辰巳のことを見た。

「たっちゃん……くっ！」

また笑った。

立ち上がり、出て行こうとするセラフィ。

（早く行っちまえ）

と、辰巳は心の中で念じていた。

しかし、セラフィは一旦ドアの前で立ち止まった。

「（いかん、つい末端の情報であっても一般社会には流してはいけないのであったな）」

小声でゴニョゴニョ言っているが、少し距離があるため、聞こえなかった。

「すまぬがちよつと二方に礼がしたいんでな、少し頭をこちらに出してくれはせんか？」

特に断る理由が見つからなかった辰巳とその母。言われたとおり

に頭を少し前に出す。セラフィはこちらに近づき、両手を辰巳たちのおでこにかざした。

瞬間、

「な——ッ!？」

グラリと辰巳と母の体がふらつき、倒れた。そのまま、辰巳たちの意識が暗闇へと消えていく。

（一体、何が——？）

辰巳の意識は消えた。

不思議が去った後（前書き）

今回は結構長いかも

不思議が去った後

第二章

1

「・・・・・・・・!!」

辰巳は家の前の道で意識を取り戻した。

何も覚えていない、ただ平穏な風景が目の前には広がっていた。しかし、なぜか辰巳の中はモヤモヤとした違和感が残っている。

（そついやあ、学校行かなきゃ・・・・・・・・）

そんな違和感もいず知れず、辰巳の頭には『学校に行く』という当たり前の事が浮かんでいた。

学校に着いた辰巳は教室に入った。

室内はガヤガヤと騒々しく、どうやらもうすぐ担任の磯部が来るのだろつ、と辰巳は適当に考えて席へと向かった。

窓際の席に着くと、後ろから声がかかった。

「なあ、お前にしちやあ珍しいな、ショートホームルーム始まる直前に学校に着くなんてよお」

ふと、声をかけて来たのは幼稚園らからの付き合いがある葛野。なんだかモテたい時期らしく、髪を週刊誌に載っていたイケメンモデルみたいにしたって、毎日登校している。しかし、その効果は未だに現れない。

「ああ、そついやあそつだな。ま、こんな日もあるさ」

今は春だというのに結構な暑さに見舞われている足丘市、辰巳は暑さを隠しきれず、ネクタイを緩め、シャツのボタンをあけた。

「そつか、ならいいけど」

そう言つと、葛野は事前に開いていたであろう教科書とノートに視線を向けた。

話も終わり、辰巳は急いでショートホームルームの準備を始める。すると、「やっぱ宿題ムズいわ、見せてくれよ」と後ろからの救援要請。

「じゃあ、見せる代わりにジュースな」

交換条件を出し、宿題を手渡す。

「サンキュー」

またく、と辰巳は溜息をして、準備を再開する。

それにしても、まだ違和感が残っている。自分でも分からない、デジャブとでもいうのか、そんな感じのものが残っていた。

「やっぱ分かんねーな」

独り言を言つたつもりなのに、どうやら声が大きかったらしく、後ろの葛野に聞こえたらしい。

「ん？ 解んねー問題でもあんのか？ 理科だけなら教えられるぞ。お前は中一のと時から理科だけは解ってねーみたいだからな」

ニヤニヤしながら言ってくる葛野に、辰巳は軽くあしらった。

「ちげーよ。ただ、なんか気になってことがあるもんだから」

「なんだなんだ？ ついに恋愛から無縁だったお前に気になる女の子でも出来たのか。そうかそうか、お前も隅にはおけねーな。誰だ？ やっぱ委員長の瑛理か？ 巨乳派なのか？ それとも――」

声が途切れた。そう知った時、葛野は机にうずくまっていた。

「痛つてーなオイ！！ 殴るこたあねーだろーがよー。だいたい、そんなんだからモテねーんだろ」

余計な事を言ってくる葛野に、辰巳は、

「うつせー。そんな事言ってるお前こそどうなんだ？ なんだか週刊誌のモデルの真似してるのか知らねーけどよ、モテてねーだろ。それよりか、昔より悪化してねーか？」

頭に來たののだらうか、辰巳は激怒した。

「な、なななんだと！？ 貴様、俺に言つてはならない事を言つた

ぞ！ そんなことはない！ 断じてない！ あつたとしても俺は認めねーぞ、だってこの間だって、女子に声かけられたもんっ！ だからそんなの」

「それ、ただからかわれただけじゃないの？ どうせ『三年の葛野さんですか？ キヤー、あれが噂の——』って感じじゃねーの？ お前、去年の夏からその髪型だろ？」

「じゃあ、なんだよ『あの噂の』って、カッコいいからの事じゃないの！？」

ちよつと涙目になりかけている辰巳の友人葛野、ちよつと同情する。

「それはただお前が夏休みデビューしたからだろ。今頃夏休みデビューってないだろ」

もう目の涙腺が崩壊直前の目になった葛野。しかし、そんなことなどに気に留めず、辰巳はさらに追撃をかけた。

「それに、ちよつと髪型変えたくらいじゃモテねーつつうの。まず、お前のファッションセンス、絶対に週刊誌見て決めただろ」

「何で分かったんだ？」

「なあに、簡単なことだ。前は去年からブランド物しか使わなくなっただろ、はら、その筆箱もブランド物。つまり、ブランド物ブランド物って頼り過ぎなんだよ。そのせいか、高いものしか着てなくて、髪と服の一つ一つがあってない。だからだろ」

「そ、そんな——」

さらに涙目になる葛野、なんだか同情してしまふ。

「もういい！ そんな話は信じないぞ！！ この野郎！ よくもこの俺に嘘をつきやがったな。クソが——」

もう悔しくて悔しくてたまらないのだろうか、葛野は辰巳にたてつく。

「何だと！？ 本当のことを言っただけだ。嘘なんかついてねーぞ！」

むぬぬぬぬ！ と両者一方に引かず闘士を燃やしている。そのせ

いか、顔と顔との距離が物凄く近い。もうおでこ同士がくつついている。

その時、

「おい、ショートホームルーム始めるぞ。みんな席に着け」

ドアから入ってきたのは担任の磯部。顔は頼りないのだが、胸部の筋肉はモツコリと膨れ上がっており、両腕の上腕二頭筋は小山のごとく大きい。さらに、服装は黒のジャージのズボンに対し、上は吸水性の高いシャツを身にまとっていた。この磯部には、一五歳の時にレスリング日本代表に選ばれたとか、ほんの少し前、とある日本一の山で月の輪熊と対峙したとか、何だが恐ろしい噂が後をたたない。まあ、よく生徒指導室に生徒を吊り下げて運んで行くという目撃情報も聞く。

入ってきた磯部は、教室を見渡すと、やけに騒がしい場所を発見した。

「おい、そこ。多田野と葛野、静かにせんか。もうはじまるぞ」

二人はようやく磯部が入ってきている事に気づくと、ブワ！とすぐさま言い争いを一時中断し、前を向く。逆らうと説教地獄にでもなるのだろうか。

言い終えた磯部は教壇に出席簿を置くと、

「じゃあ今日は始業式だ。くれぐれも式典中になんか居眠りこくなよ。それと、この後すぐに始業式は始まるから、終わったらすぐに廊下に並ぶように。以上だ」

目で合図したのだろうか、タイミング良く号令を出したのは委員長の瑛理千智、黒い髪につやのある綺麗なロングヘアー、顔はぱつと見たらすぐに覚えてしまいそうなほど明るい雰囲気を出している。なんだかいつも告白が後を絶たないとか。一回、葛野も告白してみたが、ことごとくフラれたのだとか。

磯部に言われたとおり、辰巳たちは廊下に並び、出発した。

向かった先は体育館。『ここは創設以来、一度も手をくわえていない我が校の誇りじゃ』と言うほどである。いたるところに黒ずみ

やひびが走っていた。

（たく、何が『我が校の誇り』だ。壊れたらお終いじゃなーか）
ぶつぶつ呟きながら辰巳は指定の位置に腰を下ろすと、床の冷たい温度が布を通して伝わってきた。

（やっぱ、体育館はこういうのはいいよな）

うんうん、と感心しているうちに、始業式は始まった。

だいたいこういう式典は暇なものだ。先生方の話や校歌斉唱、校長先生が送る、超暇な対談などなど、そんなものが一般的だ。この足丘市立足丘中学校もそんな一般的始業式をやる中学の一つだ。

ぼーと過ごしているうちに、始業式は終わった。

号令担当の先生が声をかけ、みんな立ち上がり、礼をする。

「はあ、やっと終わったよ。暇で仕方ねーや」

列を離れ、前の方にいた葛野の所まで歩み寄っていた。

「ん？ まあそうだけど、暇じゃなかったら何だつてんだよ」

ごもつともな意見が出され、二人で微笑を浮かべた。

辰巳は授業中であることを忘れて、下校している後輩たちを見下ろしていた。

（たく、受験なんてもんがなかったら俺らだつて帰れたのによ、なんだって午後も授業を受けなきゃ何ねえんだよ）

溜息をしながら、窓の外を見下ろし、適当に授業をさぼっていた。しかし、そんな安息な時間はそう長くは続かなかった。

「これ、多田野。私の授業より下校中の生徒を見ているほうが楽しいか？ お前ら三年はもうすぐ受験だろう。集中せんか」

ベシベシと教科書で頭を叩いてくる教師、柴原。

「センセー」

辰巳を叱り終わり、教壇に戻ろうとしているとき、話しかけた。

「何だ多田野」

声をかけたのは辰巳、素朴な疑問を投げ掛けた。

「何で勉強なんてあるんでしょうね」

「そりゃあ、社会に出たら必要だからだろう。ま、お前も大人になれば分かるだろうよ」

質問も終わり、立ち去った柴原、また声がかかった。

「センサー、俺もう電車は大人料金です」

教室中が笑いで埋った。

「あんな、多田野。私が言いたかったのは……」

「あーオッケーです。すいません」

まったく、と柴原は言い残し、授業に戻った。

その後というものの、やはり、辰巳は授業に集中することは出来なかった。それは、暑い事もあるだろうが、そんなことより、どうもなんだか違和感が残っている事が一番だろう。

そんなことで今日一日が終わった。

帰り際、葛野が『カラオケ行こうぜ』と誘ってきたものの、辰巳は軽くあしらいい学校を後にした。

帰宅した辰巳に待ちつけていた試練があった。

買い物だ。

そんなの昼にいくらでも行く機会があったらうと、反撃した辰巳であつたが、『ごめーん、忘れっちゃったのよ、お願いだから行ってねっ』と手を合わせられ言われたので、さすがの辰巳も断れられずに引き受けてしまったのだ。

(まったく、しかたねーな)

気を取り戻し、覚悟をすえた辰巳はしぶしぶながらも買い物に行くことになった。

展開（前書き）

更新しました。

感想よろしくお願いします

展開

ここら一帯にはスーパーと言えるものが存在しなく、代わりに商店街がある。

辰巳は頼まれた食材を片手に買い物バック、もう片方にはを持ちながら確認していた。

（えーと……人参にじゃがいも、玉ねぎとか。それにウコン、コエンドロ、こしょうにシヨウガ、唐辛子。……？ コエンドロ？ なんじゃそれ、そんなもの一体何に使うんだ？）

せっかく途中までは今晚の夕食のメニューが出来あがっていたのだが、間に変な、聞いた事の無い食材が割り込んだため、瓦解してしまった。

（ま、分かる食材だけ買って、後はいつか）

結論付けた辰巳は、結局分かる物だけ買うことにした。

その時、

視界の隅にふとどこかの城の天守閣を連想させるような綺麗な金色の髪を持った髪がなびいていた。しかし、あんな綺麗な、見たら少し視線を向けてしまってもおかしくないくらいに綺麗な髪があるのに、周りの人たちは見向きもしない。それよりか、その存在自体がないような気もする。

辰巳はすぐにそちらを見た。初めて見るような感覚はない。まるで、一回どこかで会ったような感じがあった。いわゆる既視感というやつだろう。

今までの辰巳ならそんな既視感もなく、ただ、『可愛い』と思うただけで、すぐに買い物に戻るだろう。しかし、今の辰巳には既視感がある。そのせいだろうか、辰巳は足を動かしていた。その見とれてしまうような金色の髪を持つ少女の元へと。

あの少女が朝からの違和感の謎を握る鍵だと、そう本能が叫んで

いる。

2

セラフィは商店街の道を歩いている。

（ここにもいないか。一体どこにいますというのだ、魔王は。大体、その組織の全貌も掴めていないのだろう。なのに、探す必要などあるのか？）

言っていたあの組織とは、朝辰巳たちに言っていた英国騎士団がいま騒いでいるという組織の事だろう。

（にしても……）

セラフィは自分の服装を見た。

全身が漆黒色の甲冑で覆われている。といっても、隙間なくというわけではない。胸、腕、腰、脚といった戦闘において最優先して守らなければいけないような箇所に甲冑が装備されている。『なぜ頭は付けていないんだ？』という事には、きつと戦闘において、やはり、全身に装備していると、重く、邪魔になるからだろう。そうなのか、胸などに装備された甲冑も、極端に小さく、そのせいで肌が太いに露出していた。

きつと、セラフィが気にしていたのはこの事だろう。

（さて、ここにも魔王はいない。出るか）

町の人たちが気づかないのは、セラフィが『無色の掛布』スケルトンカーテンを使っているからだ。『無色の掛布』スケルトンカーテンとは、魔法の一種で、魔力によって自分の姿を外部から見えないようにする魔法だ。さらに、内部から外部への音も遮断する。

そんな魔法を使っている為、人が横を通っても気づかれない。

さてと、と言い、セラフィは町を出ようと、一歩踏み出した瞬間、セラフィにとてつもない魔力の重圧が襲いかかる。

「な——ッ!？」

突然の出来事に、しばらく思考が停止した。

（何だこの魔力は、こんなことがありえるのか？）

進めた足を一旦止め、考える。

（もしかして、これが魔王なのか！？ それなら説明がつくかもしれない。英国騎士団という一国にも等しい組織から逃れているのだ。これほどの魔力を持つ者がいたとしても不思議ではない）

冷や汗を流しながら、セラフィは考える。

（それで、だとするなら、これは確認しなければ。出来ればこんなことはしたくないのだが、仕方がない。英国騎士団という組織に加入あいている以上、その組織の目的に沿って行動しなければならぬ）

魔力の重圧に押されている足に無理矢理力を入れる。

いくら強力な魔力が出ているとはいえ、そこらにいる一介の町人に感知できるようなことはない。あくまで一定以上の実力と知識を有することでようやく魔力を感知できるようになる。

セラフィは魔力が出ていると思われる場所に向かう。

違和感（前書き）

素人の作品ですがどうぞよろしく願います。
出来れば感想もください。

違和感

向かった場所は路地裏にあった小さな公園だ。しばらく使われていないのだろうか、遊具の所々に錆が入っている。

しかし、セラフィはすぐには飛び出さず、物陰に隠れていた。

（落ちて着けセラフィーナーヴァルキリー。見るだけだ。見たら本部に報告。だから落ち着け）

小さく深呼吸をした後、ちよつと顔を物陰から出す。

夕陽に照らされ神秘的雰囲気醸し出している路地裏の公園に、一人の女性がいた。しかし、普通ではなかった。

容姿は、黒に少し茶色も混じっている髪で、目は少し碧眼寄り。ここまででは至つてそこら辺にいなうなハーフの主婦さんなのだが、

（なんだあの服装は、とんがり帽子にマント？）

その服装に驚きを隠せないセラフィ。

すると、

「やつと来たのねえ。まったく、お姉さんをこんな日差しの中に長時間放置させておくなんて、女性にとって紫外線は天敵なんだから」

突如、女性の口が動いた。

「いるのは分かつてるの。ほら、その物陰に隠れている」
俯いていた顔を持ち上げ、セラフィのいる方に向ける。

（分かつて言っているのか？ いいや、そんなはずはない。私は今、
スケルトンカーテン
『無色の掛布』を使っている）

考えているセラフィにさらに女性から声がかかる。

「バレてないと思つてるでしょう。でも、多分それ、なんつたわけ？ そうそう、スケルトンカーテン
『無色の掛布』ね。それ、魔力を全身に覆つて発動させる魔法だから、わたし

みたいなそれを知っている人にやつたら魔力を感知されて意味ないわよ。だから、ね」

（分かっているなら仕方ない、か）

覚悟を決め、セラフィは物陰から出る。

「あら、随分と若いのね。わたしが見てきた中では若い方よ」

「それはどうも。でも、あなたとてそれ相応に若いであろう。それと、あなたは何者だ？ 魔王とでも？」

魔王でなくてもあの魔力を持っているということは、相当の使い手だ、とセラフィは思う。

「まさか、わたしは魔王なんかじゃないわ。わたしは——そうね、ただ言うのもつまらないし。さて、わたしは一体どこの誰でしょうか」

調子良く腰を曲げてセクシーアピール。すると、腕と腕の間にある大きな胸が強調される。

「む………」

少しそれが気になったセラフィは自分の胸を見る。

「………、ない。まな板だ。」

可哀想に。

「ほらほら、早く答えてっ」

「一般人ではないのは解るが——」

しばらく考える。しかし、時間が惜しかったようで、女性から答えた。

「残念、時間切れー。正解は」

ゴクン、と生唾を飲むセラフィ。

「『七人の魔女たち（セブンシスターズ）』でしたー。ちなみに、名前はジョージ・ライリー・スコットです。まあ、ライリーとでも言ってね。よろしくー」

こちらに手を振ってくるライリーだが、その言っていた組織の勢力は英国騎士団と同等、とまではいかないが、それに匹敵する。しかし、大勢の人によってではない。組織の名前にもあった七人。そ

の人数によつて構成されている。わずか七人で一国にも等しい英国騎士団と匹敵するほどの勢力を持っているのだ。

「な——ッ!？」

セラフィは驚きを隠せず、思わず一步後ずさる。

そんなやつが一体、英国騎士団の末端の私に何があるというのだ、とセラフィは疑問に思う。

「そんな驚くことはないわよ。別にわたしはあなたと戦いにきた訳じゃないからね。戦ったって、おもしろくもなんともないから」

その一言で、セラフィは多少安堵を取り戻した。

「まあ、どうしても戦いたいつて言うのなら、やってあげてもいいけど」

その言葉に一瞬、ビクツ、と肩を震わせたが、『いや……』と恐る恐る否定した。

ところで、本題に戻ろう。なぜ、七人の魔女たち（セブンシスターズ）という巨大勢力の一人が英国騎士団の末端であるセラフィに接触してきたか、ということだ。

セラフィは英国騎士団内で、『候補者^{カデット}』という枠組みに値する。

それは、英国騎士団内では末端——つまり、雑用係りというふうにもなる。だから、そんな雑用係りであるセラフィは『魔王搜索』という危険な任務につかされている事はおかしいのだ。したがって、それほどまでに英国騎士団は焦っている、と解釈できる。それだけの時間、その英国騎士団を騒がしている組織は強力かつ隠密機動に特化しているという事になる。長年——とまでいかないが、長い間その組織を搜索している英国騎士団だが、今尚、組織の全貌どころか組織名さえつかめていない。混乱しているのだ、英国騎士団は。そんな中、これだ。末端に巨大勢力の一人が接触してきて、もしかしたらこれを機に、英国騎士団を七人の魔女たち（セブンシスターズ）は英国騎士団を潰そうとしているのかもしれない。もし、潰そうと考えているのなら、とんでもないことになる。英国騎士団は、世界に数多のパイプ、つまり繋がりを持っている。その繋がりとは時

に世界経済をも影響しかねない。そんな組織を潰してしまつたら世界恐慌なんてレベルの問題ではなくなる。それを意味するのは世界の終わりだ。そうなると各国の政治が崩壊する。それほどまでに影響力を持った組織なのだ、英国騎士団は。

「それにしても、英国騎士団もあなたみたいな候補者まで搜索に駆り出されるなんて、切羽詰まってるのね」

ライリーは、近くのビルの壁に立て掛けてあつただろつ箒を持つと、セラフィの方へと足を動かした。

「——！！」

思わず一歩後ずさる。

無理もない。あんな恐ろしい存在が近くに寄ってくるのだ。怖く
なつて当たり前。

「ちよつとお、別に戦うなんて言つてないのにその反応はないんじゃない？ 泣いちゃうわよ」

ライリーは普通に言っているが、セラフィにとってはそんな場合ではないのだ。どんなに優しく接していても、結局は敵、しかも恐ろしい敵。悠々とした態度でいられるほうがおかしいのだ。

近くまで寄つたライリーは、持っている箒をクルッと回し、地面に柄の方を叩きつける。タン！ と快音が広場に響き渡り、その後しばらく音がなくなる。

「さて、ちよつと時間を使いすぎたようね。今から本題に入るわ」
今までの目とは対照的にライリーの目は真剣味を帯びていた。

「まあ、別にあなたではなくても良かったんだけど、近くにいたからあなたに言うわ」

「何を………？」

「それを今から言うのよ。焦らないで」

片手で焦るセラフィを抑える。

「さつきね、まあ、さつきつて言つても数日前なんだけど、仲間から情報が送られてきたの。で、立場的に下であるわたしが、その情報を英国騎士団の誰かに渡してこい、つて命令されて、どうせ本部

に持ってっちゃったらそれはそれであなたたちから総攻撃を食らうでしょ？　それで、幹部クラスの奴等に渡しに行っても何だかんだでどうせ攻撃食らうし、結局のところ、あなたみたいな下っ端くらいがちょうどいいのよ。どうせ、一人で行動してんでしょ？」

はあ、だから英国騎士団みたいな堅苦しい組織は嫌なのよねー、とため息を重く付きながら語るライリー。どうやらいろいろと難関を乗り越えてセラフィを選んだようだ。だがしかし、その事よりもまずセラフィが驚いたのは別だ。ライリーは確かに言っていた。『立場的に下であるわたしが』と。それはつまり、まだまだ上がいるということになる。あの吐き気を感じさせるほどの魔力を持っているながらも、それでも、まだ立場的に下。まったく、本当に、恐ろしい組織だ。

「それで、情報とは？」

やれやれ、とセラフィの前で呆れ返っているライリーに、セラフィはその行動に終止符を打った。

「ええ、ちよつとした事——ではないわね。まあわたしたちにとってはちよつとしたことだけど、あなたたち英国騎士団にとっては莫大な価値を持つ情報なのは間違いないわね。絶対に。それで、その情報を持ち帰ったあなたは間違いない出世できる。どう？　あなたも早く高いくらいに登り詰めたいんでしょ。だったら、はい、あげるわ。わたしたちが持っていたとしても宝の持ち腐れだもん」

話終わるとライリーは紫色の奇妙なマントのうちポケットに手を忍び込ませる。

（まさか武器を——ッ——！）

考えたセラフィは、腰に装備していた全長八〇センチメートルほどの剣の柄に手をさしのべた。

「違う違う、違うわよ。武器なんか持ってないもの。丸腰、大丈夫よ。武器といってもそういうのはこの箒くらいだから」

ライリーは視線をセラフィから手中にある箒へと向けた。

ま、せいぜい使えるとしても空を飛ぶことくらいなだけだね、

とこの筈の愚痴を言う。

「それで、これがさっき言った情報」

止められていた動作を再開するライリー。マントの内ポケットから出てきたのは封筒。A4サイズほどの大きさだ。中に何か入っているのだろうか、少し厚みを感じられる。

「これが英国騎士団にとって莫大な価値を持つ情報だと？」

受け取ったセラフィは、目の前に巨大勢力の一人がいることも忘れて封筒に視線を落とす。

「そう。あなたも早く出世したいんでしょ？」

それは当然の気持ちだろう。誰もが出世して偉い立場になって、お金を稼ぎたい、そう考えるのは人間の真理だ。

が、しかし、セラフィの回答は違った。

「いや、それは無しとしても、この情報は戴いておこう。この組織に加入している以上、目的に沿って行動しなければいけないからな」
この場の雰囲気慣れたのだろうか、少し表情が冷静に見える。

「あら、不思議ねえあなた、英国騎士団の輩は全員金にしか興味がないのかと思ってたのに」

「それは少し誤解だな。さすがに皆全員がそういう思考を持っているとは限らない。ま、いないとも言いきれないが……」

封筒に落としていた視線をライリーに向けた。

「さすがにそうよね、謝るわ。で、開けないの？ その封筒」

ライリーは筈を持っていない右手でセラフィが今持っている封筒を指差す。

「いや、これはまず本部提出だろうな。私はあくまで末端の人間、こんな大それた情報など今後目を通すかどうか」

「いいじゃない、別に。言わなければいいだけでしょ？ あなた少し真面目なだけじゃない、さっきから見ていると、だから、ほら」
ビリ！ と勢いよく封筒の端を破く。

セラフィはその光景を見てしばらく啞然とする。

（なぜ、なぜこの人がこの写真に写っている！？これが、本当に真

実なのか!?)

セラフィはなぜ、なぜ故意になかったにせよ、この封筒の中身を見てしまったんだ、と後悔という名の渦で泣き叫ぶ。

そこに――

ふざけるな

3

多田野辰巳は裏路地をさらに入った裏路地にあった古びた公園の前の物陰に身を潜めていた。

辺りは夕陽の光で覆われている。辰巳は母が怒って待っていました。んように、と祈っていたかったが、今はそんな状況ではなかった。さきほどあの金髪の少女を追っている途中、いろいろと思い出した。（いや、朝の事はある程度思い出した。未だに信じられないけど。やっぱドッキリとかじゃねえんだろうな）

辰巳はあんな非現実的なことをすんなりと受け止められはしなかった。すんなり信じたはそれで恐ろしい。

辰巳は勇気を出して物陰から顔を出し、夕陽色に染まった公園を見る。

そこにいたのは二人の人影。だが、一人は知っている。朝、辰巳を奇怪な術で攻撃したあの少女だ。

もう一人は――

（なんだあのコスチュームは。やっぱ何かの番組の撮影だったんじゃないか？ 紫色のマントにとんがり帽子って。いや、でも、スタッフがいねえなあ、もし、これが本当に番組の撮影だったのだとしたら、普通、機材とかが必要なんじゃねえか？ そうなればその機材とかを運ぶ人材が必要だ。だとすれば、番組撮影の考えは無しか。って、じゃあ二人組の嫌がらせ行動！？ それって犯罪じゃね？ くそー、あの野郎騙しやがったな！）

怒りで思わずビルの壁を叩く。ゴツ、という鈍い音がなった。

あちらの二方に聞こえても不思議ではない音の大きさだ。

（やべ、聞こえる――！！）

だいたい、こういう場面では気付かれないのが相場だろう。が、

今回は違った。聞こえてしまった、的中してしまったのだ。

まず、最初に気が付いたのはとんがり帽子を被っている女性だ。帽子から少々茶髪混じりの背中まで届く長さの髪が風に逆らうことなくびいている。

女性は辰巳のことを見つけると、すぐ目の前にいる少女——名はセラフィに話しかける。

（やつちたまった。なんかされんぞこれは）

こう考えた瞬間から辰巳の体中から冷や汗がブワ！と滲み出る。ここでバレてしまったとしても、のこのこと出るわけにはいかない。危険だ。例えるなら、お母さんから『知らない人に着いていっちゃだめよ』といって、着いて行ってしまうくらい地味に危険だ。話しかけられていた金髪の少女セラフィは、言われるや否や、こちらに険しい表情を浮かべながら歩みよ寄ってきた。

（もうだめじゃん！）

（いや、ここで逃げたほうがいいのは分かってる。でも、ここで逃げたら男じゃねえ——！）

心底諦める辰巳。仕方なく物陰から出る。

無駄に男気を出す。

しかし。

（やつば、足の震え止まんねー）

やはり無駄だ。

「なぜ貴様がここにいる？」

こちらに近づき、距離が縮まった所で、セラフィは尋ねた。

「なぜ、つて着いてきたからに決まってるんだろ」

当たり前で、この質問にマッチする解答だったのだが、セラフィの顔の険しさは変わらない。

「そうではない。私は確かに『無色の掛布』スケルトンカーテンを発動させていた。にもかかわらず、着いてきた？ ふざけるんじゃない！ しかも、なぜ朝消した記憶が戻っている」

グバツ！ とセラフィは辰巳の胸倉をわし掴みする。

「知らねえよそんなこと、第一、それ以外の理由なんてあるわけねえだろ！　記憶については朝から違和感があつて疑問に思つてたけどよ、お前を見てから消えたんだよその違和感が」

辰巳は冷静に答えるが、セラフィは納得できていないような表情のまま、

「そんなはず、あるわけが——」

少し迷つた後、助け舟を求めたのだろう。キョロキョロ首を動かし、誰かを探す。

「ライリー。ちよつとこつちに来てくれ」

辰巳を掴んでいた手を話すと、ライリーと呼ばれた女性を見、こちらに呼んだ。

「なにい？　大体あつちかで聞いてたけど、どういうこと？」

近づいてきたライリーは、テンポよく篇を回している。

「いや、そんな大それたこと——ではないと思うのだが、少し引つかかつてな」

言い、顎を擦る。

「ん？　確か『何で着いてきた。記憶が戻つてゐる』って事よね。でも、記憶に関しては分からないわ。だって、もし、その記憶を消したつて、かけられて当の本人はその事さえ忘れちゃうんだからね。だから、その答えは単にかけわすれたんじゃない？」

「そんなことは無い。しつかりとやつたはずだ」

「だったら、かけ忘れたんじゃない？　だって、確認しなかったんでしょ？」

「それはそうだが、大勢力の一人であるあなたがそんな考えでいいのか？」

「いいのよ別に。あんな組織、強けりゃあ入れるんだから」

辰巳には意味不明の会話を繰り返しているセラフィとライリー。頭が混乱してくる。そのため、辰巳は質問をした。

「すいません。あのー、先ほどから一体何のお話をされているのでしょうか？」

思わず敬語になってしまう。

「ふーん、本当に分からないの？」尋ねたのはライリー。「あなたの事についてにきまつてるでしょう」

「何か俺しました？」

「何って、貴様についてだといっておろう。何を戯言を」

「貴様についてって、だから、俺、何かした？」

本当に何が何だか分からない。惚けてもいないし、ふざけてもいない。いたってまじめだ、と辰巳は思う。

が、しかし、セラフィは徹底的に辰巳に問いかける。

「だから、なぜ着いてこられた私はさつきまで見えなくなる魔法をやっていたんだ。着いてくるなんてことは出来ないはずだ。なのになぜ貴様はここにいる」

「だから、さつきも言った。着いてきたって、よ。それ以外に何かあんのかよ」

この発言を聞いて、セラフィはカツ、と頭に血が上る。

「ふざけるのもいい加減にしろ！！」

セラフィは感情に負け、もう一度辰巳の胸倉を掴み、今度はビルの壁まで押して行き、叩きつける。

ゴッ！ という鈍い音が、辰巳の体に痛みを生ませた。

「が——ッ！ 何、すんだよ……いきなり」

その言葉も聞かず、セラフィは掴んでいない腕を振り上げ、辰巳へと振り下ろす。

辰巳はこんな痛みを忘れて目を瞑る。

「覚悟しろ！」

ふざけるな（後書き）

なかなかうまく地の文が書けません

出発の時

覚悟しろも糞も無かった。

痛みが無かったのだ。

辰巳の体には。

不思議な事に、数秒たつてもなんの変化もない。前と同じまだセラフィに胸倉を掴まれたまま、時間が止まっているようだ。

辰巳は恐る恐る目を開ける。

そこにはセラフィの腕があつた。目の前に。正面に。止まった腕が。

しかし、良く見てみると、それはセラフィが故意に止めたものではなかつた。

少し奥にいたライリーの手がセラフィの振り下ろした腕を掴んでいたのだ。

（助かったのか………？）

敵か味方か。ましてやそんな事も関係の無い人が助けたのだ。少しは疑問に思う辰巳であつたが、まずはセラフィの脅威は去つた。そのことに安堵する。

「駄目でしょう、そんな暴力を一般人に加えちゃ。英国騎士団は一体何を教えているのかしらね」

掴んだ腕を話さずに、微笑を浮かべて話すライリー。その口調には多少、恐怖を覚える。

「な、離せ！」

セラフィが振り払つた腕の攻撃を、ライリーは後ろへ飛び退け、それを避けた。

「つとつとつと、荒いわねえ。若さが表に出ちゃってるわよ」

余裕の笑みを浮かべる。

セラフィは少し反省した趣を見せ、重たげに口を動かした。

「………、すまない、つい頭に血が上ってしまった」

「分かればよろしい」

よほど気分が良かったのか、一見そこらにいる美人女性的な女性——ライリーは胸を張り、鼻を高くする。

そこで、孤立感を感じた辰巳は啞然として見ていることしかできなかった。セラフィに掴まれた手は離されたものの、まだ多少壁に激突した時に生まれた痛みは生きている。何が何だか分からない状況だ。

「……………」

何も分らない。言えない。そんな状況下で、辰巳はただ立ち尽くしている。

そこに、セラフィが冷静さを取り戻し、また辰巳に尋ねた。

「ふうー、もう一度聞こう。本当にただ、着いてただけなのかな？」

「そ、そうだ」

さつき壁に押し付けられた時、圧倒的な力で押しつけられた。その事にビビりながらも、威厳だけは保とうとする。

本当に、無駄に努力をする。

「本当はかけ忘れてたんじゃない？」

そこに、セラフィが考えているときにライリーは言う。

「そしたら、この市の人たちの晒しものじゃない。恥ずかしい」
プツ、と笑う。

それに、セラフィは頬を赤らめ下を俯く。しかし、すぐにリズムを取り戻し、話し始めた。

「いや、それはない。なぜならその人たちは私を見ていなかった。つまり、見えていなかったということだ。いくらなんでもこんな奇抜なものを着こんでいる以上、気になり、見てしまうはずだ。したがって、かけ忘れたという線はないだろう」

「そう？　ただ、向けるのが恥ずかしかったんじゃない？　奇抜すぎて」

「む……………、これは私の趣味ではないぞ。これは団長の——」

分かってるわよ、とライリーはセラフィの言葉を遮って言う。

「ま、それで、そのコ的事はいいの？ 何か暇そうよ」

言われてみれば、とセラフィは言い、辰巳の方を見てみる。そこには話の内容についていけなくなり、ただ呆然と突っ立っている一人の少年の姿があった。

「・・・・・・・・」

やはり、暇そうだ。動物園でゴロゴロしているライオンくらいに暇そうだった。

「おっと、これはすまない事をしたな」

（いや、そんな事言っでねーで、もう帰っていいですか？）

そう思う辰巳。実はもう帰りたくなっているのだ。

もう朝からの違和感もなくなり、爽快感溢れている状態なのだが、どうもこの会話などでその気分が無くなり呆然と立ち尽くすただのマネキンと化してしまっていたのだ。

「ねえ、この事は英国騎士団そっちに任せてもいい？ お姉さん、ちょっとこれから用事があるから」

言い、ライリーはあくびをする。

「ああ。では、こちらでやっておこう。少し調査をすれば解りそうだから」

「じゃ、そういうことで」

じゃあね、と言い残し、少し距離を取る。

「御健闘を・・・・・・・・」

わざとらしく一礼する。

瞬間、ライリーの姿が虚空に消えた。

何も無い。そこからいきなり消えた。別にハリウッド映画みたいに車が正面を通り過ぎた訳でもない。ただ、そこから消えた。

辰巳が瞬きしたときにはもういなかった。

その驚きに、辺りの空気は静寂に包まれた。

「・・・・・・・・行っただか」

ふと、セラフィが言う。その顔に驚きは無かった。さっきまで黙

つていたのはなぜなのだろう、と辰巳は思った。

だが、そんな場合じゃなかった。

「ちょ、おい！ 何なんだよおまえら！ 何がどうなって——」
頭が混乱する。

「落ち着け。私はまず英国騎士団に連絡を取る。だからすこし黙っている」

冷静沈着。まさにこの言葉がまさにあう。

「これが落ち着いていられるか！ お前らは何なんだよ。ただの嫌がらせ行動してたんじゃないのか！？ さっきから英国騎士団とかセブン——なんとかとか何の事言ってるんだ？」

「何をバカなことを……。我々はいたって真面目だ。一般人ごときがこの事を知ること自体がバカバカしいことだ」

言うつと、セラフィはどこからとなくケータイを取り出した。

（？ どっから出したんだ？）

さっきまで頭が過熱していた辰巳が疑問に思うほど訳のわからない所から取り出したのだ。

セラフィはケータイの電源を入れると、操作し、どこかに電話をかけ始めた。

プルルルル、プルルルルというコール音の後に、ガチャという効果音と共に誰かが出た。

どうやらスピーカーにしているのだろう。辰巳の所まで聞こえていた。

『はい、こちら英国騎士団事務局ですが——』

「私です。セラフィ―ナ―ヴァルキリーです。はい、担任ですか？ 担任はキツシム・エライダム先生ですが……、そうですあのハゲです」

（おいおい、先生の事ハゲなんて言っているのかよ）

「は、そうですか。分かりました。そうします。では、お願いします」

どうやら会話が終わったらしく、電話を切った。

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・

待つ事数秒。

「という事だ」

「・ ・ ・ ・ ・？ どういうことだよ」

キョトンとする。

当たり前だ。こんなこと言われて理解できる訳がない。先ほど、通話設定をスピーカーにしていたらしいのだが、音量が小さく、良く聞こえなかったのだ。

そのため、辰巳には聞こえなかった。

「何だ。貴様は読心術も使えないのか」

呆れたようにセラフィは言った。

「てか、何だよ。読心術って」

質問すると、セラフィはさらに呆れる。

「何だ。そんな事も分からないのか。呆れたやつだ」

いやいや、分からんのが普通なんです、と心の中で辰巳も呆れる。セラフィは心中で呆れている辰巳の為に、読心術についての説明を始めた。

「読心術というのは単に相手の心を読む、という簡単なものだぞ。なぜわからん」

けしからんな、と吐き捨てるように言った。

「それで、行くぞ早速」

「行くって・ ・ ・ ・ ・どこに？」

唐突の話題路線変更に、戸惑う辰巳。しかし、そんなのも気に留めず、セラフィは口を動かした。

「決まっているだろう——」

当たり前のように、セラフィは続ける。

「イギリス」

出発の時（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます

告白

「は！？ 何冗談言つてんだよ。今何時だと――」

「知るかそんなもん。貴様の個人的事情なんて知った事ではない。

私は貴様をイギリスにある英国騎士団に連れていく義務がある」

そんな事を言っているのだが、時計の針はもう既に五時三〇分を回っていた。

「そっちのほうが個人的事情じゃねえか！ そんな理由で俺は変な所に連れてかれかけてたのか！？」

冗談じゃない、と辰巳は付けたした。

「くだらん事ではない！ 重要事項だ」

「どこが重要事項だ！ ただの誘拐犯じゃねえか！！」

「ええい。くだらん事にいちいち告げ口しよつて。いい加減にしろ！」

「何だとコラア！ こちとりや急いでんだよ！ 夕飯なの！ 晩飯なの！ 生きていくために必要な事なの！ 俺が帰らなきゃ母さん死んじゃうだろ！？ 何だ？ それに見合う理由でもあんのか？」

ぬ、と引き下がる。

「ねえなら帰らせて貰うぞ」

辰巳はズサリ、と後ろを向き、そのまま歩き出す。

考える。このまま帰らせないための案を考える。

（ここで帰らせていいのか？ 私は確かに連れていく、と言った。だったらこんな簡単に帰らせてしまってもいいのか？ いいや、良いわけがない。考える！ セラフィーナ「ヴァルキリー。良い案があるはずだ。だから、考える！」）

必死に考えるものの、やはり、そんな簡単には出てこない。

辰巳はもうこの古びた公園の出口に差し掛かっている。

（このままでは――ッ！！）

その時、ふとセラフィの脳裏にある場面が写し出された。

ここ日本に来る飛行機の中、座席についていた小型テレビで放送されていた恋愛ドラマの一部始終

（これだ！）

もう時間はない。戸惑っている、躊躇う時間もない。言うしかない。

そして――

「そんなの決まっている。貴様が好きだからだ！！」

言った。

すると、辰巳は、出口まで差し掛かっていた辰巳は、動かしていた足を止めた。

（ヤバイヤバイヤバイ。何だ！？ この急な展開は！ 俺はギャルゲーの主人公ですか！？ んなわけあるか！）

自分ですら驚いて、正常な思考を欠いている。危ない気がする。

辰巳は止めた足をまた再び動かそうと足に力をいれる。が、しかし、動かそうとしたとき、先ほどの言葉が脳裏を駆け抜ける。

『貴様が好きだからだ！！』

こだまする、脳内を。

しかたなく、言葉に免じて辰巳は後ろを振り返る。

そこには一人の金髪碧眼の少女――セラフィがいた。

瞳は微かに潤んでおり、男の子の気を誘う。

当の本人は告白される、という未知の質問に、戸惑う。

――一体どうしたものか、と

悩む。悩んだ末に選んだ結論は。

「本当に……？」

もう一度聞く。耳を疑っているのだろう。

その質問に、セラフィハはゆっくり頷いた。

「そうか——」

もう忘れていた。辰巳はもう、夕飯の事、母の事。すべて、今一番大切だと言っていた自分の持論をすべて忘れていた。

「じゃあ、行くよ」

内心パラダイス状態だった。

「そうか！ 来てくれるのか！」

喜ぶ。とびっきりの笑顔だ。

思わず辰巳は鼻の下を指で擦る。

かくして、辰巳のイギリス行きが決定した。

告白（後書き）

おもしろければ幸いです

イギリスへ

訳も分からずその場の雰囲気でこの国際空港零番ゲートに来てしまった辰巳。

「どこだよ、ここ………」

恐怖でいっぱいだった。

何度かこの空港は辰巳も家族旅行などで利用した事はある。グアムだとかそんな所に行くために。大体、こういう空港にはゲートがあり、荷物検査や身体検査などの検問っぽいものがあるだろう。がこの零番ゲートにはそんなものは存在しなかった。その前に人の気配すらしなかった。

暗闇が支配する廊下をセラフィと辰巳は歩いていた。

どうやら、どこかで着替えたのだろう。セラフィの服装はジーンズ生地を基調としたジャケット。下にはピンク色のＴシャツ。そこには何か英語でロゴがプリントアウトされていた。下は膝まであるスカート、ＪＫが着ていそうなやつだ。

そして、静寂を破るかのように、セラフィは言った。

「零番ゲート。我々英国騎士団専用のゲートだ。通常ではここの長でも入れない極秘中の極秘。貴様は幸運だな。ここは都市伝説にもなっているんだぞ」

そんななんでもいいわ！ と反抗する。

そんな会話はすぐに終わり、目的地に到着した。辺りはまだ暗い。しかし、目の前にはドアがあった。ごくごく普通のドア。

「行き止まりじゃねえよな？」

「行き止まりではない」

言っと、セラフィはドアノブに手をかけ、開けた。

「う——！！」

辰巳はドアの向こうからの光で思わず顔をしかめる。

今まで薄暗闇にいた目はそんなすぐには開けられなかった。

徐々に慣れてきた辰巳は、ようやく瞼を持ち上げた。

「ここは——！？」

辰巳の眼下に広がっていたのは広大な空間。今、辰巳たちがいるのはその空間を見渡せるような位置にある二階部分だ。横に視線を反らすと、辺りはソファーなど、待合室と同じような間取りだった。さらに、この部屋には数人の人影があった。

「間に合ったか」

一言言うと、セラフィは近くのソファーに腰を下ろした。

「お、おい……」

見ず知らずの場所で、戸惑い、慌ててセラフィの横に席をとる。

「なんなんだよここは」

「なんだって、ここは零番ゲートだ。ほら、その空間の下の方にあるだろう、飛行機が」

「そうじゃなくて、一体何でこんなものがあるんだって聞いているんだよ」

「ああ、そういう事か。ここは英国騎士団専用空港、通称『裏の空^{サイドエ}』
^{アポート}港[」]

なんだか実感が湧かなかった。いきなりこんなことになって、イギリス行きが決まり、その場の雰囲気に来てしまったのだ。まだちやんとし心の整理というやつはすんでいないのだろう。さらに、そこに追い討ちをかけるかのよいにこれだ。さらに混乱する。

「……」

黙りこみ、少し考える。

（これは本当に現実か？ 夢だったりしねえだろうな。いや、そうであってほしいものだ。さっきは何かその——その場の雰囲気というやつで決めてしまったが、後々になって馬鹿馬鹿しくなってきた）
はあ、と溜息を漏らす。

「何だ、溜息か。寿命が三秒縮まるぞ」

どうでもいいですよ、と呆れながら言う。

その後も特にする事がなかった。

なぜ、飛行機あるのに早く行かないんだ？ という事に関しては
どうやらさきほど飛行機が到着していたらしく、メンテナンス中だ
とのことだ。その証拠に整備員さんが数人、飛行機の下に集まって
会議をしていた。

その光景を眼下に、辰巳は生理的現象を覚えていた。

「どうした。そんなにモジモジしおって」

「トイレ行きたいんだけど・・・」

一度黙りこみ、

「場所が分かんねえんだよ」

「それならここを下に降りた階段の下にある」

頬を朱色に染めながら、セラフィは言った。

「そ、そうか。変な事聞いて悪かったな」

せっせっせ、と辰巳はすぐそばにある螺旋階段を降りた。

降りた先には上からも見えた広大な空間がある。すぐそばには飛
行機が点検整備のためにいろんなコードがはめ込まれている。なん
だか人間の点滴にも見えそうだ。

「トイレトイレ」

首をキョロキョロ動かしながらトイレを探す辰巳。少し我慢の限
界が近づき、内股になっている。

空間内は騒音で包まれており、うるさい。

(ぐ・・・、騒音の振動で俺の膀胱に負荷が・・・)
さらに内股になる。

これではそのうち手を股間の前にかざす羽目になる。

さらに急いでトイレを探す。

その時、

「おい少年！ こんなところで何してやがんだ？」

不意に後ろから声をかけられ振り向く。そのせいで、さらに刺激
が膀胱に加わる。

「え・・・」

そこにいたのは二〇代前半の若い男性。髪は作業に邪魔にならな

いようにスポーツ刈り。生き生きとした印象を植え付けられる。服は作業服に身を包んでいる。

「え、じゃねえぜまったく。ここは関係者以外立ち入り禁止なんだよ」

「何と!!」

騒音で聞こえなかったらしい。

「だから!　ここは!　関係者以外!　立ち入り!　禁止だって言っただよ!」

「え、でもトイレは……?」

セラフィは確かに言っていた、トイレは階段下にあると、それは間違いない、と辰巳は心中で確認をとった。

「トイレ?　それなら上のホールのところだけだ」

「な……!!?」

驚愕の真実にしばらく、羞恥心に耐えながらも、間違えさせられたという怒りの感情が沸き上がって来る。

「あのやろつわざと間違えやがったな——ッ!」

怒りはますますヒートアップし、これをセラフィにぶつけよう、と考えた辰巳。

しかし、そんなことよりもまず解消しなければいけない事があった。

「——それよりトイレ行かねーと!」

内股になりながらも辛うじて歩き出す。教えてくれた作業員の人に軽くお礼をし、その場を後にした。

トイレを無事に済まし、さっぱりと綺麗な気持ちになった辰巳だが、先ほどの怒りは消えてはいない。

トイレを出ると、目の前には英国騎士団の要員がいる。その中の一人、セラフィナーヴァルキリーに近づくと、辰巳は軽く、悪ふざけを振り払うがごとく控えめに激怒した。

「おい。何がトイレは階段下にある、だ。もろここの階にあったじ

やねえか。作業員の人に起こられちゃった」

辰巳はセラフィのすぐ隣のソファーに腰を下ろした。

「いや、まさか本当に行くとは思わなかった。なかなか面白い絵だったぞ」

フフ、と勘に触るような笑みを顔に浮かべる。その表情は今怒っている辰巳でさえも多少反撃するのを躊躇ってしまうくらいの無邪気な笑顔だった。

こうして、このゆったりとした時間はあっという間に過ぎ去り、飛行機の点検が終わった。すると、辺りにいた数人の人が、動き出した。それを見たセラフィは、

「では、私たちも行こうか」

言い、ソファーから立ち上がり、皆が向かっている、辰巳がさっき使用した階段へと向かった。

降りた先には先刻までと違い、飛行機についていた機材的なものは既に見当たらなかった。代わりに、五月蠅い作業音ではなく、静寂が広がっていた。静かすぎて耳がジーとするくらいだ。

飛行機の側に到着すると、どうやらもう既に機内へと扉は開いており、各自勝手に乗り込んでいた。

この光景に、辰巳はここでも不況の影響か？と自分なりに解釈したのだが、多分、ここらにいる人たちは飛行機に乗り慣れているのだろう。

順番が来て、乗り込んだ辰巳とセラフィ。

機内は驚くことに普通のファーストクラスと同じくらい——いや、それ以上に豪華絢爛な座席が広がっていた。

その風景に数秒、啞然とするが、セラフィの一言で、正気を戻し、席に座る。

どうやらここには決まった座席はないらしく、皆自由に、適当に座っていた。辰巳も同じように座る。隣には知らない金髪の男性が座っており、多少緊張はしていたのだが、通路をまたいだ隣にはセラフィが座った。それで、少しなりと安堵を取り戻す。

しばらくし、飛行機が離陸準備を完了し、この広大な空間内を動き出す。

目の前の大きな扉。そこがいきなり開かれ、夕陽と夜の暗闇が入り交じった空の光とも言いがたいものが空間内に流れ込んだ。飛行機が入っていたのは倉庫。見た目はごくごく普通の倉庫だ。

飛行機はそこを出、滑走路にはいる。後、無事に離陸し空へと飛び立った。

イギリスへ（後書き）

面白かったら幸いです

飛行機に乗りました

第三章

飛行機の中は快適だった。

飲み物は常にこのフロアの後方にコーヒー、ジュース、お茶と種類豊富に存在し、菓子類も不十分ではないくらいには整っていた。普通の飛行機のエコノミークラスではこうはいかないだろう。さらに、座席のつくりは革のシート。リクライニング式で前後に操作も出きる。そんな中、多田野辰巳は横の男性の鼾を聞きながらイライラと我慢していた。

現在の時刻は日本時間にして午後一時。

隣の男性は離陸するや否や、早々に床についてしまった。

「ぐ、があークウー」

こんな感じにだ。

隣の席に座るセラフィに助け船を出したのだが、あつさりと振り払われ、今もなお、この状況が続いているのだ。すると、奥の、辰巳たちから見て前方から一人の女性が出てきた。女性の手にはカートが握られており、そのカートには十数センチほどの箱が積まれていた。

女性はそれを、一人ひとりに手渡していく。辰巳の所にもそれが来て、女性から聞かれる。

「どうやら機内食らしい。」

「ビーフとフィッシュ、どちらがよろしいでしょうか？」

笑顔で聞かれた辰巳は少し鼻の下を伸ばしてしまうが、はっと正気を取り戻し、答える。言ったのはビーフにした。

すると、

「では、私はフィッシュ！ お願いします！」

言ったには隣にいた金髪の男性だ。髪に短く整えられている。

辰巳は一瞬ビクツ、と肩を震わせたが、飛び上がるほどではなかった。

辰巳は先ほど解答したビーフを貰い、前の座席に取り付けられているテーブルをセツトし、そこに機内食を置いた。

それから数分、早々に食事を終えた辰巳は暇になる。

そこで、ぼーと辺りを見回すと、何やら違和感らしきものを感じた。それは朝、感じたようなものではなかった。ただ、偶然と引つ掛かる違和感。しかし、皆はそれを気づいていないのか、各自勝手に娯楽をしていた。

(そういやあ……)

解った——ような気がする。

それは。違和感は。

フロアにいたときの人数より断然多い気がしたのだ。

不安に思った辰巳は通路を挟んだ隣の席に座るセラフィに小声で話しかけた。

「(おいセラフィ。何だか人数多くねえか? 特に黒服の奴等。本当に大丈夫なんだろうな?)」

なるべく周りには聞かれぬよう、座席から身をのりだし、セラフィの耳元で言った。

セラフィはその質問に少しの時間考え。ふむ、と結論を出したのか、それは本当は分からないのかは辰巳は知るよしはないのだが、セラフィは思案をまとめ、閉じていた口を開いた。

「だいたいこの事は予想できた。何、心配するような事ではない」

周りへの気遣いなど気にせず、多少は自信がある顔で言った。

それに、辰巳は無理な追求をせずに席に戻った。

旅は順調に進んでいた。別に何のトラブルも起こることなく淡々と。

辰巳は何となく、本当に何となくため息をついた。いや、何も考

えずにため息をついたというのはないだろう。人間絶対考えずに、という事はできない。考えない考えないと考えてしまえばそう考えているし、寝ているときだって多少なりと考えはしているだろう。それが出るのはきつと、死んだときだけだ。

死んだときだけ、死んだら何もできない。

多分、この時辰巳は少なからず恐怖を感じていたのかもしれない。見知らぬ場所、見知らぬ人たちに囲まれ、さらにはイギリスに行く。恐怖にも似た不安。それを今、辰巳を支配しているのかもしれない。

セラフィは相変わらず静かに座っている。まるで静寂の森の中に佇む一本の大木のような感じだ。

暇になり、仕方なくセラフィに話しかけた時、

飛行機に乗りました（後書き）

面白いと思っていただけたら最高です。

ハイジャック

「テメエら！そこを動くな！動いたらこの銃がお前ら誰かの体に風穴を開けてやるぜ」

へへ、と言う一人の男性。男性の言う通り、その手中には一丁の銃。黒光りしていて、一層に不気味さを強調させていた。

辰巳は突然の出来事に数秒思考が停止した。
ある人は言った。

飛行機事故にあうのは宝くじで一等をとるより難しい、と。ハイジャックも飛行機事故の内に入るの出したら――
(何だよこれ、ハイジャック！？ふざけんなよ。何たって俺がこんなもんには巻き込まれなきゃいけないんだ)

辰巳は憤怒する。

そして、隣の席に座る金髪の男性は未だに寝ている。悠々と。セラフィもセラフィといい、辰巳が視線を向けると微かに顔には苦笑が浮かんでいた。

何があだか分からなくなってきた。

ハイジャックを起こした男は顔に覆面などを着けていない。素顔が丸だし。

その男はまず、辺りを見回すと、手を使って仲間らしき複数の人を呼んだ。その人たちも素顔が丸出した。

男の指示で、辺りに散ったハイジャック犯。

起こした行動は乗客の荷物チェックだ。軽く――多分銃等の武器を所持していないか確認しているのだろう。

それもついには辰巳たちの場所までやってきた。しかし、辰巳はチェックさせるような荷物は持ってきていない。それに、ハイジャック犯は少し困惑する。

「持ってねえ！？チッ、仕方ねえ、探してもねえみたいだし。」

でも、ケータイくらいは持つてるんだろ。出せ」

緊張しながらもハイジャック犯にケータイを差し出す。

「よし、これでチェックは終わったようだな。おい、ちょっとここでコイツから見張ってろ」

確認も終わり、作戦の第一段階が終了したのだろうか、言うところのリーダーらしき男は近くにいた下っ端要員を側に呼び、小さな声で指示を出していた。

説明も終わり、リーダーだろう男は機内の奥へと向かっていった。しまった。

「（おい、これってハイジャックってやつだよな？）」

下っ端要員の隙を見つけて辰巳はセラフィに話しかける。^{はな}

「（ふむ、そういう事だな、直におさまるだろう）」

ハイジャックは天災ですか！？　と思いつきリツツコミそうなところを必死の思い（人間は生命が関わると、とんでもない力を出すものだ）で思いとどまる。

しばらくし、奥に向かっていたリーダーであろう男がこちらに帰ってきて、早々に近くにいた女性を一人無理矢理席から引きずり下ろした。

「いいか、よく聞け。今から俺らに逆らったら乗客を一人ずつ殺っていく。先程、英国政府にも連絡し、身代金を時間内に用意できなかった場合も、一秒でも遅れたら三〇分ごとにお前らを殺していくとも言った。長く生きたければ逆らわず、英国政府の時間内の身代金給付を祈ることだな」

男は苦笑を浮かべると、引きずり下ろしていた女性を解き放し、また、どこかに行ってしまった。

（はあ！？　ふざけんなよ！　何で俺まで巻き込まれなきゃ行けねえんだ！！）

心のなかで辰巳はまた激怒する。

隣を見てもセラフィはハイジャックなど見向きもせず、ただ面白い映画を鑑賞するかのような表情を浮かべている。

隣の男性はさすがに起きたらしく、少し険しい表情になっていた。
その時。

カチャ、とまた新たに黒光りするものが頭に突きつけられた。

ハイジャック（後書き）

面白いと思っていただけでは幸いです

追いかける者

辰巳はその瞬間を見逃しており、音だけで判断した。が、しかし、それが向けられていたのはハイジャック犯の後頭部。しっかりと銃口と頭が密着していた。

「な——ッ!？」

訳がわからなくなり、後ろに振り返ろうとするハイジャック犯だったが、それがさらに強く押し付けられ、動作を封じ込められた。

ハイジャック犯は大人しく銃を床に置き、ゆっくりと両手を挙げた。そのまま先程リーダーらしき男が向かった方向とは逆の方へと誘導していき、姿を消した。他のハイジャック犯も同じだった。それが起きたのはほぼ同時刻、パレードでもやっているのではないかと疑問を抱いてしまいうくらいに綺麗に事が進んでいたのだ。

突然の出来事に、辰巳は啞然とする。

「何、が……?」

呟いた言葉がセラフィにも聞こえたらしく、返答した。

「これがさつき貴様が言っていた奇妙なことの正体だ」

黒ずくめの男たちはハイジャック犯を次々にホールドアップしていき、最初のハイジャック犯と同じ所に連れていく。何とも不気味な光景だ。

全員の連行が完了し、男たちはそろそろの何くわぬ顔で席へとついた。多分、リーダーらしき男の確保の準備でも行っているのだろう。

しばらくし、ようやく件の男がやって来た。男は驚き、周りの乗客に激しく問いただが、何も答えない。完璧にポーカーフェイスをかましている。

「畜生どこいきやがったんだあいつら!! 戻ってきたらブチ殺してやる!」

くそ! と床を蹴り、辺りを見渡そうとした瞬間、男の後頭部に

銃口が突き付けられた。

困惑する。

やはり、男も銃を床に置き、手を挙げ、冷や汗を額に浮かべる。
しかし、男の表情には『負け』というような表情は見られない。
その時、

「我が命は主君のためにあり！！」
そう叫んだ。

合図だったのだろうか、新たな仲間を呼んで捨て身の攻撃をしようとしたのかもしれないし、最後の言葉を口にして、自分から舌を噛み自殺するきだったのかもしれない。

しかし、後者の考えは違った。合っていたのは前者。どうやら、一斉攻撃に出るきだったらしい。証拠に、自殺などしなかった。が、肝心の攻撃は来なかった。

すると、辰巳の隣にいた金髪の男性が静かに立ち上がり、口を開いた。

「ほほう。どうやらその言葉は自殺行為に値する攻撃の開始合図だったらしいね。でも、残念だ。もう既に仲間は全員奥の倉庫へと連行させた。今も数人の仲間が監視している」

「は、バカが。ハイジャックするのにあんな少人数でやるわけがねえだろ！ おい、お前ら、早くコイツらを殺れ！！」

叫んだ。

しかし、何も起こらない。

金髪の男性が口を静かに動かした。

「おっと、何だか君は勘違いをしていないかい？ 私は確かに言っただよねえ、全員連行させた、と。私服で待機していた者共も連行したよ。あの程度で紛れ込んでいたなんて思われたら恥ずかしいよ」

口調は優しげに喋っているのだが、その本心は恐ろしい程までに威圧感を感じる。

「く——ッ——！！」

最後の手段だったのが封じられた。それは失敗ということに

なる。

犯人の顔色が少し苦くなり、しゃがみこもつとした瞬間だった。後ろにいた女性を不意に掴み、自分の前へとつきだした。そう、縦にするかのように。

「へ、甘いんだよお前は。さつさと俺を捕まえておけばよかったものを。お前らだつてコイツの命は惜しいだろ？　だったら！　早く仲間を解放しろ！　今すぐだ」

銃口をさらに強く女性の頭へ押し付ける。

「この程度で終わらせるわけにはいかねえんだ！！　俺たちだつて覚悟決めてやつてんだ！　この程度の計画のズレごときで諦める訳にはいかねえんだよ」

言った。犯人はこの程度のズレごときで諦める訳にはいかねえんだよ、と。これ程までに劣勢な状況に陥つてもまだズレごときで諦める訳にはいかねえんだ、と。もうハイジャック犯に冷静な思考は存在しない。今あるのはただの焦り。もうここから巻き返すほどの方法は思いつくことなどできない、これは断定だ。

「やれやれ困つたものだ」その口調は冷静さを失わなかった。「本当に困つたものだ。何故——いや、どうしてこの組織に入っているか分かっているのかな？　まあ分かるはずもないのだが、聞いておこう。君はハイジャックをしたくてその仲間たちを集めたんだろう？　言い方は変だろうけど。私たちも一緒だ。ある人、家を守りたくてこの組織にはいった。ほとんどは引き継ぎ、みたいな形であろうけどね。まあそういう事だ」

いきなり何やら講義を始める金髪の男性。

「何を言つて——？」

油断することなく、腕で押さえつけている女性にも意識を集中させながら、犯人は聞く。

「つまり、我々は君たち同様、死ぬ覚悟程度はできているんだよ」
空気が変わった。

捕まれていた女性の目付きが代わり、鋭い光が灯る。

瞬間、ハイジャック犯は鳩尾に激痛を覚える。

「が——ッ!?」

不意の出来事に、犯人は何も抵抗できずに肺から空気を押し出され、地面に這いつくばる。懸命に、息を正常に戻そうとするが、そんな時間は与えられなかった。女性は追い討ちをかけるように銃を握った手を蹴り飛ばし、まず、第一の脅威銃を跳ばす。さらに、うつ伏せの犯人の上に乗っかり腕を後ろへ回し、関節技を決めた。

「ゲホ、が、あああああッ!!」

あまりの激痛に叫び声をあげる。

「ふん、まったくこんな人数よくも通ったものだ」

言っているのは金髪の男性だ。通ったというのは多分、あの空港の零番ゲートの事だろう。だがよく通った、という単語に辰巳は疑問を浮かべる。

金髪の男性はリーダーの男を押さえ付けておる女性に指示を投げると、奥の方へと連れていかれた。

金髪の男性は、はあ、とため息を着くと、鋭い目付きで辰巳を睨む。

「で、貴様は何だ？ ハイジャック犯ではないだろう。かといって観光客がこんな所に足を踏み込むわけがない」

その言葉に、辰巳は少し考える仕草を見せるが、解答は思い付かない。横にいるセラフィに視線をそらす。すると、セラフィの表情が何だか和やかになっていることに辰巳は気がつく。

「それについては連絡が行き届いていませんでしたので、私が説明します」

言ったのはセラフィ。口調が変わっている。今はどこかのお嬢様を連想させる。

「? セラフィーナ嬢、お知り合いないのですか?」

さらに、金髪の男性までもが急に畏まった口調になった。

「セラフィ? 知り合いなのか?」

「ええ、知り合いというより私の護衛隊の方です。ですよ、オル

「ミナミ」

追いかける者（後書き）

面白いと思っていただければ光栄です

ワルキューレ

ニコ、と微笑みを見せるセラフィーナ嬢。明らかに少し前までの態度と違う。むしろ辰巳にとっては違和感さえ抱く程だ。

「では お知り合いなのですね」

そう言うのと、いきなりオルコットと呼ばれた金髪の男性は方膝を床につけ、かがんだ。

「失礼なことをして本当に申し訳ない。まさかセラフィーナ嬢のお知り合いだったとは思えなかったもので、私の名前はオルコット」
アシユレイ。そちらにいらっしゃるセラフィーナ嬢の護衛隊隊長をさせてもらっている身だ」

言い、方膝つきの状態のまま、辰巳に握手を求めた。それに、しっかりと握手を交わした。

「それで、」

握手し終えたオルコットは、話の話題を切り替える。

「私がここに来た目的は他でもないのですが——」

急に顔に緊張が表れる。

「解っています。母の事で来たのでしょうか？ もう何回も聞きました。耳にたこができるくらい。また早く家に戻って継ぎなさい、というところでしょう。何回も言っていますが、戻る気はありません、ですので彫っておいてください」

「しかし、セラフィーナ嬢は名家ヴァルキリー家の貴重な後継者。

何としても継いでいただければいいけません」

「それなら妹のミシエルがいるでしょう。私なんかよりミシエルの方が人格、知識は上。これまでに良い条件を持った逸材はいないでしょう？　なのに——」

表情が暗くなる。よほど家に帰るのが嫌らしい。家出少女といった所だろう。

困り果てたオルコットさんはまた言う。

「それなら理由は存在いたします。歴代の当主様を見ていると、全員共通されていることが一つだけあります。もちろん、あなたのお母さまもです。代々我がヴァルキリー家の当主様たちは体のどこかに必ずし同じ紋章クレストが刻み込まれていました。刺青などではありません、生まれつきです。ですから、この事に則り、体のどこかに紋章クレストが刻み込まれているお方が次期当主と決めてきました。それはあなたにしか付いていないと聞かされました。しかし、ミシエル様にはそのようなものは刻み込まれていません」

真剣に話を進める。しかし、その話を止めた者がいた。

「だから何だと言うのですか！？」

もちろん、そんな事が出来るのはセラフィだけだ。

周りの人たちは全員この事など気にも止めていなかった。

「そんな古い伝統にばかり従って、私はヴァルキリー家の当主何かになりたくないと言っているんですよ！！ そんな古い伝統に縛り付けられて何が楽しいんですか！？ 私は楽しくなんかありませんっ！ むしろ滑稽です、呆れます。そんな小さい枠組みに収まりたくないんです！ もっと自由に生きたい！ だから英国騎士団に入ったんですよ！？ そんなにまでして何でわたしの意志が伝わらないんですか！？」

激怒する。それはきつとオルコットに向かつての怒りではないだろう。ヴァルキリー家の、そんな下らないと本人は言っている小さな伝統に憤怒しているに違いない。

そんな光景を見て、辰巳は呆然とする。重ならないのだ。今まで——といっても数時間の付き合いだが、今の今まで辰巳の想像していた、確信していたセラフィの人物像と重ならない。むしろ、当てはまらない方が良いのかもしれないが、まさか、あの真面目そうで堅物キャラを連想させるような行動をとっていたあのセラフィとは思えなかった。

数時間の付き合いしか持たない辰巳がいうのは可笑しな話なのだが、それほどまで印象が狂った。

「もういいでしょう。この話は終了です。分かったのならすぐにこの話には関わらないでください。これは命令です」

しかし、と反抗しようとするオルコットに辰巳は言った。

「別に良いんじゃないやねえか、セラフィをそんなにまで追い詰めなくても。確かに、伝統は大切だけどよ、あくまでそれは伝統と後継者、双方が了解したときにだけでいいんじゃないやねえか？」

その返答に、オルコットさんはそんな簡単な考えで終わるような話ではないのだ、と言って、今回はセラフィの意見を尊重したのだろうか、その場で立ち上がり、一礼してこの機内の最前線の席について俯いてしまった。

「すまない、見苦しいものを見せてしまった。席につくぞ」

いや、と、辰巳は言う。

「俺はアンタを多少なりと信頼して来ている。だから 気分は悪いだろうが少し家についての話を聞かせてもらいたい。良いか？」

辰巳にしては珍しく大人らしい口調だった。

それに、セラフィは頷く。

二人はオルコットとは反対の方向にある席へと腰を落ち着かせた。

それから、辰巳は驚くような事を聞かされた。

そもそも、ヴァルキリーとはワルキューレの英語読みであって、差ほど代わりはないが、重要らしい。ワルキューレは元々、戦場で戦死した兵士の魂を白馬に乗りながらを選び抜き、宮殿ヴァルハラに連れていくという任務を持っている。その

選り抜かれた戦死者は、宮殿ヴァルハラにてワルキューレに手厚くもてなされた。

そんなワルキューレの中の一人、ブリュンヒルデは、フンディング家とヴォルズング家の戦いにて、主であるオーディンの名に逆らい、ヴォルズング家を勝利させてしまった。その為、ブリュンヒルデは神性を奪われ、恐れを知らない男、ジークフリートと結婚させられてしまう。後、ブリュンヒルデはアスラウグという子まで授か

つてしまう。

それが後の、詳しい経緯まで知らないがヴァルキリー家初代当主アスラウグ^{クレスト}「ヴァルキリー」になったらしい。その時既にアスラウグの体には紋章が刻み込まれていた。

セラファイが辰巳に話した会話を簡単には省略するところなるわけだが、未だに信じられない、半信半疑な表情をしているのは辰巳だった。

「まあ、これが私の知っている事のすべてだ、いきなりは信じられないだろうがな」

「いや、もう信じるしかねえだろ、これは。さすがに悪戯の域は飛び抜けているし」

考え、辰巳は信用することになったらしい。

「そうか、なら有りがたい」

「でも、何で俺と一緒にイギリスまで行かなくちゃいけねえんだ？ まあその事に関連付けるつもりはねえんだけどよお、さすがに、ただ着いてきた、ってだけでわざわざ俺までいく必要はないんだろう？」

「そうではないのだ、その着いてきた、という時点でおかしい。前代未聞なのだ」

その解答に辰巳はそうか？ と投げやりに会話を終了させ、ぼーと考える。

さすがにその場の雰囲気に来てしまったことは後悔しているのだが、それについてはもう諦めがいついている。時間は戻らない。だからといって、すべての疑問が消えるわけではない。辰巳がぼーと何となく考えたのは先程セラファイも言っていた、着いてきた事についてだ。なぜただ着いてきたただけなのにこんな大それた行事（？）に行かなければならなかったのか。なぜ着いてきた程度で驚からなければならないいけないのか。そういう事だ。前者は完全に自己責任なのだが、後者に至ってはまったく検討がつかない。セラファイは『無色の掛布』^{スケルトンカーテン}などという魔法を発動させていた、と言っていたのだが、辰

已には何の事だか分からなかった。したがって、軽く考え、この疑問点は消滅した。

ワルキューレ（後書き）

面白いと思っていただけでは幸いです。

到着

——空港出発から約九時間。さすがの辰巳も眠気に襲われ目がウトウトしていた。

「何だたっちゃん、眠いのか？ 寝たければ寝れば良いだろうに。ちゃんと座席はリクライニング式でさらに幸いなことに、乗客の人数も少ないから思う存分にリクライニングの効力を発揮できるぞ？」嫌みからの、からかうような感覚で言ったのだろう。証拠にセラフィの顔がにたついていた。

「別にそんな嫌味混じりで言わなくてもいいじゃねえかよ。眠いもんは眠いんだ」

言うなり、辰巳は後ろに誰も座っていないことを確認すると、座席をリクライニングさせ、目を閉じた。

「・・・・・・・・」

しかし、辰巳は眠れなかった。

理由は簡単、セラフィが辰巳を見ていたからだ。

「・・・・・・・・。お前、そんなに俺の寝顔を見て楽しいか？」

やや危ない思考の持ち主だ、と辰巳は思う。

「いやなあ、確かにその通りなんだが、やはり、もうひとつ理由があるぞ。まあ、これは最初の理由になっってしまうのかもしれないが、可愛いのだよ、たっちゃんの寝顔は」

「・・・・・・・・」

お前は俺より年下だろ！ 絶対に、なにに何だよこの大人ぶった感想は！！ と言いたくても言えない（なぜなら怒らせて大変なことになる）そうだから、ことを頭のなかで叫んでいた。

まあ寝られないのは恥ずかしいからだろう。辰巳は年頃の男の子だ。女の子に寝顔を見られるのはやはり恥ずかしい。

そういうことで、辰巳は渋々座席を移動することに。

移動したのはセラフィのいる座席より少し前の所にある。回りに

は多少セラフィ護衛隊の面々が辰巳に向かって少し冷徹な視線を向けてきた。辰巳はその視線を気づかないフリをしてやり過ごし、眠りに着いた。

「おい起きろ！ 着いたぞ。ぼさつとしているんじゃない！ 早く降りないと未開の地に一人置き去りにして行くぞ！」

物騒な単語に、辰巳は命の危険を感じとり、本能的に起き上がった。

まだ眠く、完全に目は開いていない。

そんな目を擦りながら、

「・・・・・・あと五分・・・・・・」

「ふざけるな！ 着いたんだぞイギリスに！ 深夜のイギリスに。もう貴様は二時間も寝ただろ！ さ、早くしろっ」

ペシ、と頬を軽く叩く。

「ぬぐ！ 痛っ、何すんだ！？」

どうやらハッキリと起きたらしく、自分の頬を軽く叩いたセラフィに怒りの矛先を向けた。

「どうでもいいから早くしろ。置いていくぞ」

そんな事では動揺しないセラフィであった。

飛行機から降りた辰巳は、日本より寒い気候に驚いた。多少日本より緯度の高いイギリスなのだが、そのせいで寒いのだ。

冷たい風が、辰巳たちを襲う。くしゅん、と辰巳は風邪を引いたときのような嚏を一発かました。

そんな辰巳を、セラフィはそこら辺にいる蟻を見るような目と言った。

「そんな薄着で来るからだろう。事前に考えておけばこんなことはならなかっただろうに」

訂正しよう。もっと酷い目だった。

そんなの予想できません！！ と激怒を飛ばし、後ろにいるセラ

フィに前を向きながら言ったのだが、ふと、辰巳は思い出す。

——セラフィも同じ少し薄手の服装じゃなかったけ？ と。

思うと光速の如く後ろを振り向き、反撃をしようとしたのだが、
「は？ 何でお前はジャケット着ている！？」

そう、セラフィはもう準備していたのだ。

セラフィは哀れな辰巳を見ると、ふん、と鼻先で笑い、

「貴様はバカか？ 私には護衛隊がいるんだぞ？ もう分かるだろう」

まさか………ッ！？ と体を反らすと、

「事前に持ってきて貰ったのだよ！」

勝敗は見るまでもなかった。いや、これを勝負と言うのはどうか
と我ながら思うのだが、まあそのあたりは気にせずにやっていこう。
その後の辰巳は同情するほど、酷い有り様だった。

セラフィは防寒具に身を包んでいるのに対して、辰巳は日本の、
しかもこれから夏になるぞー、的シーズンに入りかかっている服装
だ。しかも、イギリスは日本より湿度が低い。その為、鼻も痛くて
仕方がなかったのだ。

これでもか！ というほどに、イギリスの気候に痛みつけられた
辰巳はイギリス某所に存在する空港のゲート付近まで暗いオーラを
纏ったまま歩いていったのだ。

到着（後書き）

面白いと思っていただければ幸いです。

ハッピーな出来事

ゲートにたどり着くと、英国騎士団の要員であろう、いや、要員である複数の人たちは皆がゲートを潜っていく。その光景は何だか妙なものだった。

セラフィもゲートを潜り抜けると次は辰巳の番だ。深呼吸をする、そのまま入っていく。他の面々はもう既にどこかへ行ってしまっていて、近くにいるのはセラフィくらいだった。

そして――

ビビビビ、とセンサーが高々と唸りを上げた。

「へ………?」

すぐさま近くにあった事務室から三人ほどの屈強な警官が走って来た。

呆然とする辰巳、セラフィは珍しく、慌ただしい行動を見せて、「すまん、一応本部には言っていたのだが、貴様にこれを渡すのを忘れていた」

取り出したのはコインほどの大きさがある物だった。どうやら臨時パスの物らしい。

「ちょ、おいセラフィ!? どうしてくれちゃってんの!? 掴まないで、俺怪しいものじゃ――」

早々に駆け寄ってきた屈強な（辰巳は実際、日本とは格が違うな）、と関心していた（警官に両腕を掴まれ、余ったもう一人の警官によってガンを飛ばされていた。最後はいらないんじゃない?）と思ってしまうかもしれないが、まあこれがイギリス流だと思っただければ有りがたい。

ちなみに、セラフィの姿は見えなかった。

そのまま辰巳は事務室に連行され、英語での尋問を受けることになった。さすがに英語を習っているからと言って、解るわけではない。たまーに聞き慣れている単語が耳にはいるが、それ以外は宇宙

語くらいに訳が分からなかった。

しばらくして、事務室のドアが開かれた。

そこにいたのは一人の少女――セラフィだ。表情は変わりはないものの、微かに安堵を味あわせる感じがあった。

そんなセラフィを見て、辰巳は、

「おおお！ セラフィ来てくれたのか？ 俺もうダメかと思った。

マジで。もうどこかの警察が来て逮捕されるかと思った。ありがと

ー」

元氣を取り戻した。

セラフィはそんな辰巳は気にせずに、必要事項だけ、プログラム通りに動くロボのように言う。

「まあな、今回は私の責任なので、謝らせていただこう。すまなかった」

軽く頭を下げた。

その後、セラフィは屈強な警官に事情を説明し、納得を得たところで事務室を出た。

今は少し先にセラフィが歩いていると言う構図でイギリス某所に存在する空港を出ようとしていた。

「なあなあ、俺たちって付き合ってるじゃん？ やっぱそれってさっきのとか関係あるの？」

その質問に、セラフィはキョトンとした顔つきになった。

「何を言っているんだ貴様は、そんなの嘘に決まっているだろう。何だ、まだ気づかなかったのか。馬の耳に念仏だな」

使いどころは間違っているが、そんなの、今はどうでもいい。

この言葉に辰巳は落胆する。

「え？ 嘘ってそんな。じゃああの告白は嘘だって言うのか？」

目が死んでいる。

虚ろな状態だ。

「さっきも言っただろ、嘘だ」

その言葉にもう自我が崩壊した辰巳は野生の頃の本能に目覚める。

「うそだああああッ!!」

スーパース。ヤ人が貴様は! という驚愕のセラフィの突っ込みを無視して、辰巳は黄金色のオーラを纏った。

「ウヒヒヒヒ、犯してやる——」

人間ではないようだ。

そんな辰巳を見たセラフィは臨戦態勢に入る。

服は私服だが、構えはしっかりとしていた。左足を少し、後ろへ引き、相手に肩を見せるような体勢になる。腕は前へとつき出す。

瞬間、辰巳は目にも見えないほどの速度に乗り、セラフィの背後を取る。しかし——

「甘いわ——ッ!!」

それを見極めたセラフィは、瞬時に回し蹴りを辰巳の顔面へとヒットさせた。

だが、ここで誤算があつた。辰巳は先程、野生の頃の本能に目覚める、と書いたが、あくまで冷静な人間の判断能力は残っていた。それを蹴られた瞬間に発動させたのだ。これだけではない。ここでセラフィの服装について説明しよう。上はピンクのTシャツに上からジーンズ生地を使ったジャケットを羽織っている。さらに上から防寒用のジャンパーを着ている。が、下はスカート一つ。その下は

見えたのだ。

漆黒色のパンティーが。

スカートは回し蹴りをするによって、遠心力が働いてしまったが、捲れてしまうのだ、スカートが。

だが、そんなことには気がついていない。辰巳を蹴り終え、ご満悦の表情だったからだろう。

辰巳はいい気分を一瞬だけ味わえたのだが、すぐに悲惨な運命を辿った。

空中に蹴り飛ばされた辰巳はコンマ数秒という時間を空中で過ごし、後、落下する。

ゴツ、という鈍い音が辰巳のからだ全身を襲った。

「痛ッ!？」

その衝撃で辰巳は正常の思考お取り戻した。

後頭部を擦りながら、起き上がると、スッキリした表情のセラフィがいた。

「あれ？ 俺、なにやってたの？」

どうやらさっきまでの記憶がとんでいるらしい。

「ほらさっさと行くぞ」

すぐに辰巳を背を向け、出口へと向かった。

辰巳も、すぐに後を追うように着いていく。

——そういえば。

辰巳は疑問が湧く。

——なにやってたの？

セラフィは質問に答えてくれなかった為、分からずじまいで先を急ぐことになった。

ハッピーな出来事（後書き）

面白いと思っていただければ幸いです

魔王の正体

向かった先にあったのは黒光りするリムジンだった。

「う………！！」

嗚咽感を感じる辰巳。

無理もない今さっきというほど前に、ハイジャック犯に襲われたのだ。リムジンで反応したのは犯人が持っていた銃を連想してしまったからに違いない。

リムジンの近くには一人の、タキシードに身を包んだ男性が立っていた。年は四〇代前半くらいに見える。

するとセラフィはリムジンに身を入れた。

「早く乗らないと置いていくぞたちちゃん」

本当に、嫌味ったらしく言うときだけ『たちちゃん』と使うやつだ、と思いつながらも、辰巳はリムジンに乗り込む。

もう後戻りはできなかった。怪しいとはいえ、ここはイギリスだ。帰りたいなんて今さら言えないし、言ったところで戻ることも出来ないだろう。多少怪しいくらいでもいかなくてもならない。その先にある闇に。それに、セラフィがいる。今はセラフィを信用するか他なかった。

リムジンの中は薄暗かった。

何もない、というわけではない。車内の壁にはコースターが取り付けられており、運転席の後ろの所には、常備ジュースが置かれているらしく、キンキンに冷えていた。それを一杯辰巳は飲み干す。缶には『コカ・コーラ』らしき字が書いてあったが今はどうでもいい、おいしければ何でもいいのだ。

「ぶはー、うめえなこれ！！ 何だこれ？ コカ・コーラ、ここにもあったのかコカ・コーラ！」

今さらか、とセラフィが呟いたのもいず知らず、辰巳はもう一本手を伸ばす。

それも飲み終えたところでセラフィは話題を繰り出した。

「それで、貴様は今からどこかへ行くかは知っているな？」

「英国騎士団だろ？」

そうだ、と答えると、表情が険しくなる。

「正直言つて、あまりそんな態度で言つてほしくないのだが、まあいいだろう。それで、まず貴様には私の恩師であるキツシムⅡエライダム先生に会ってもらう手はずだ。まあ髪は他の人より残念な方なのだが、魔法に関しては一流だ」

そう言われても困るのであった。確かに、辰巳自身、ここに来た理由くらいは分かっている。しかし、セラフィの恩師であるキツシムⅡエライダムという人物についての説明はどうでもよかったのである。とにかく、早く帰りたいという気持ちでいっぱいだった。霧囲気に飲まれて来てしまったが、辰巳はあとになって冷静に考えたところ——『あー俺バカだわー』と頭を抱えて穴があつたら入りたいくらいに恥ずかしくなってしまった。

そして、セラフィは続けて言う。

「それで、貴様にも知ってもらいたい情報がある。まあ覚えていないかもしれないが、私が朝言つた、妙な組織についてだ。名前とリーダー名くらいは知ってもらわないとこちらとしてもいざというときに面倒だからな。時間がある今のうちに話しておく」

本格的にヤバくなってきたな、と辰巳は思う。

「組織名は『^{ダークマター}暗黒組織』、そして、リーダー名は魔王（仮）だ。組織名は正確ではないが、由来はまったく検討もつかないような組織ということだ。ダークマターとは銀河間に存在すると言う物質のことで、実際には存在しているということさえさだかではない。まあ『^{ダークマター}暗黒組織』もそんな感じで見つからない為、議会も疑惑気味というわけだ。しかし、私は日本で七人の魔女たち（セブンシスターズ）の一員であるジョージ・ライリー・スコットに重大資料を受け取った。それを本部に通達し、ついでにたつちゃんのことも聞いてみたところ、ついだから連れて来い、とのことだ」

俺はついにて、ここまで連れてこられたのか、と肩を落ししながら俯いている辰巳。しかし、セラフィはそんな小さいことでは同情すらない。

「まあ私としては貴様についてのことは《ついで》では終わらしたくないのだが」

腕を組み、誇らしげに胸を張る。だが、表情はぱつとしない。むしろ不機嫌さを感じる。

それを感じたのだろうか、辰巳がセラフィに話しかけた。

「？ そんなに気になるのか、俺に攻撃が当たらなかったこと」
うつ、と意表を付かれたように、ビクツ、とする。

「まあそうなのであるが、やはり、偶然ではないと、私は思っている。私は英国騎士団の一員だ。それが候補生カデットという枠組みにいたのだとしてもだ。確かに、候補生は、『騎士』の称号を持つ者に比べれば、劣りはするが、ただで候補生カデットになれたわけではない。それまでの過程には訓練がある。並大抵のものではない。下手したら米軍の訓練よりも厳しく、危険なものかもしれない。それに受かってようやく候補生カデットになれるのだ。その訓練の中に、魔法射撃訓練というものがある。それはまあ単純に言ってしまうえば射撃訓練なのだが、確実に当たるまで終わらない。それは動かない的に向かってなのだが、体内の魔力を上手くコントロールし、放つものだ。簡単にできるようなものではない。そこで、初級過程として、命中精度に特化した魔導詠唱の第二六章を覚えさせられる。もちろん、失格した者の記憶からはけされるがな、万が一外に漏れたら大騒ぎだからな。まあそれを完全習得したわけだ、私は」

は、はあとしか返答のしようがない辰巳であったが、とりあえず、自分なりの意見を無理矢理作り、出してみた。

「でもよセラフィ、確かに精度を完璧にしたとはいえ、その時の状況下において、そんなもんは変化するんじゃないやねえか？ 人間万能なわけないんだし、例えば体調の崩れとか

で変わるし、風とかで向きが変わったんじゃないか？ 完全無風なんて早々ないわけだしさあ、確証は得られないぜ、そんなんじゃない」
「ごもつともな意見だった。」

人間そのときの環境によって体調は崩れたり調子のいいときだつてあるはずだ。それに気候や湿度によって、その攻撃に影響が出るかもしれない。これが辰巳の意見の本意であつた。

しかし、そんなのはとくに確認済みだ、と言わんばかりの態度を取る。それを見た辰巳は顔をしかめる。

「ふん、貴様にしてはなかなかの意見だな。だが、魔法にそんな物理法則が通じると思っているのか？ その考えはあくまで科学の領域でしか、証明できないのだよ。したがって、気候や湿度による魔法攻撃への支障はなしだ。もうこれは英国騎士団内にて確認済みだ。それに、体調の方についてだが、それもないだろう」

「何で」

「それはだな、私は毎日健康チェックシートに毎日の気分などを記入しているからだよッ！」

その言葉に目を点にする辰巳。先程までの論理的、説得力のある説明はどこへいったのか分からなくなっていた。

呆然とする辰巳は、手に握っていた『コカ・コーラ』の缶を思わず落としてしまった。幸いなことに、中はもう飲み干されていた。

「まあいいや。結局、俺はここに連れてこられ、帰れないことには代わりないんだしな」

「そうか、分かってくれたならそれはそれでいい」

その解答に、セラフィは必要以上に追求はしなかった。

車はそのまま深夜のイギリスをアメンボのようにスイスイと進んでいく。通りには多少の人影は見える。

そして数十分後、ようやく辰巳たちを乗せたリムジンは到着した。それを確認したセラフィは、車から身を出す。それに続き辰巳も同じく身を出した。

バッキンガム宮殿。

敷地面積約一万坪を誇り、敷地内には舞踏会場、音楽堂、美術館、接見室や図書館などの施設が設置されている。部屋数はスイート一九、来客用寝室五二、スタッフ用寝室一八八……。多種多様である。さらに宮殿に勤務している人数は四五〇人、年間の招待客は四万人にも上るといふ。

宮殿正面広場にはヴィクトリア記念碑が建立されており、その向こうにはセント・ジェームズ・パークとトラファルガー広場にはつながるザ・マルが生い茂っており、プラタナス並木に沿って位置している。

これらがざつとしたバッキンガム宮殿の敷地内説明なのだが、今、辰巳たちがいるのはバッキンガム宮殿であつて、バッキンガム宮殿ではなかった。

この言い方は間違っているのかもしれないが、勘違いしないでほしい。辰巳がいるには列記としたバッキンガム宮殿だ。しかし、場所が場所だということだ。バッキンガム宮殿と言われると、まず思ひ浮かべるのは、ずんと建っているあの大きな宮殿のことだろう。しかし、辰巳たちがいるのはその裏手といつてもいい場所、そこにいた。だからバッキンガム宮殿であつて、バッキンガム宮殿ではない、なのだ。

そこで、辰巳は呆然と立ち尽くす。

いや、ただ単にどこここ？ という意味ではない。しっかりとここがどこだくらいはセラフィに聞いていた。だからこそその呆然、失意。きっと辰巳はあの正面からバッキンガム宮殿を拝みかつたのだろう。

「行くぞ。そんな長くはキッシン先生を待たせるわけにはいかない。わかつたなら早くしろ」

一方的な意見に、渋々と後を着いていくように、金魚の糞のように、セラフィの背中を辰巳は追っていく。運転手さんとはここでお別れらしい。そこで、辰巳は心のなかでコカ・コーラありがとうと念じ、その場を後にした。

セラフィが向かったのは従業員しか入れなそうなドアの前だった。辺りはお化けでも出るんじゃないかと思うほど暗く、明かりという明かりは、数百メートルさっきにある電灯くらいだ。おまけに夜の靈氣をのせているんじゃないかというほど冷たい風が、辰巳を襲う。

肝心なドアの方は、至るところに錆がはいっている。年期が感じられる。

そのドアを、セラフィは躊躇することなく、開けた。

中は通路になっていて、一本線上見たいに長く続いていた。通路の脇には今にも落ちてきそうな沢山の荷物が山積みになっている。

その菜かを、セラフィは突き進む。

辰巳も後を追う。

しばらく突き進んでいると、脇に荷物が無くなった箇所があり、横への通路が薄気味悪く存在していた。

「ここなのか？」

辰巳の質問に、セラフィは答える。

「ああ、まあ確かにここだが、正確にはもう少し奥にある。なに、ほんの数メートルだ」

言われた通り、奥へと入っていく。すると、暗闇の中からなにやら金属らしき物体が見えてきた。気になった辰巳は近くへと寄ってみる。

「セラフィ、これは何だ？」

手にとって見せたのは、銀でできている杯だ。しかし、持っている本人は、それが銀でできているなど、セラフィに聞くまで分からなかった。

また歩き、飽きてくる頃に、ようやく目的地に到着したらしい。目の前には一つのエレベーターがある。しかも妙に新品ぼく、回りの雰囲気と対照的だった。

「ふーん、そろそろか。おいたっちゃん、そんなつまらない物に熱

中していないで、こっちに來い」

セラフィに促され、エレベーターの前まで進む。年齢では辰巳の方が上つぱいのに、精神面ではセラフィのほうが上だった。

待つこと数十秒、エレベーターは音もなくドアを開けた。それに、辰巳は一瞬驚くも、すぐに乗り込む。

閉まると同時に、エレベーターは動き出す。

静寂の中、辰巳は耐えられなくなり、セラフィに喋りかける。

「セラフィ、何でお前こんなところに入ったんだ？ わざわざ危険をおかしてまでもここにはいる必要はなかったんじゃないか？ 危険なこと出なくて他にあるだろ、家柄から囚われないところなんてさ」

「そう思うか」

案外攻撃性のない返答に、少し戸惑いながら、「ああ」と返事を返す。

「私とてそのくらいは考えた。しかし、その程度の事で駄目なのだ。そのていどではヴァルキリー家から圧力をかけられ、すぐにおいだされる——というのは可笑しいが、そうなってしまう。だから、もっと権力のあるところに入らなければいけない。少なくともヴァルキリー家と同等の権力を持つ組織にな」

「それが英国騎士団」

うん、と頷く。

「まあ何とか入ったんだが、案外この訓練が厳しくてな、投げ出そうとしたことは何度もあったが諦めずにやってこれたのはある意味家のおかげだろうな。帰りたくない、という気持ちがある訓練を乗り越えられた秘訣だろう」

何だか複雑だと、辰巳は思った。きっと、セラフィは辰巳があとんでいるとき、学校で友達とくだらない会話をしているとき、きつと厳しい、それも地獄を見るような厳しい訓練を受けていたに違いない。そう考えると、何だか心複雑な気分になったのだ。今は笑って話してられるかもしれないが、当時は死にたいと思ったことさ

えあつたかもしれない。

そんな過酷な過去を乗り越えて、今がある。そう考えると、辰巳はセラフィに頭が上がりなくなるような感じがした。

「ま、詮索無用ということ、この話は終わりだ」

きつと、この笑顔も貴重なものだ。

エレベーターのドアが開いた。

そこに広がっていたのは東京ドームを連想させるような広さを持った空間だ。空港の時とは違う。ここは地下に作られている、とセラフィは説明した。辰巳も、エレベーター内で、地下に行っているということぐらいは察知していたが、まさかここまで広いとは思っていなかったらしく、目を丸くし、驚いている。

ざっとこの空間の広さを説明すると、縦横奥行きは三〇〇メートルを優に越えている。辰巳たちがいるのはどうやらこの空間の二階部分らしく、見下ろすと、せつせと働いている英国騎士団の団員らしき人が見える。

「ここが本部ってやつなのか？」

辰巳は視線を正面に見据えたまま、質問をした。

「ああ、ここが本部の中でも中心部にあたるメインフロアというやつだ。まあ私たちが行くのはここではないんだがな、別のフロアだ」
言うや否や、セラフィは歩き出した。二階部分は空間を取り囲むように設置されている。例えるなら、学校の体育館によくあるちっちゃい二階部分みたいな感じだ。

そこを、セラフィは歩く。

目的地にはすぐについたらしい。

そばには少し大きめの――長さは二メートル程の木製のドアがある。

「来ているといいんだが」

呟くと、セラフィは掴んだドアノブを回す。

入った先は、手前のメインフロアとまではいかないが、ある程度の大きさを持った部屋、だった。

「ふうん」

辺りを見回しているのはセラフィだ。

部屋内は天井には豪華な装飾が描かれており、壁一面には彫刻が施されていた。それが逆に何やらどうせ意図があつて施しているんだろつな―、と辰巳を思わせたのは流しておこつ。

そんな部屋の中。正面には大きな黒板が備え付けられており、その前には教壇が置かれていた。その教壇近くの机に、一人の中年男性が座つていた。

「キツシム先生！ 来ましたよ」

その中年男性に声をかけたセラフィは歩み寄る。

それを見た中年男性――キツシムと呼ばれていた。この人がキツシム・エライダムという人物なのだろう。セラフィの言つていた通り、髪は他の人より残念な方だった。服装は黒の長いロングコートを一枚来ていることだけしか確認できないほど長い。

「お、来たか。待ちくたびれたぞ」

日本語でセラフィが言つたからだろうか、辰巳が事前に来るのを知つていたからなのかは定かではないが、まあここで分かるのはキツシム先生は日本語が上手ということだけだ。日本人である辰巳が驚くくらいに。

「お久しぶりです、それで、単刀直入で申し訳ないのですが、こちらが連絡で言つていたたつちゃんです」

その紹介に、辰巳は手を頭の後ろに当てながら「どうも」と返事を返す。

「やあ君がたつちゃんさんか？ 随分と変わった名前をしているんだね、驚いたよ。話には聞いていたが、まさかここまで若いとは、もしかしてセラフィと同じ年いうらいか？」

その視線はまるで我が子を見つめるような暖かさを感じられる。

しかし、セラフィの顔色は明るくはなかった。

「それで――」

まるで無理をして話を進めるかのように、セラフィは話題を持ち

出した。

「分かっている。焦らなくてもいいだろう？　そのたっちゃんさんの事と、確か……重大資料もあるとか言っていたな」

重大資料という単語を聞いてセラフィは、顔を苦くする。

「どうしたんだい？　少し顔色が良くない。長旅で疲れたというわけでもないし、時差ボケか？　なら仕方がない、この件は明日にするとしよう。今日はゆっくりと休みなさい。たっちゃんさんも一緒に休んでいてくださいな」

その言葉に、辰巳は拒否などできやしなかった。

二人が連れてこられたのは、英国騎士団本部であるバッキンガム宮殿地下を出て、目とはなの先にあったホテルであった。

辰巳は、あの地下にでも泊められるかと思っていたのだが、どうやら違つたらしく、まあ違つたことを多様なりと安堵している。

今正確に辰巳のいる状況を説明するというならきうだろう。

さつきホテルと言つたが並大抵のホテルではなかった。高級ホテルだ。しかも三ツ星。その最上階——つまり三ツ星ホテルのスイートホームだ。室内は完全防音の上、ライトはシャンデリア。ソファやベツトはすべて羽毛を利用しており、焼きたてのパン見たいにふかふかだ。さらに、いつでもルームサービスが利用できるよう、電話も設置されている。まあこれは普通だろう。ソファアールとソファアールに挟まれたテーブルの上にはいかにも高そうなワインが二本ほど、氷が入っているケースの中に置かれていた。

そんな部屋の中、多田野辰巳は無邪気にはしゃいでいた。

「おい見ろよセラフィ、このシャンデリア！ めっちゃ光ってやがんぞ！」

指を指しながら叫ぶ。ここが完全防音ではなかったら、隣の部屋から苦情が飛んでいたに違いない。しかし、そんなことはいず知れず辰巳はそれから十数分に渡つてはしゃぎ続けた。

それにしても、セラフィの顔色はキツシムに会つて以来、良くはなかった。このホテルに着いてからも、今の今までずっとソファアールに座つたままだ。

さすがの辰巳もそんな様子を見て話しかけた。

「なあ、何でそんな暗いんだよ。何かあつたのか？」

「・・・・・・・・」

しかし、そんな辰巳の心配も掻い潜り、何も喋らない。

「言いたくないんじゃないや詮索はしねえけど、言わなきゃ楽にはなんな

いぜ？」

言っと、辰巳は向かいのソファに座った。

そうして、何も言わない、なんの会話もない時間が数分続いた。そしてようやく、セラフィの口が動いた。

「たっちゃん……」

「何だ？」

辰巳はぼーと部屋の隅を見つめていた目をセラフィへと向ける。

「いや、やはり言うておかなければいけないことがある。ちよつと一緒に外まで付き合ってはくれんか？」

「デートか！？」

「違うわ！！いいから早く来い！」

バ力解答をあっけなく墜落させ、セラフィは辰巳の襟首を掴むと、そのまま引きずって行く。

何て馬鹿力だ、と辰巳は改めてセラフィ「ナ」ヴァルキリーの恐ろしさを痛感した。

セラフィが辰巳を引きずって連れていったのはホテルの近くにあった公園だ。

今何時だ？　と思う読者もいるかもしれない。ちなみに、いまはイギリス時間——本初子午線に則って言うならば午前一時過ぎだ。辺りに人影がないのは当たり前前の時間帯。

そこで、ベンチに腰を下ろしたセラフィが言う。

「ここに連れてきた理由は簡単だ。盗聴されると厄介なことになるからだ」

その口調は妙に冷静だった。

「貴様にも言ったはずだな、英国騎士団に行く途中のエレベーター内で。あれに関連する——いや、もろに当たっている内容だ。『暗黒組織』のリーダー、魔王に関する事だ」

『暗黒組織』。今現在、英国騎士団が血眼になって搜索している組織。長い間一国家にも等しい組織から逃れている。そんな組織の、

しかもリーダーについての情報だ。ここに英国騎士団の団員がいたら『手柄だー!』と言って金を払ってでも手に入れたい情報に違いない。団員だけではない。英国騎士団そのものが欲している。

「何だか言うのが嫌になってきた」

珍しい言葉だ。

「しかし、言わなければ鬱にもなりかねんからな……」

ふう　と一度深呼吸をしてからもう一度話す。

「いいかたちちゃん、これから言うことはすべて他言してはいけない。それは例えキツシム先生だとしても、貴様の母上にだろうとだ。それまでに重要な情報だ。いくなれば国家機密にも等しいものだ。心して聞け」

「ちよつと待つてくれ」辰巳は両手を前へ付きだし、一旦話を止める。「そもそも何で俺になんだ？ そんな大事な情報、俺なんかよリキツシム先生に言った方が百倍いいに決まってるだろ!? それを置いて俺に話すべき情報なのか？」

もつともな意見だ。

そんな情報、一般人の辰巳に言っても何の幸もなさない。むしろ危険さえ及ぼすかもしれない。例え辰巳が知って、誰にも言わないとしても、セラフィたちには読心術があるはずだ。それを使われたら辰巳が知っているその重大な情報もたちまち広がってしまう。

それを考えての発言なのだろうか。

「いや、キツシム先生に話すより、貴様に話した方が安全だろう。

貴様は一応私の彼氏という設定になっている」

「え……」

目がゴマになる。それくらい呆気なく意表をつかれたかのようなかいとうだったのである。

「多分、キツシム先生は貴様には読心術は使わないだろう。なんせ相手は一般人、使っても何の利点もないだろうからな。まあここに来た時点で一般人ではないだろうが、魔法も使えないのは我々にとつては一般人も同じだ。それに、自分で言うのもなんだが、私はキ

ツシム先生の愛弟子だ。あちらは完全に信用している。まさかこの重大資料が『^{ダークマター}暗黒組織』に関するものだとは思えない」

「何だよ、それ。俺が言うのは何だが、捉え方によっては、まるでキツシム先生が魔王みたいな言い方じゃねえか！」

「そうだその通りだ」

暗かった理由はこれなのだろう。

恩師が魔王。

セラフィは完全には七人の魔女たち（セブンスターズ）による情報を信用したわけではない。半信半疑だ。

それでも、その考え、そうなってしまった場合の想定はしなくてはならない。

灯台もと暗し。

それなら、^{ダークマター}暗黒組織がこれまで追っ手から逃れ来た理由にもなる。つまり。

辻褄が合ってしまうかもしれないのだ。

これはよもや偶然とはいいがたい。

それに、キツシム先生は魔法の腕も一流だ、とセラフィが言っていた。それも考慮するとやはり、この考えがありうる可能性は高くなってしまう。

「でも、そんな簡単に信じちまっていいのか！？ キツシム先生はお前の恩師なんだろ？ だったら、まだ断定したわけじゃ——」

「違う」セラフィの表情が暗くなる。「私が言ったのはあくまでこの仮説を頭の中にいれておけということだ。いつでも対応できるよにな」

でも、と反論材料を探そうとする辰巳だったが、見つかるわけなかった。辰巳がこの世界のことを知って、まだ一日と経っていないむしろ、たった一日程度でここまで巻き込まれてること事態がおかしいのだ。

したがって、今の辰巳に反論材料など見つかるはずもない。

「.....」

黙りこむ。

しばらく、その公園には静寂が続く。

冷たい風も何度が吹いたが、今の辰巳にとってはどうでもよかった。

「話はこれでおしまいだ。いいか、くれぐれも他言するんじゃないぞ」

ベンチから立ち上がり、セラフィはそのままホテルへと戻って行く。

その後ろ姿は、どうにも小さく見え、どことなく、大ききも見えた。

その後、辰巳も颯爽とホテルに戻ることにした。

戻ったあとは、特に二人とも喋ることなく、寢床についた。

事前にシャワーだけは浴びておいた。

やはり、この間の朝とは違う違和感が、辰巳には感じられた。

翌朝、辰巳はとあるホテルのスイートルームの洗面所にある鏡の前で自分の顔に刻み込まれた傷を擦っていた。

「いつてーなクソ。別にあそこまで徹底的に殺んなくてもよかったんじゃないかねえかよ」

イテテテテ、と傷を擦りながら、愚痴を漏らす。

「悪かったな。まあ貴様があそこで寝ていたことを後悔しろ」

後ろから声がかけられた。

かけたのは、もちろんセラフィだ。

辰巳をひょんなことで大事件に巻き込みかけさせている張本人だ。後悔しろ……って、お前が入り込んできたんだろ？」

セラフィは洗面所入口付近の壁に、背中を預け、少々顔を朱色に染めていた。しかも腕は組んでいて、『動揺してなんかないぞ私は！』という感がもろに感じられる。

しかし、セラフィは辰巳の解答に、うつ、と顔をしかめた。

「それで一方的に攻撃されるって、イジメじゃん」

「な——ッ！　そもそも、貴様が私に着いて来なければこのような事態には発展しなかったであろうにようは貴様が悪いのだ！」

「つーかただけ話の内容、昔に戻してんだよ！」

知ったことか！　と叫び、その場を去ってしまった。

（どう考えたってアイツが悪いじゃんかよ）

ふて腐れながらも、辰巳は早朝のことを思い出した。

時は少々遡り、まだ日が昇りかけている頃のことだった。

スーシューいい感じに眠っていた。

「まだまだ行くぞっ！　うおおおおおッ！！」

どうやらファンタジー系の夢を見ているっぽい。

辰巳はフカフカのベッドの上で、庶民顔負けの寝相の悪さで掛け布団を抱き枕にして寝ていた時のことだった。高級ホテルだけあって、寝巻きも用意されており、今はそれに着替えて寝ている。

「よし、ざまあ見る………大魔王」

ボス戦も終わり、夢も終わったときに、

ふと、辰巳にいい香りが鼻に誘い込まれた。

それは、夢を見ていた辰巳にも不快感を与え、目を覚めさせてしまった。

「………」

まさかの事態に思考を停止させる。

それからしばらく、

「あのーセラフィさん？　何で俺のベッドに寝ていらっしやるんですか？」

バカだった、とこの事を、洗面所に来て思うのであった。

「ん、んん——」

そんな辰巳の問いかけに、セラフィは小さく答え、ふと疑問に思う。

——何でたっちゃんの声がすぐ隣から聞こえるんだ？と。

そう思ったセラフィは機嫌ながらも重い瞼を持ち上げ、確認をした。

「おいセラフィさん？」

やっぱりと。

確信をしたセラフィは顔が熱くなるのを自覚しながら、ベットの
上に置いてある拳に力を入れ、

「ななな何で私のベットに貴様がいるのだ！！」

思わず辰巳をボコボコにしまったのであった。

憂鬱（後書き）

面白いと思っていただけでは幸いです

本当にそうなのか？

そして時は現在に戻る。

今はもう傷のことは忘れて、朝食を済ませた辰巳とセラフィ。今はホテルをチェックアウトし、英国騎士団へと向かっていた。

「ふわー。まだ寝みーわ」

あくびをしながら辰巳は目尻に涙を溜める。

「貴様が変なことをしたからだろ！」

まだ根に持っているようだ。

「もういいだろ、その事は。なつちまったことはしょうがないし、過去は変えられない。変えられるのは未来だけだ。で、どうすんだ。言いにくいけどさ。キッシン先生の事」

「どうするもなにも、まあ——」

この話題になると、やはり暗くなる。

「そついやあ、キッシン先生に資料渡すんだろ？ どうすんだよ」
街中を歩く。

朝だというのに、もう車がちらほら走っているのが見える。

「そのことなら心配ない。資料の中身は写真だ、キッシン先生のなだが、写真は事前に別途の物と取り替えてある。それがこれ」

セラフィがどこからとなく取り出した封筒の中から出てきたのは縦一五センチ、横十センチ程の写真だ。そこには若い男性の顔が写っていた。

「コピーしておいたのだ。ちなみにこれはビジュアル系ロックバンド『Galaxy dust』。マイナーなユニットだから嘘とばれてもなにかなるだろう。これをキッシン先生に提出する。いか、ここで言うておくが、貴様は英国騎士団に到着しだい、一言も声を出すな。駆け引きはこちらでする」

「分かった」

反論はしなかった。

事の重大さが、少なからず辰巳にも伝わったのだろう。

「そこで、変に会話に反応されては困るので、このウォーキングマ
ンで、音楽を大音量で聴いてほしい。いいか？」

またどこからとなく取り出した。

手には小型の音楽プレイヤー。それを辰巳に渡す。

「もちろん、要は会話内容が、聞こえないような音量で、音楽を聴
け、つつう話だろ？ 素人が下手に聞いて、表情で判断されたら困
るんだろ？ 何、このくらいは了承するさ」

案の定、辰巳が素直にこの条件を飲んでくれたことに、安心する
セラフィ。

「理解が早いな。そうならばこちらも助かる。くれぐれも気を付け
てくれ」

早速、手渡されたウォーキングマン耳に装着させる。

曲は英語で入力されていて、読めなかった。

「ちなみに、その中に入っている曲はすべて『Galaxy du
st』のものだ。何だか写真を利用させてもらうと考えたら同情
してしまつてな。シングル十枚、アルバム四枚を買ってその中に入
れさせてもらった」

無駄な気遣いだな、と辰巳は思う。

流してみると、何を言っているのかは解らないが、結構いい歌だ
った。

セラフィが確認をするためか、何やら喋っている。しかし辰巳に
はただ腕やら何やらを動かしているようにしか見えなかった。

「ふむ、聴こえていないようだな、オッケーだ」

どんなに声をかけても返答をしない辰巳を見て、満足そうな表情
を取った。

ちなみに、さっき辰巳に言っていたのはすべて罵倒だ。

そして、待ち合わせ場所なのか、一台のハイヤーが待ち構えるよ
うに辰巳たちの先に停車する。

それに、セラフィが躊躇なく乗車するので、辰巳も習い、乗車する。

「キツシムさんから頼まれてね。窮屈ですまないね」

「いえ、贈ってくれるだけで感謝です」

そうかい、と笑顔で返すと、運転に意識を集中させるドライバーさん。

しかし、それが何の会話なのか、辰巳は知るよしもなかった。

数十分後、辰巳たちを乗せたハイヤーはバッキンガム宮殿の前で止まった。

「すまない、ここからは歩いていってほしい。さすがにこの車で裏側まで行くと目立つのでね。まあイギリス、つまらないアトラクションを楽しむといい」

イギリス、つまらないアトラクションをどう楽しめというのだ、という疑問に思つかもしれないが、まあ言葉の綾だと思っていただければ幸いだ。

ハイヤーを降りた二人は少し会話をした。

「ちよつと外せ」

どうせ聞こえないと分かっているセラフィは、口に出しながらも動作で辰巳に促す。

「何だよ？」

動作の意味を理解し、イヤホンを外す。

「これから入るが、いまから追加の注意点を話す。一応、昨日貴様は私の彼氏という設定になっているということを言っただな」

「ああ、聞いた」

「だが、そんな馴れ馴れしくするな、私が促したときだけ彼氏っぽくしろ、いいな。合図は私が腕に飛び付く。そうした場合にはイヤイヤ度をアピールしろ、分かったな？」

「・・・・・・、多分」

まあできれば使わないようにしたいものだ、と愚痴を溢すように言っただのを聞いて、辰巳は少し肩を落とした。

少し歩き、到着したのは昨夜にも来た従業員が使っていそうなドアの前である。

時は既に午前九時を回っており、暖かくなってきた。

しかし、そんな平穏な時は今はどうでもいい。むしろ、邪魔になるだけかもしれない。

今からしようとしているのは半ば英国騎士団に対する反乱だ。身内に敵のリーダーがいるなんて発言したら笑の的にもなる。それで終わればいい。だが、最悪の場合、死にいたる可能性だと捨てきれはしない。

そんな緊張溢れるなか、セラフィは堂々と辰巳の前を歩き、英国騎士団本部へと進行している。

「・・・・・・・・」

辰巳はその後ろをただ黙々と着いていく。耳にはイヤホン、音が聞こえないように、耳に入っていないようにするための言わば兵器だ。

ウォーキングマンは辰巳のズボンのポケットに入っていて、どこから見てもそこらにいる若いあんちゃんだ。

辰巳たちはエレベーターの前に到着する。

セラフィは動作で『イヤホンをはずせ』と促す。

「何だ？」

「いや、まあちよつとしたことだ。これからしようとしているのは半ば英国騎士団に対する反乱だ。うまくいけば成功だが、まあ失敗したら――」

言うまでもないだろう、と付け足す。

それに、辰巳も静かに首肯する。

エレベーターに乗り、慣性の力が働き、体に気持ちが悪いくような浮遊かんを感じながら、本部に入る。

昨日と同じ場所まで行くだけだった。

だが、それが異様に長いような気もする。ただ、辰巳はセラフィに言われた通り、立っているだけでいい、しかも耳には念を入れて

のイヤホンだ。多少は気を使ってくれているのだろう。それでも、人は考える。考えようとするのを辞めない。寝ているときでさえ、きつと人は考えているだろう。

もし、会話が始まっても、辰巳の『知りたい』という好奇心がなくならない限り、その会話を聞きたい、と考えるのもやむを得ない。そうしたら顔に出てしまう。それ命取りとなってしまう。

こう考えてしまったら、終わりだ。

そして今辰巳はそうなりかけている。

そのまま二人は昨日も来た、木製の高さ二メートル超えの扉の前にたった。

セラフィの顔つきは悪くなり、一度深呼吸をする。深呼吸の効果ありか、顔つきが多少、柔らかくなる。

その心境は計り知れないだろう。

セラフィは静かにその扉を開ける。

ギー、と耳にさわる音が、その先に存在する部屋に響き渡る。

「？ 来たのかい。随分と早いお出まだね、僕の予想では昼くらいに来るかと思っていただけ」

キツムは机に座り、読書をしていた。その本をすぐに閉じる。

「それまでに重要な用件だということです」

「そうか、そうだったな。あの冷静沈着な君が、一人で何でもこなしていた君が僕に助けを求めるということは、それなりの資料なんだね？」

はい、ときつぱりと答える。

それと同時に、セラフィは懷から封筒を取り出した。

「それが――」

「ええ。そうです。これが『ダークマター暗黒組織』と我々が読んでいる組織に関する資料です」

「何だと!？」

驚愕の表情を浮かべるキツム。それから、本当にこの人がリーダーなのか、と疑問を持たせるほどのものだ。

本当にそうなのか？（後書き）

面白いと思っていただければ幸いです

老騎士会（ナイトマスターズ）

だが、確信は持っていなかった。これはあくまで敵側である七人の魔女たち（セブンシスターズ）からの情報だった。だから、百パーセント信用できる代物ではない。だが、キツシムをリーダーとして仮説をたててみると、奇妙なほどに行動時間やらなにやらが当てはまってしま

う。だからこそ、疑ってしまう。たとえそれが自分の恩師であろうとだ。

人間の心理なんてものは単純だ。喜怒哀楽が皆平等に存在する。だが、現段階ではセラフィの心情に『楽』と『喜』という感情はなかった。あるのはそれ以外。負の感情のみ、それがセラフィの心を支配していた。

『怒』——自分へ対する怒り。何でこんなことを知ってしまったんだという意味での、だ。

『哀』——キツシムへの哀れみ。なさかこんな形で出会ってしまうとは、と久方ぶりの再開に、哀れむ。

その当の本人であるキツシムは、セラフィが渡した封筒の中身を見て、驚きを隠せない表情をしていた。

「それで、この情報の元は？」
顎に手をあて、疑問をセラフィに投げる。

「信じられないかもしれないんですが、情報元は七人の魔女たち（セブンシスターズ）です」

その一言に、キツシムはまた驚く。

「そうか、でも、確信は持てないわけだな。なんせ相手は英国騎士団と対立している組織だ。その一員から手渡された、というのが引っ掛かるな」

顔を陰しくし、考え始める。

セラフィはようやくここで第一段階とも言える通過点をクリアし

た。この写真が偽物ではないと、信じこませることができたからだ。そして、さらにセラフィは続ける。

「だから、先生にご鑑定していただこうと考えたのですが、どうでしょう？」

「ああ、判断は正しいな。これを一人で解決しようとするには無理がある。しかしどうしたものか」キツシムは困った顔つきになり、頭を軽く掻く。「悪いがこれでは私にもどうすることができん。そうだな……では、こうするのはどうだ」

良い策でも見つまったのだろうか、ハキハキとした声色になる。

「今から数時間後に、ここ英国騎士団本部で『ナイトマスターズ老騎士会』がある。

そこで、この資料の信憑性についての議論をしてもらおう。どうだ？」

「そうですね。このレベルの情報なら、臨時パスもとれるかもしれない」

決定だな、とキツシムは付け足した。

この会話を聞いていると、セラフィが立てた仮説が瓦解しておくように思われる。やはり、この情報は偽のものだったのではないかと。七人の魔女たち（セブンシスターズ）は端から偽の情報を流し、英国騎士団が騒ぎ立てるのを高みの見物で悠々と見遊ぶつもりではなかったのだろうか。

しかし、セラフィはその考えを今持っている精神力を用い、否定する。だが、完全にまではいかない。半信半疑、そのくらいで止めておく。あくまで仮説。その域を脱しない限り、仮説はいつまでもたっても仮説のままだ。

キツシムとセラフィの議論はすぐに終わった。

会話も終わった事だし、とセラフィはジェスチャーで辰巳にイヤホンを外すように促す。

「そういえば、何でたっちゃんさんはイヤホンをつけていたんだい？」

たっちゃんさんて。がっかりする辰巳を無視し、セラフィは言う。

「ただの音楽バカですよ」

「なっ！　ただの音楽バカとは何だ！　お前——ムム——！」

突如、辰巳の言葉が濁る。いや、正確にはセラフィに口を塞がれた、だ。

形相が険しい。背中にキツシムを預けて、セラフィは口を押さえたのだ。

「どうしたんだい、いきなり」

いえいえ何でもありません、ね？　表面上はモデルのような可憐な微笑みをしているのだが、絶対裏では滅茶苦茶怒ってるよ、と内心ヒヤヒヤな辰巳であった。

その後、キツシムから驚きの提案が生まれた。

「どうだい？　まだまだ議会までは時間がある。そこから食事でもいかがな？　もちろん、たちちゃんさんも一緒に」

笑みを浮かべながら招待してくれているキツシムに、悪いと思いつながら訂正をした。

もうたちちゃんさんじゃなくて辰巳って呼んでください、と。

顔から火が出るような思いであった。

その受け答えに、キツシムは笑いながら、

「なんだい、君の名前は辰巳と言うのか？　はじめて知ったな」

そして、特にこのやり取りとは関係のないセラフィまでも、

「貴様っ！　辰巳という名前があったのか！？」

これはものすごく傷つく答えだ。

まあとも知れず、二人の誤解を解いた辰巳たち一行は、食事をとるべく英国騎士団を後にした。

時間はもう既に正午になっていた。

日本の私服を着ている辰巳。ジャケットを上から羽織り、なかなかいいファッションセンスをしているセラフィ。ただ単に黒いロングコートを着ているキツシム。

これらを町中の人が見たら異様な小規模集団に見える。現に、そ

う思われているらしく、周囲にいる複数の奥様方から『ねえ、あのグループ見てくださいよ、何か異様じゃありませんミセス・マドワ―ゼル』『そうね、ミセス・アントワネット』的感じの会話が辰巳の耳には届いていた。といったもほとんど会話内容は解らない。あくまで雰囲気で判断した結果だ。

「これから行くのは私のお気に入りのお店だね。パスタやピッツアが美味しいんだよこれが」

「ピッツア？」

「何だい、ピッツアを知らないのかい？ 珍しいね。日本でも人気があると聞いていたんだが、私の勘違いだったかな」

可笑しいなあ、と呟いて、それ以降何も喋らなくなった。

ちなみに、ピッツアとはピザの事である。どうやら辰巳は正しい発音のピザのことをピッツアとは知らなかったのだろう。

それからというもの、何度も言っているかもしれないが、挙動不審すらしなないキツシムに、辰巳、セラフィは『キツシム魔王説』を否定しかけていた。

食事も終わり、時はもう既に『ナイトマスターズ老騎士会』の開始を示す時になりつつあるころだ。

ここはその会議が開かれる部屋の前であつた。辺りは薄暗く、一本の通路のようになっていた。その通路に沿うように複数の扉が連なるように備え付けられている。その扉一つの大きさは優に三メートルを越しているだろう。その一つひとつにド派手な――とまではいかないが、手間がかかっていると思わせるような彫刻が絢爛に彫られていた。

そんな薄暗く、どこまでも通路が続いているんじゃないかと思わせるようなところの、そのまた派手に彫刻された扉の前で、辰巳、セラフィはふらふらとふらついていた。

「やっぱ嘘だったんじゃないか？」

そこに、辰巳は今までのキツシムの行動を思い浮かべながら尋ね

た。

セラフィもその意見に同意したい気分であつたが、やはり完全には捨てきれないのだ。だが、今セラフィの心中に存在しているであろう『信賴パラメーター』があるのだとしたら、比率は、キッشم魔王説を信じる、信じないでいくと、3対7くらいだろう。

「これまでの行動をみたつて、何の素振りもしなかった。やっぱ考えすぎ、だったんだよ」

その甘い言葉がセラフィの思考に拍車を掛ける。

「だが、そうとも決まったわけではない」

だが、それを、セラフィは叩きわる。

「確かに、キッشم先生に先程までに見せた素振りには怪しい観点はなかった。それは認めよう。だが、それはあちらに私たちはキッشم先生が『^{ダークマスター}暗黒組織』のリーダーである魔王と知られていないからではないか？ それならばいつも通りの行動をとって当たり前だ。だったらそれを知っているような状況を作ってしまった方がいいだけだ」

「どうやって——」

「その為の重大資料だろ」

言つと、セラフィは封筒を取り出した。あの、A4サイズの写真が入った、真正正銘の重大資料。英国騎士団から長年逃げ延びてきた組織のリーダーの顔写真。

それが今、手元にある。

あとはそれがどの程度、キッشمの不安感を煽れるかどうかだけだ。

「そっか——」

辰巳は了承する。いや、関心、といった方が正しいのだろうか。何だか今、辰巳はセラフィが大きく見える。それは、体がではない。体はそのままで。言っているのは心の問題だ。そうやって、組織の為に恩師さえ疑う。恐ろしいには恐ろしい。恩師を信賴できないのか！ と思うかもしれないが、これは信賴しているからこそその決断だ。当初、セラフィは鬱のなりかけるほど悩んで、苦しんだ。それ

があつてに今の決断だ。それが、辰巳にとっては尊敬に値した。セラフィはそれほどまでにキッシムのことを信用している。

それでのこの決断。

それらを考慮して、辰巳はある言葉を口に出す。

「違うといいな」
と。

その言葉に、セラフィも優しく答えた。

時も数分たち、奥の方から一人の頭が残念な中年男性がやってきた。

「すまないね、待たせちゃって」

すべての元凶であるキッシム「エライダム」が。

「なんとか貰ってきたよ臨時パス。これで出られるようになるだろう。それと、セラフィ、君には壇上に出て、その情報を入手するまでの経緯を語ってほしい。一応この議会最大の情報だ」

誇らしげに語るキッシム。

「では、壇上で話せばいいのですよね？」

「そうだ。何、緊張することなんて何もないさ。たとえば君が間違っていたとしても、悪いのは君じゃない、そのくらいは上の人たちもわかっているだろう」

その会話を最後に、目の前にある三メートル超えの扉が悠々と開く。

向こう側には既に三十人近い人が、席に座り、鋭い眼光で入ってきた辰巳たちを見ていた。部屋の構造は俗に言う、裁判所を連想させるような造りだ。

辰巳は案内され、一般傍聴席に案内され、キッシムは専用の席に案内されていた。

セラフィは前に出て、中央の少し広めの空間にある小さな椅子へと腰を掛けていた。

辰巳は緊張のあまり上を見上げた、そこには何と、四人の人がいた。別に浮いていたわけではない。ただ、高さ約十メートルほどの

高さがある壁の四メートル付近の壁に穴が開いていた。そこに、四人のフードを被った人がいたのだ。

（なんだありゃあ）

疑問に思う。

不気味に見えたのだ。

そして、遂に『ナイトマスターズ老騎士会』が始まる。

議会進行係らしき人が、キツシムがいる群衆から、出てきた。年は三十代半ばくらいだろう。

その進行係の人は壇上に上がり、ごほん、と咳を払い、

「えー、これでは第百七十八回『ナイトマスターズ老騎士会』を始めます。今回の議題は事前にも説明させていただいたように、候補生であるセラフィナカデットナ・ヴァルキリーから暗黒組織ダークマターに関する情報を開示していただきます。では、セラフィナ・ヴァルキリー、こちらへ」

すると、進行係の人は、壇上を譲るような形でその場を退いた。

セラフィは勧められたとおり、そこへと上り、話す態勢を取った。「ご紹介に預かりました、セラフィナ・ヴァルキリーです。今回開示させていただく情報の元は七人の魔女たち（セブンシスターズ）からです」

その七人の魔女たち（セブンシスターズ）の単語が出てきた瞬間、会場内はざわつきで埋まった。

しかし セラフィは動じず、さらに続ける。

「なので、あまり情報の信憑性には欠けますが、ご了承ください」

「少し待ちなさい」

突如、この者たちではない声が降りかかる。

一瞬、辰巳は声の発生源が分からなかった。だが、会場内の人たちはすべて、視線を上に向けていた。もちろん、セラフィもだ。

「セラフィナ・ヴァルキリーと申したな。そなた、なぜ七人の魔女たち（セブンシスターズ）と接触できた」

声を出しているのは上にいる四人のうちの一人。

「そうそう接触できる組織ではなからう。それに、偶然会ったとい

うのも考えにくい、もし、そなたは七人の魔女たち（セブンシスターズ）と取引でもしたんではあるまいな、それは重罪だぞ」

その声だけでも威圧感が解る。

セラフィは少し動揺した声色で、

「いえ、偶然といってしまえば偶然ですが、それは私の主観的思考です。あちらから接触してきたのです」

そして、セラフィはあの時の、ジョージ・ライリー・スコットが接触してきたことを嘘偽りなく話す。あの情報を除いて。

「して、その情報とは」

「はいそれは――」

キツシムが黒いロングコートの中から例の封筒を取り出した。しかし。

「いえ、それではありません」

周囲がざわめく。

「本当はこちらです」

取り出す。真の封筒を。

見た目は代わり映えしない。キツシムが持っているものとまったく同じだ。

「これが本当の真正正銘の情報です。すいません、キツシム先生。嘘をいってしまって」

「いや、気にするな」

やや薄い笑みを浮かべ、嘘をついていた教え子を許す。

セラフィはその封筒を、近寄ってきた人に、渡す。その人は、さっと上にいる四人のうちの一人に手渡した。もちろん、先程までセラフィに質問をしていた人である。

それを見た人は、嘆息をつく。

「セラフィーナ・ヴァルキリー。このことは本当か？ 主はこの英国騎士団を愚弄する気ではなからうな」

その言葉には殺気さえ感じられた。

その言葉に冷や汗をかきながらも、セラフィは言う。

「はい、嘘偽りもございません。七人の魔女たち（セブンシスターズ）の一員であるジョージ・ライリー・スコットから渡されたもの、そのままの物です」

「ではなんだこれは!!」

四人のうちの一人は手渡された封筒を下にいるセラフィへ突きつける。

「まるでここにいるキツシム」エライダムのようにではないか!!」

その発言に、室内は沈黙に陥る。

セラフィはその沈黙など気にせず、自分のペースに入ったという確信で、自信に満ち溢れる。

「ええ。その通りです。その写真に写っているのは間違いなくキツシム先生です」

「何を……!!?」

キツシムも戸惑う。

「何を言っているんだセラフィ!! 私はそのこと知らんぞ!」
勢い謝ってイスから立ち上がる。

「すいませんとはそう言うことなのかッ!!」

「静かに! セラフィーナ」ヴァルキリー、真なのか」

その追求にセラフィは首を縦に動かす。

さらに、四人のうちの一人——仮にBとしておこう。Bは顎を擦りながら、キツシムに問う。

「キツシム そなたはこの事を自覚しているのか?」

「知りませんよこんなこと! 出鱈目です!」

形相が激しくなる。

その返答にBは考えをまとめに入るべく、もう三人に意見を求めた。

会話内容は聞こえないが、答えは数分後には帰ってくる。

「仕方がない事態になった。これは英国騎士団創設以後の最大の事件だ」

Bは拳を強く握る。

「判決を下す」

その次の言葉に。期待に。すべての神経が使われる。この場の全員が息を飲む。

「キツシム」エライダムに数日間の監獄入りを命ずる」

老騎士会（ナイトマスターズ）（後書き）

面白いと想像していただければ幸いです

その後

あれから二時間後。

キツシムは英国騎士団のさらに下に存在する監獄に入れられた。

「本当によかったのか？」

辰巳の問いかけに、セラフィは答える。

「ああ。多分な、ライリーの持ってきた情報だ。あとはことの成り行き次第だ」

そして、セラフィは少し付け加える。

「私の考えが正しければキツシム先生は脱獄するだろう。そうした場合は暗黒組織ダークマターのリーダー確定だ」

セラフィがいるのはキツシムと最初に会った場所、教室らしき部屋の間道にある机に上だ。同じく、辰巳も机の上に座る。

「そうなった場合も想定して、今から会いに行きたい者がいるんだが、大丈夫か？」

「大丈夫なものにも、別に俺は構わねえぜ。それに、拒んでいられる状況下じゃねえだろうし」

では決定だな、と言うと、セラフィは机から飛び降りる。

「そいつは英国騎士団内の唯一無二の友人だ」

向かった先は世にも奇妙な場所ではなかった。至って普通の部屋。大きさはまあ別に広いとも言えないし狭いとも言えない大きさだ。

だが――

「誰もいねえじゃんか。お出かけ中か？」

辰巳が言うと、セラフィは動き出した。

「何をいつている。別に部屋だからと言って、そこにいるわけではない。その普遍的考えは捨てとくんだな」

言っと、セラフィはいきなり下の方の壁を叩き出した。小さいお尻がふりふりと振られる。

「何、してんの？」

「ああ、これは教授の隠し部屋を探しているんだ。こうやって叩くと空洞のところでそうでないところの音は違うだろ。そこを探している。たっちゃんも探してくれ」

いやいや、まずはそのたっちゃんを直そうな、と呟きながら、渋々壁を叩くのを手伝いに入った。

しかし、案外早く見つかった。大体、こういうときは主人公である辰巳が見つけるべきなのであるうが、違った。

カタン、と部屋の一角の壁がいきなり倒れたのだ。

倒れたのは一辺一メートルほどの正方形型で、そこから出てきたのは一人の少年。年は辰巳よりも一つくらい下に見える。

「どうしたんだい、こんなところで。前はすぐに見つけられただろうに」

髪はしっかりと整えられており、艶やかな黒が光をも飲み込みそうなほどに、黒冷やかに照らされていた。顔立ちは幼い。さっきもいったが辰巳よりも一つくらい下に見える。

「教授。今回はそんなところにしたのか。相変わらず警戒心の強いやつだな」

すると、教授と呼ばれた少年は、えへへへ、とお姉さんに構ってもらい、嬉しさを露にした弟みたいな笑みを浮かべる。

だが、教授と呼ばれた少年は辰巳のことを見つけるや否や、目に余るスピードで、セラフィの背後にぴったりとくっついた。

（なんと羨ましいことをッ！！）

それを見て下心な辰巳は置いておいて、セラフィは話を始めた。

「教授、安心してくれ、こいつはそんな怪しいやつじゃない。私とある用件で連れてきた日本人だ。名は——たっちゃんだ」

「違う！！」

辰巳は咄嗟に否定する。

教授はその、声の大きさにビクッ、と肩を震わせさらにセラフィに密着する。

そんな光景を妬みながら、修正を入れる。

「俺は多田野辰巳だ。決してたっちゃんなんて家族内の呼び名何て呼ばせねーぞ」

「そうであったな、貴様には名前があつたな。いかん、つつい思ひ出してしまった」

「逆じゃねえのか!? という辰巳の問いに、セラフィは完全無視態勢を整え、教授が出てきた穴へ入っていつてしまった。

「ちょ、おい待て」

辰巳も慌ててそこへと入る。

中は冷房が効いているのだうか、多少涼しかった。なぜ、冷房をつけていようと多少かと言うと、ちゃんと訳くらいはある。中は長方形状になっていて、いかにも秘密基地というかんじになっている。そして、ここからが、本題だ。その空間の大部分がパソコンやその他機材で埋め尽くされている。そのせいで、空間の六割近くは埋まっていた。その為、冷房をかけていても機材の熱で多少しか効き目がないのだ。

そんな空間の奥、そこに教授と呼ばれた少年とセラフィが居座っていた。

「やはり動かないか——」

何やら教授の操作しているパソコンに、二人とも釘付けになっている。

仲間外れにされたと、勝手に考えている辰巳はすぐさま二人のもとへと近づいた。

「何やってんだよこんなところで、ゲームか?」

上から覗きこむような形で会話に入ったら、

「勝手に入ってくるんじゃない。教授の大切な——命と平等な価値を持つものに貴様が持つ菌が付着したらどうしてくれるんだ」

あまりにも残酷な一言だった。

「別に大丈夫だよ。辰巳——さんだっけ? どうぞこちらに」

それに対し、教授は優しい一言で、横を譲る形でその場を動いた。

「で、何やってんだよ」

もう一度質問を繰り返す。

「これを見れば解るだろう。監視だ」

セラフィは言うつと、目の前にあるパソコンに指を向けた。

そこに映っていたのは映像だ。

正確な場所は分らない。だが、状況は解る。壁一面は石畳で覆われている。まあ、よくファンタジー系で見かけそうな石の壁のこ
とだ。それに、一人の男性が彷徨っている。しかも真剣な顔付きで
だ。そのためか、映像に映っている辺りといったいは、ピリピリとし
た感じが見ただけで分かる。

さらに奥、男性が彷徨っている奥に鉄製の棒が数十本ならんでい
てまるで牢のようなのだ。

「何だよ、これ」

「何って、キツシムのいる監獄だよ」答えたのは教授だ。「セラフ
イから言われてね、監視とまではいかないが、まあ、行動を起こす
か否かを見ているんだ」

どうやら辰巳に恐怖感を無くしたらしい。

「まあそういうことだ。覚えておけ」

お前が言うな、と辰巳のツツコミが炸裂した。

それにしても――

「この他の映像はなんなんだ？」

瞬間、よくぞ聞いてくれました、というような顔付きで、教授が
パソコンから辰巳に視線を向けた。

「これはねっ、僕が防犯カメラにハッキングして、その映像をここ
に映しているんだよ。まあ僕にかかれば英国騎士団のセキュリティ
なんてちよちよいのちよいなんだけどね」

輝いていた、目が。まるで少女漫画のように。

そ、そうか、と辰巳はその回答に微に引きながらも、疑問を抱い
た。

魔法に科学、一体ここはどうなってるんだ。どっちかに統一しない

のか？ と。まあどうでもいいことだ。

科学があるお陰でこうしてキツシムの様子を見ることができの
だ。それだけでよしにしよう。

「そうか。教授はパソコンに詳しいんだな」

その言葉に教授はさらに目を輝かせた。

「まあやろうと思えばアメリカのペンタゴンくらいはハッキングで
制圧できるよ」

さらりと恐ろしいことを言いやがったコイツ、と辰巳は教授の隠
された素顔の一部を垣間見るようになった。

その後も、数十分とたつが行動は監獄にいるキツシムは行動を起こ
さない。それどころか、身動きひとつしない。本当にいるのでしょ
うか、と思わせるほど、牢の中は静まり返っている。

そのことに疑問を持ったセラフィは教授に指令を飛ばした。

「教授、ここをもうちよつとアップしてくれないか？」

お安いご用、と言い、ズームアップさせる教授。

鮮明に、先程よりは牢の中の様子が分かる。

が、しかし。

「いないぞ」

最初に声をあげたのはセラフィだった。

言った通り、牢の中には誰もいない。本来いるはずのキツシム＝エ
ライダムの姿がどこにも見当たらない。ベッドにも、牢の奥にもど
こにもいない。ただ、空の牢がそこにあるだけ。

「本当だ。もう少しアップしてみる？」

それに、セラフィは首肯する。

教授はパソコンを操作し、さらに牢の中を拡大させる。

「やはりいない。まずい」

試しにサーモグラフィもやってきたが反応はなかった。

「ダメだ。いない。どうするのセラフィ」

弱気な教授にセラフィは言う。

「まあ焦るな。まずはこのことを『騎士^{ナイト}』の称号を持つ者に連絡し

る」

慌ただしくなる教授部屋内。そこに、辰巳は状況判断できずにただ座ってパソコン画面に視線を投げ続けていた。

そして、辰巳は言う。

「いるじゃん。キツシム先生。ほらそこに、何だかベッドの下に潜り込んでる。何してんだ？」

その言葉に、セラフィたちは驚愕する。

「何を言って——」

いるんだ、と言おうとしたのだろう。だが、その言葉が途中で消え、また、途中から言う。

「——確かにいるな」

「え、本当!？」

セラフィに続き、教授も声をあげる。

「本当だ。コンタクトレンズ探してる」

なんともあっけがない光景だ。

「でもどうしてアップしても見えなかったんだ？」

「黒のコート着ているからじゃないか？」

言ったのは辰巳だ。

「そうか。何だ。心配をかけるんじゃない」

セラフィは胸を撫で下ろす。

「それはそうと、これからはどうするんだ？」

話を切り出したのは辰巳だった。

「うむ。貴様にしてはいい質問だな。まあなにもすることがない、と言ってしまえばないのだが、まあないな」

それから静寂がこの場を包み、いずらなくなったセラフィが、
「何だ！ 悪いことでもしたか!？」

「いや別に……」

反応したのは辰巳と教授だった。しかもビックリするほどピツタリハモった。

セラフィはこほん、と業とらしく咳をすると、話題を開く。

「これからもキツシム先生の監視を続けると言って無理があるう。さてどうする？」

しかし、二人に考えなんてなかった。

「ふむ、では、外で少し茶でも飲むか」

こうして、特にやることなく、セラフィの独断で決まってしまう提案に乗るしかなかった辰巳と教授だったのだが、今三人がいるのは教授の隠し部屋を出たすぐ外にあるあのごくごく普通の部屋だった。

そこで、テーブルを一つ真ん中に置き、茶会が開かれていた。

「やっぱ俺らこんなところで、こんなことやっていいのかな」

落ち着かず、お茶を飲んでいた手をふと止め、辰巳は心配する。もちろん、キツシムについてのことだろう。

「なに、やることはないのだ。仕方があるまい」

それに対し、セラフィは妙にが付くほど冷静な態度を取っていた。「今はやることがなし。かといって逃げ出すわけにもいかん。そんな事よりもキツシム先生が暗黒組織のボスと確定したわけではない」

そのセラフィの言葉に、割り込むような形で入ってきたのは教授だ。教授はテーブルの上にもノートパソコンを展開し、防犯カメラの映像を写し出していた。

「そうだね。確かにキツシム先生は未だに動かない、これはもうリーダーという考えはなくしてしまっていていいかもしれないよ？」

教授は残りの紅茶を飲み干して、またパソコンへと視線を落とし

た。
そうなのか、と辰巳は平然としないまま、これからの時を過ごすはめになった。

それからというものの、明確な会話が持ち込まれず、ただ淡々と、無情なまでに時間が過ぎていつている頃。

それは唐突に起きた。

轟！！ という爆音が、英国騎士団内にこだまする山彦のように響いた。

「な——ッ！？」

あまりにも突然に起きた出来事に、セラフィも思わずイスから落ちそうになる。

「何があつたのだ！ 教授！」

すぐさま教授に監獄にいるキツシムの様子を聞いた。

「かかかわりはないよ。いるもん」

困惑に堕ちた表情で、慌ただしい表情で教授は言った。

「では何が……？」

セラフィは自分の頭をフルに使って事態の把握に努めようとする。だが、思いつく付し、現段階でセラフィが考えられることはなかった。

そんな中、教授は一心不乱にパソコンと向き合っていた。

「判った。これだ。何だか煙が——」

見つけると同時に、セラフィは抱えていた頭をすぐにパソコンへと持っていった。

「これは——！？」

見てもさっぱり分からなかった。

教授のパソコンの画面には一つのウィンドウが開かれている。そこには映像が映し出されていた。

辺りは、見える範囲はすべて煙に視界を奪われており、状況が把握できない。ここから解るのはただひとつ。キツシム以外の誰かが英国騎士団に攻撃を仕掛けたということだけだ。

「クソ、こんな時によりにもよって不足の事態が起きるというのだッ——！」

すぐにセラフィは二人に指示を出した。

「このままではいつ次の反撃が来るか分からん。数秒後にもまた攻撃が来るか分からん。いったんここは身の安全を確保し、態勢をた

てるぞ」

その数秒後、鼓膜が破れるかと思うほど、辰巳たちが立っている床もが震えるほど大きな爆音が響く。

「すごい当たった。セラファイって予知能力者？」

言ったのは教授ではあるが、今はどうでもいい、というような顔つきで、セラファイは言った。

「一時、教授の隠し部屋に避難だ。教授、あそこは衝撃にも強い作りになっているんだろっな」

もちろん、と答える教授。

さらに付け加える。

「一応戦車の砲弾でも耐えられる仕組みになっているよ。なんせあそこには世界一硬い合金である超鋼合金が五十センチの厚みが使われているからね」

「よしでは入るぞ。ふん、仕方がない。たちちゃんも一緒にはいれん？　ちよっとおかしくなかったか？　と感じていたが、時が時なのでスルーした。」

中に入ると、教授は隠し部屋の唯一の出入り口である壁を閉めた。

「それも重いんじゃないのか？」

指を指しながら、辰巳は聞いた。

「いや、これは薄い外の壁と同じ作りのものだよ。まあ、これから閉めるのが本題なんだけどね」

言つと、閉めた横にある丁度し字型の短い底の部分にあたるところに、大きな扉が埋め込まれていた。

「さすがに一人の力じゃ無理だから、辰巳ーさんだっけ？　手伝ってよ」

ああ、と頷くと、手伝いに入る辰巳。まだ完全には名前を覚えてもらっていないみたいだ。

そんなことはさておき、何とか扉を閉め終わった二方は、奥にいたセラファイのもとへと向かった。

「これからどうすんだよ」

突然の出来事に動揺を隠せない辰巳。先程まではやることがあったため、意識をそちらへ向けていることが出来たが、今は違う。一段落付いてしまった。それがかえって辰巳の心に恐怖感を植え付ける。なにもすることがなくなり、初めて命の危険性を感じたのだ。「これからやることは一つしかない」

セラフィは考えるのを止め、たどり着いた結論を辰巳、教授の二名に説明する。

「まずは多少の安全を確保した——と思われる。だが、これで安心というわけではない。あくまでこれは段階でいうと一、だ。まだ他にもやることはたくさんある。まずは——」

セラフィは教授を呼んだ。

近くに寄る教授に、セラフィはパソコンで英国騎士団内の防犯カメラすべてにハッキングして、何が起きているのかという情報収集を頼んだ。

次に、辰巳への指示だった。

「そうだな、貴様は私たちの誰かに用を出されるまで隅でじっとしている」

それに、辰巳は了承する。

さすがに辰巳も反論はしなかった。今自分に出ることなど他かが知れている。なら、じっとして、二人の指示が出るまで待っている方が得策だ、と勘づいたのだろう。

「そうか。なら助かる」

セラフィはすぐに作業に入った。

セラフィは何の作業をしているかというと、教授が近くで作業している少し後ろで、大きな、縦横八十センチメートルほどの紙を広げて、赤ペンなどでマークを付けていた。

「なにやってんだ？」

辰巳は隅っこにいながらも、そこから見える情報だけで、セラフィに質問した。

「これか。これは逃走ルート、と言うと、聞こえが悪いから脱出ルートとでも言っておこう。今教授に各防犯カメラにハッキングをしてもらった。それに映っていた映像を元に、ルートを立てているのだ」

さらに、教授からの新情報が入り、新たなマークが付けられた。

「そうなのか。で、なんなんだ、そのマークは」

しつこい！ といった表情を取りながらも、セラフィは質問に答えた。

「これは敵らしき人物の居場所だ」

簡潔に言つと、鋭い眼光で辰巳を睨み付け、『もう話しかけるな』という合図を送った。

敵らしき人物。

敵——英国騎士団唯一の敵。暗黒組織。ダークマター。しかし、なぜこのタイミ

ングで出てきたのだろうか。それが疑問だった。どこから出てきたと聞かれれば、簡単だった。それぐらい、セラフィでさえ気付いていた。それは、元々英国騎士団に入っていた要員たちだった。それに気が付いたのは今さっき。この防犯カメラに映っている人物たちが次々に老騎士会ナイトマスターズを行っていた会場へ連行されていた。つまり、この連行している側が暗黒組織ダークマターの要員。だがやはり、分からなかった。今さっきも言ったがなぜこのタイミングで出てきたか、ということだ。今の今までいくらかでも英国騎士団を壊滅させるチャンスがあったらうに、なぜ、この今日という日を狙って——いや、本当はいつでもよかったのかもしれない。なぜならその連行している側のほとんどは英国騎士団内で『騎士』ナイトの称号を持つ猛者ばかりだ本気を出せば難なく、とまではいえないが、潰すことは出来るだろう。ましてや、今日が

特別な日というわけでもない。強いて言うなら今日がセラフィの誕生日ということぐらいだ。

「分からんな、なぜ今動く理由が、根拠がまったく見当がつかん。一体暗黒組織はなにをしたいんだ」

言っていると、教授から慌ただしく何かを言った。

「セラフィ！ キツシム先生が動いた！！」

パソコンに釘付けであったはずの教授がバツ！ とこちらに振り返った。それほどまでに、恐れていた。事。

セラフィは啞然とする。今まで行動していないで身動きしなかったキツシムⅡエライダムが動き出した。

それは、セラフィにとっては、恩師が英国騎士団の敵対組織である暗黒組織のリーダーダークマターと断定つける証拠でもあった。

これから、暗黒組織の侵略が始まる。

その後（後書き）

面白いと思っていただけでは幸いです

行間 1

キツシム「エライダムは牢の鉄棒を魔法で壊し、近くにいた監視員を始末した。

無惨にも残骸となつてゐる肉片を蹴り飛ばし、それを冷徹な視線で見つめた後、しずかに足を動かし始めた。

さっきの監視員も雑魚というわけでもない。まあ結果を見ればそう思つてもしまふかもしれないが、それは違う。この監視員だった人もセラフィ以上には強かった。だが、その強かった監視員よりもキツシム「エライダムの方が圧倒的に強かっただけなのだ。

キツシムは監獄から出口へと向かう途中、一人の女性が目の前に現れた。

キツシムは一旦足を止めると、女性はすぐに地に片膝をつき、頭を下げ言った。

「英国騎士団内の約九割は連行させました。ですが――」

「ああ、老騎士の奴らは放っておけ。どうせ貴様らでは始末できないだろう。かといって、私が出向く事も出来ない。足止めだけやつておけばいい。隙あらば殺れ。これから私は《やつ》を探しに行く。捕まつてはいないだろう」

その言葉に、女性は「申し訳ございません」と言い、姿を消した。そして、数秒。キツシムはしばらく考え込んでから、静かに足を進めた。

「まったく、面倒な奴だ。大人しく捕まっていればいいものを。しかし、何処に隠れたというのだ」

困った顔ついになりながらも、キツシムは足を止めない。

出口へと赴くと、そこには惨劇が広がっている。

同じ組織——いや、元同志と裏切り者との戦いが、ダークマター

ある者は知り合いが暗黒組織である事を嘆きながらも戦い。ある者はその場に崩れ落ちている。

その惨劇の中を、キツシムは悠々と歩く。堂々と、言ってもいい。

攻撃が来たらそれを軽くあしらい跳ね返す。

ただ、無残なまでにキツシムへの攻撃は当たらない。キツシムにとつて、それはただの蟻と同じなのだろう。一生懸命働いていながらも、人間から見たらただの小さい虫、ちょこちょこ動いているただの

それほどまでにひらいているキツシムと英国騎士団の要因との戦闘力の差。

キツシムはその惨劇を一瞬にして通り越す。

そこはもう人が見当たらない場所だった。造りは同じなのだが、違いは人がいないだけ、普段なら別に気にする事もないが、状況が状況だと虚無感を生む。

「さて、どこに逃げたのやら。まあ逃げてはいないだろうな、出入り口は既に封鎖されている。とすると、やはりここの中か。袋のねずみになったというのに踏ん張る奴だ」

いつまで持つかな？ と不適な笑みを浮かべ、《やつ》の搜索を開始した。

喪失

辰巳、セラフィ、教授の三人は、とある部屋の隠し部屋に身を潜ましていた。だが、その部屋の造りは安易なものではなかった。

壁中にはたくさんの機材が設置されており、本来の壁をお目にかかることはできない。冷房は聞いているが、それはあくまで機材から出る熱を押さえるためのものだ。さらに、ぱっと見は普通の部屋の壁をくり貫いて造ったかのように見えるが、実際、そうではなかった。その普通の壁と、この隠し部屋との間には超鋼合金が五十センチに渡って組み込まれている。

そんな中、辰巳は恐怖を感じながら、隠し部屋の隅っこで震えながら正座をしていた。

「セラフィ、無理にここを出なくてもいいんじゃないか？　かえって危険が高まるだけだと思うんだけど」

その怯えた質問に、セラフィは丁寧に答えた。

「確かに　その考えもあるな。しかし、こことてずっと発見されない訳でもない。いずれは見つかる。やつらはきつと英国騎士団全員を捕まえる気だ」

その表情は険しい。

「だから、こんなところで呑気に匿っていても無駄だ。だったら、早々にここ、英国騎士団を出てしまえばいい。あとは私の家のコネを使って各支部に連絡し、応援を呼ぶしかない」

それに、教授からも賛成の意見が出た。

「セラフィの言うとおりだね。僕も賛成だよ？　辰巳さんはどうするの？　ここに残るかここから逃げるか。多分、ここにいたら死んじゃうかもしれないけどな」

ゾク、と辰巳の背中を嫌な寒気が襲う。

今までそんなものとは無縁だった辰巳が、今まさに『死』について感じた瞬間であった。

「どうする。残るのか？　なら構わんが」

辰巳は考える。

これからどうすればいいのか。先程もセラフィが言ったとおり、ここにいれば安心という保証はない。いずれは見つかる。だからといって、ここを出るのもリスクを伴う。確かに、セラフィの言ったことを実行に移せればこの反乱を押さえることが出来るだろう。だが、出るまでが危険だ。教授がハッキングしたカメラにも暗黒組織ダークマターの面々はいた。したがって、脱出ルートでそいつらと出くわしてしまふ可能性もあるのだ。

そう考えると、『危険』という二文字が辰巳の意思を決定させない抑止力となってしまうっている。

「・・・・・・・・」

何も分らない。

辰巳は混乱する。

自分の決定一つで明日の日の光が見られるか否かが決まってしまう。

「どうするんだ。早くしないと置いていくぞ」

分かっている。だが決められない。だったらどうする。ここにいても仕方がない。

辰巳は無理矢理士気を奮い上がらせる。

「・・・・・・・・・・ない」

「？」

「俺も行く。だから連れていけ。いいんだろ、行っても」

その答えに、セラフィはただ首を静かに縦に動かした。

こうして、辰巳は脱出する選択肢を選んだ。

「だったらこうもしてられない。教授、すべての防犯カメラへの映像をパソコンに映し出せ。あと、私たちがいる近くの防犯カメラを優先的に最前列のウィンドウに置いていけ。それを頼りにここから脱出していく」

てきばきと順序よく作業を進めていくセラフィ。

「教授の準備が出来次第、ここを発つ」

『無色の掛布』^{スケルトンカーテン}は魔力感知が出来る相手には通用しないとライリ
ーは言っていた。なぜなら『無色の掛布』^{スケルトンカーテン}は魔力を全身に覆い、発
動させる魔法だからだ。原理は体の周りに魔力を充満させ、その魔
力の振動させることで、光の屈折率を変更させ、認識をずらす、と
いうことだ。つまり、魔力感知できる相手には体の周りに充満して
いる魔力を感知させられ、気付かれてしまう、ということらしい。

しかしセラフィはその事を知らなかった。確かに、魔力を全身に
覆い、発動させる魔法だということは知っていたが、ライリーに指
摘されるまで 無色の掛布の欠点には気付かなかった。^{スケルトンカーテン}

そのため、今回の脱出ルートを快走するためには生身の状態で駆
けなければいけない。まあ裏を返せばそれはそれで良かった。知ら
ずに使用していたら敵に見つかっていたからだ。

今、辰巳がいるのは隠し部屋から出た部屋だ。シンプルな作りの
ため、人が一人でもいると目立つ。

教授は近くの防犯カメラに何も映っていないことをセラフィに伝
えると、ついに動き出す。

まず、セラフィは部屋のドアまで摺り足で行くと、念のため、首
だけを出し、辺りを確認すると、こちらに腕を使って合図を出す。
それ確認すると、辰巳たちも出来るだけ摺り足で出口を目指す。

セラフィは先頭に、次に辰巳、最後尾には教授という列で今は行
動している。

『そのまままっすぐのところに曲がり角が見えるよね。その曲がつ
たところに敵が一人いる。多分「騎士」^{ナイト}クラスの人だと思う。見つ
かったら終わりだよ』

声は教授。しかし、セラフィの耳からだ。これは、教授の隠し部
屋にあった通信用のイヤホンを、付けているからだ。三人とも、こ
れを装着している。

『分かった。今そいつはどこを向いている？』

『北側つてところかな。逆方向だよ』

よし、とセラフィは小声で言うと、曲がり角まで一気に近づく。

『どうだ？』

『大丈夫、行くなら今』

すると、スサツ、とセラフィは物陰から飛び出し、無事に向こう側に辿り着く。

次は――

『用意はいいかたちちゃん。出来るだけ摺り足でだ』

頷くと、辰巳は深呼吸をし、物陰から飛び出す。

ダークマター

暗黒組織の要員であるフィードルチャールズは暇そうに英国騎士団本部のある廊下を見張っていた。

チャールズは面倒そうな溜め息を一つ着くと、

（暇だー。どうせ誰もいねーのに、何でキツシムさんは監視しろなんて指令だしたんだろ？ もう全員確保したんじゃないのか？）

そう思いながらタバコでも吹かそうと、ポケットに手を忍ばしたとき、ふと、背後に気配を感じた。

思わず振り返るが、何もない。

（気のせい、か？）

辰巳は向こう側の壁にもたれ掛かっていた。

（やべー！！ 死ぬかと思った！！）

出来れば叫んでいたところだが、今はできない。

隣からセラフィが笑いかける。

ひとまず安心する辰巳。

残るは教授のみ。

まあ難なくクリアし、次へと進んでいく。

『やっと中間地点といったところだろうな。事前には伝えてあると思うが、私たちが向かっているのはあの出口ではない。排水溝だ。地下といえど排水溝くらいはある。そこを目指す』

セラフィは前を向きながら、無線を入れた。

『教授、一応言っておくが、ここら一帯のカメラはウィンドウに映しているんだろうな』

その質問に、もちろん、と答えた。

それから、先程の行動をひたすら繰り返した。ときたま天井に張り付きながらの移動もあったが、まあ何とかクリアする。

そして、しばらく進んだ時の配列は教授、辰巳、セラフィという順番だ。何だかんだで入れ替わってしまった。

『ここ？』

教授は進めていた足を静かに止めた。

目の前には小さな横穴らしき円状の蓋があった。

『そうだ』この距離ではもうイヤホンの効果はなしていない。『この穴はイギリスの地下にある下水道と繋がっている。ここを潜り抜ければ――』

辿り着けるのだ、地上に。

「セラフィ――」

辰巳は振り向く。

しかし。

そこにはセラフィの姿が跡形もなかった。

「え………?」

頭が真っ白に染まる。

何でいないんだよ。

その時だった。

「うわ、あああつ！」

教授の悲鳴が後ろから聞こえたのだ。

辰巳は瞬時に教授の方を向いた。

いない。

（なんなんだよこれは――!）

そう思ったとき、ドス、と首筋に衝撃が加わった。
辰巳の意識はそのまま闇へと落ちていった。

『オーデインの怒り』

どこことなく、ぎこちない気分だった。

辰巳は静かに目を開けた。

あの時、首に強い衝撃を受けて以来の記憶がない。どうやら気を失っていたらしい。そう、自覚すると、開けた目に、目映いほどの光が差し込んできた。

「？」

最初はまだ光に慣れず、ぼんやりとした、焦点があっていない物体が複数見えた。次第に光にも慣れ、その物体が鮮明に見えてくる。それは、人だった。幾人もの人が、そこにはいた。

辰巳ははつきりとしなない頭で考える。

（そっぴゃあセラフィと教授は？）

そう考え、辺りを見回すと、辰巳の側にはまだ目を覚ましていない教授がいた。

辰巳はすぐに教授を起こそうと手を使い、揺すろうとするが、

（動かない？）

そう、手足が縛られていたのだ。これは教授にも共通していた。

ここにいる幾人もの人たちも、だ。

それに気が付いた辰巳は、仕方なく、体を教授に寄せるような形で揺することにした。

「教授。起きろよ」

すると、教授はいきなり奇声をあげた。

その表情は恐怖に染まっていた。

「だ、大丈夫か？」

あまりの事に、周囲にいた人も、思わず視線をこちらに向けていた。

「うん、ちょっとね。さっきのことを思い出しちゃっただけ。ごめんね、心配かけちゃって」

いや構わねえけどよ、と返す辰巳。

「で 何を見たって言うんだ？ 俺はすぐに気を失っちまったからよ。何が起きたかすら分らない」

その問いかけに、教授は答えた。

「さっき僕が見たのはキツシム先生だったんだ」

「キツシム先生？ でも、牢に入れられてたんじゃ」

「多分抜け出したんだと思う」

少し困った顔つきになり、教授はさらに説明を続けた。

「それで、そのキツシム先生の腕のなかにセラフィがいた」

なるほど、だから後ろにはいなかったのか、と辰巳は勝手に自分の疑問に結論を付けた。

「それじゃあ、セラフィはどこに………？」

辰巳は周りを見渡した。

だが、セラフィの姿はどこにもいない。遠くの方も見渡してみたが、あの城の天守閣を連想させる綺麗な金髪は見当たらなかった。

「教授、セラフィも連れてこられたのか？」

教授は首をかしげた。どうやら知らないようだ。

「僕は知らないよ。君と一緒に気絶していたからね」

そうか、と力なく答えると、やけに大きな声が辰巳の耳に入った。

「ご機嫌よう皆様。多忙なお仕事の中、お越しくださいますて、まことにありがとうございます」

言ったのはキツシム。お馴染みの黒のロングコートに身を包んでいる。

その発言に、多数の野次が飛んだ。しかし、キツシムは動じない。キツシムがいるのは先程の老騎士会ナイトマスターズが行われていたとき、四人の人が席を取っていた場所だ。

そして、柔和な笑みを浮かべるキツシムは、さらに言う。

「ここに連れてきたのは他でもありません」

今度言ったのは『お越しくださいますて』ではなく『連れてきたのは』と言った。これはつまり、ここにいる全員にキツシム「エラ

イダムが暗黒組織ダークマターのリーダーであることを証明つけてしまう。なぜなら、その連行してきた事を知っていて、さらに手足を縛られていないからだ。

「今ここに、私たちの手中にある人物がいます」

上げた拳を握りしめ、達成感のある表情をとった。

辺りの英国騎士団団員は静まり返っているのは言うまでもない。

「これから私は世界を創り変える。この腐った下らない社会をな。貴様らはその礎だ。光栄に思っただけ死ねがいい」

言っと、キッシムは虚空に消え、代わりにこの会場の天井部分に奇怪な魔法陣が浮かび上がる。

それを見た者たちは驚愕の色に染まる。

辰巳は何がなんだか分からない。即急に教授に聞く。

「何だよあれ？」

辰巳が聞いたとき、教授は表情を変えずに言う。

「『オーディンの怒り』」

オーディンの怒り？ と聞き返すと、教授は説明する。

「光の神であり、オーディンの息子であったバルドルがロキに騙されてヘズに殺されるんだ。それで、父であるオーディンは巨人の女の予言に従って、復讐者となる息子ヴァーリを女性リンドに産ませた。ヴァーリは一夜にして成人し、復讐の対象であるヘズを殺した

——という北欧神話の話があるんだ。そのオーディンの怒りを復元させたのがこの『オーディンの怒り』。それでも小さい方だけど、ここにいる人間くらいは簡単に跡形もなく消滅させつだらうね」

そんなバカな、あきれてしまう。だが、これはもう紛れもない事実であった。どんなに否定しようとしても上にはその『オーディンの怒り』がある。例え、この中の誰かが術式を消しかかっても不可能。それに、ここから逃げたとしても爆風などに巻き込まれて御陀仏だろう。

「そんじゃあもう……」

諦めかける辰巳に、教授はさらに追い討ちをかけるように言う。

「もう無理だね。この縄も魔法でコーティングされてて、そう簡単には外れないだろうし、この会場のドアは鍵がかかっているだろうしね。でも、あの大きさでは一人では開けることができない。そう考えるともう手だてはない」

一難去ってまた一難。これほどまでにこの熟語があつ状況は生まれないだろう。

縄も説けない、ここからも出ることができない。負の連鎖、ここから先に在るのは『死』だけだ。

「ふざけんなよ。なんで俺がこんなに巻き込まれなきゃいけないんだよ。何だかバカバカしくて笑えてくるよ。なあ、教授？」

目には輝きが失われている。

「もう——」

教授がそう言うと、天上に発動していた術式——『オーディンの怒り』が輝き始める。

青白く、不気味に。そして、変に思われるが、綺麗にもあった。

辰巳はもう生きる統べを失った。

そして——

門

キッシム「エライダムは大ホールに仲間と共に集まっている。大きさは東京ドームの半分くらいの広さを誇る空間だ。

「これで全員か？」

その質問に、大抵の者は首を横に振った。

「いえ。老騎士どもを抑えている者たちがいません」

答えたのは先程も出てきた女性だった。長い赤みを帯びたロングヘアが特徴的だ。

「まあ、そいつらは、どうでもいい。私が言ったのはそいつらを抜いた状態で全員いるか、ということなにだからな」

キッシムは周りにいる手下たちを散らせると、一人大ホールの中心部へ向かう。

そして、腕の中には金髪碧眼のあの少女が抱えられていた。

「その子が例の——」

丁度キッシムの近くにいた団員一は、言った。

それに、キッシムは「ああ」とだけ答え、そのまま中心部へと向かった。

中心部には直径二十メートルにも及ぶ魔方陣が、地面に描かれていた。

その魔方陣の中央にまだ気を失っているセラフィを寝かせた。

「やつとか——」

呟いた。

「何年間この時を待ったことか——」

セラフィを寝かせ終わったキッシムは ゆっくりと立ち上がり、
ダークマター
暗黒組織団員に告げた。

「これから午前零時まで待機とする。その時が来次第に、術式の発動を開始する」

それだけ告げると、このホールに設置されていたイスに腰を落ち着かせた。

団員たちも皆、キツシムに習うように各自自由に行動を取った。
しかし――

突如、ズゴンッ！！ という英国騎士団本部全体を揺るがす轟音が、響いた。

キツシム以外の暗黒組織ダークマターの面々は腰を落として倒れないようにと体勢をとった。

だが、違う方向から見てみると、これは腰を落とさないと倒れかねない程の揺れだということだ。『オーデインの怒り』はそれほどまでに強力な魔法なのだ。

その魔法を発動させた等の本人は、イスに座り、テーブルに置いている紅茶を優雅に啜っていた。

「発動したか。これで英国騎士団団員はすべて始末したな。零時まで後何分ある？」

キツシムは、近くにいたお馴染みの女性に、時刻を尋ねた。

「今現在は午後八時を回っています。どういたしますか？ やろうと思えばやれてしまう時間帯ですが」

その発言に、キツシムは少し考えるが、

「いや、そうだな。もう少しだけ待とう。後一時間だけ、そうしたら実行だ。まあ多少エネルギーが少なくとも、『門』を開ける為のエネルギーくらいは溜まっているだろう」

隠語か何かは分からない。だが、キツシムが今さっき言った『門』というのはそこらへんにあるような物のことではないことくらいは分かるだろう。

不可解な単語を残し、キツシムはまた紅茶を口へと運んだ。

行間2（前書き）

文の量は少なめですのでご了承ください

行間 2

五時間前まで老騎士会ナイトマスターズが行われていた会場。
教授たちはここにいた。

だが、今ここは、瓦礫の森と化していた。

粉塵が空中を自由に飛び回っている中、一人の人影が見えた。
しかし、その人影は一つではなくなっていく。

そう、瓦礫を押し退けて、気力を振り絞って瓦礫の中から這い上がってきたのだ。もちろん、彼らはここに監禁されていた英国騎士団の面々だ。出た人はまだ埋まっている人を助けるべく、瓦礫をあさり始める。

その連鎖が続き、とうとうあの巨大術式の中、死者〇人という快挙にも、奇怪にも見えるまあ喜ばしい事態になったのだ。

そのなかには、あの光をも吸い込んでしまいそうな綺麗な黒い髪の毛を持った少年——教授も例外ではなかった。

仲間に命を救われたはずなのに、教授の表情はパツとしていない。むしろ、疑問。それが浮かび上がっていた。周りの人たちは歓喜に浸っている。

それなのに——

——何で僕は生きているんだろう？

そう、考えていたのだ。

無理もない。あの状況で、あの規模の術式を目の当たりにしたら死を覚悟し、この後生きているなんて考えられなかったのだから。

教授は、その事を頭に入れながらも、辺りを見回した。

（辰巳は？）

そう、辰巳がいない。

大勢の人数がいるということは置いておいても、辰巳がいない。

まだ見つけていない、ではなく、いないのだ。

しばらく探すもやはりいなかった。

そしてセラフィも――

疑問は増える一方だった。

正体

一時間後、キツシムの言っていた時が今やってきた。

女性がそう告げると、キツシムはイスから静かに立ち上がり、意気込みを飛ばした。

「時はきた。ここまで協力してくれた皆のものには感謝する。これから行おうとしているのは世界の改変だ。並大抵の事では成し遂げられない。命が惜しい者は抜けていい。別に抜けたからといって、制裁を加えるなんてそんな真似はしない。それでも、抜けたとしても、私はその者に感謝をする。同じ社会の卑劣な面を知っている者だ。だからこそ、ここまで着いてきてくれただけで充分だ。それでも、着いてきてくれるという者はここに残ってくれ」

そう告げると、キツシムは深呼吸をし、もう一度、念のため、言う。

「もう一度言う。着いてきてくれる者はここに残ってくれ、これは任意だ。決して強制ではない」

その目には、目標への、信念があつた。自分の欲のためではない。今まさに困っている、苦しんでいる人のために、行っていた。

それは、キツシムも一緒だったのだろう。キツシム自身も同じ体験をした。詳しくまでは知らないが、同じ体験をしたからこそ、こういう危険を冒してまでも実行するのだ。ただの同情で、ここまで出来ないだろう、普通は。

そして、この場を動く者はいなかった。誰一人、キツシムが話始めたその瞬間にいた場所から、動かなかった。一步も。それは、その者たちの意思の強さをも表しているのだろう。同じ体験をしたからこそ、起こすことができる。それほどまでに、卑劣な環境で育つたのだ。

想像も絶する、劣悪な世界。そこに今苦しんでいる人たちを、又はその光景を、まるで舞踏会を楽しむように、見つめる裕福な界層

に住む者たちへの復讐。それが、この暗黒組織^{ダークマター}発足の理由。

キッシムは、この場を離れるものがないことを確認すると、
「分かった。皆協力してくれるのだな。これからしようとしているのは、このヴァルキーの血を引く女、セラフィーナ^二ヴァルキーの現段階で溜まっているエネルギーを使って、ヴァルハラとここ現界とを繋ぐ《門》を具現化させる。この魔方陣はそのため、私が独自に開発したものだ。その為、成功する確証はない」

言つとキッシムは、魔方陣の中央で寝かされているセラフィの前まで行った。キッシムは両手をあげた。それに合わせるように、バラバラに散らばった面々も、キッシムの真似をし、両手をあげた。そして、詠唱は始まった。

「開け、異界と現界とを繋ぐ偉大なる門よ！ 戒めの鎖を解いて扉を開けよ！ さあ！」

言い終えた瞬間だった。

キッシムのいる魔方陣の中空五メートルのところに、いきなりヒビが入った。虚空に、だ。さらに、ヒビは広がり、大きさを増していく。

終いには、ヒビが入った一帯が砕け落ちる。

そこに現れたのは《扉》——いや、これは扉なんかじゃなかった。

《門》だ。

キッシムが言っていたのはこれのことだったのだろう。

その門の回りには数体の天使のような美しい女性の像が刻み込まれており、大きさは十メートルを越える。

キッシムは、その《門》を見ると歓喜に、そして、奮起に浸る。

「これがヴァルハラと現界とを繋ぐ門！」

これが、キッシムが長年追い求めてきたものだった。
そして、行程は最終段階に突入する。

「開け、ヴァルハラへ繋がる門よ。美しく、華麗なヴァルキリーは

ここにいる。エインヘリヤルを導き、ラグナレクへの戦いに励む勇姿ある者たちを導け、この現界に！！そして、戦え。世に蔓延る人喰い共を。そのために、汝ら法を犯し、戦うのだ！！　ヴァルハラにてもてなされた恩をここで返せ！！　そして、結束しろ！！」

言つと、キツシムの言動に促されたのか、門が開きかける。

扉と扉の間から、嫌な空気が流れ出す。冷たい、残酷なイメージさえ覚えさせられる。

キツシムも、その光景を、ただただ呆然と立ち見していた。

他の面々は距離をとっていても怯えている。英国騎士団内で、『騎士』という名誉ある称号を持っている猛者たちでさえこの有り様だった。ただの一般人である辰巳がこの光景を見たら、腰を抜かすでは済まない事態になるだろう。

しかし、そんな恐怖溢れる空間で、キツシムだけは違った。さっきまではただ驚き、見上げているだけだったが、今はもうその驚きはなくなり、興奮していた。

「ついにあの忌々しい連中を、殺れる！！」

そう叫ぶ。

その言葉には、喜びの感情もあった。

その後も、門はどんどん開いていき、冷気もまた、滝のように流れ出ている。

その時だった――。

後もう少して、戦死者――エインヘリヤルが出掛けている扉を、何トン単位とかそんな次元も超越した重さを持つ扉を、意図も簡単に閉めるやつがいた。

影は見える。だが鮮明な姿は見るできない。

そいつは扉を閉める。

「ダメダメダメダメ。これ開けたら世界のバランスが崩れるぞ。分かってやってんのかお前」

閉めると、そいつは五メートルの高さから飛び降りた。

「誰だ」

しかし、キツシムは動揺する素振りも見せず、シルエットしか見えないやつに声を掛ける。

「俺か？ 俺は――」

言葉が濁った。言いづらそうに頬を掻くと、

「まあ何て言うのか、多田野辰巳と言えればいいのか」

多田野辰巳？ と首をかしげているキツシムに、自称辰巳はさらに続ける。

「まあ確かに俺は辰巳何だけど、あくまでそれは今の俺の仮の宿り主であって、本来俺は辰巳じゃねえんだ。そもそもこの間下界に堕ちてこなければこんな事態にはなんなかつただけだよ。まあ堕ちちまったもんは仕様がなからな」

しゃーないしゃーない、と気軽に答えた。

キツシムは疑問をそいつにぶつけた。

「貴様は誰だと聞いているんだ」

そして、そいつは答えた。

「俺は――」

キツシムの表情が、驚愕色とも言える色で染まった。

戦闘開始

「正気か」

「正気も何も、その本人なんだから。じゃあ何か、俺はそのカマエルじゃねえのになれって言うのか？ そりゃ笑えるな。さすがに俺たち天使でもそんな事はできやしねえ」

天使。『神』の伝達係兼使い。様々な宗教で意味合いは違うが、まあいろいろとあるのだ。

さらに、そいつが言ったカマエルというのは、決して『構える』と間違えてはいない。真正銘カマエルだ。一字一句間違えてはいない。『神を見る者』という意味があり、十四万四千もの能天使の指揮官とも、一万二千もの破壊の天使を率いているともされている。そして、火曜日の守護天使ともされている。

その天使が、本来は霊的存在であるはずの天使が、今ここで喋り、会話している。もちろん、この事事態、驚いてはいるのだが、キッシムが真に驚いているのはその事ではなかった。

そうだ、天使が今現在ここにいるということだ。普通、天使は霊的存在として扱われている。ごくごく普通に生活していれば、それとは出くわさないはずだ。なのに、今それは目の前にいる。普段は人の目には見えない者として喋っている。その事に驚いている。『で、だ。さっきも言ったけど、この門を開けると天界とここ下界——いや、お前らは現界と呼んでいるんだっけ？ まあそんなことは今はどうでもいい。俺が今聞いているのはそういうことじゃねえんだからな。戻そうか。開けたら、下手すると下界と天界が入り交じって大変なことになるぞ。本来、この空間と同じ座標位置に存在する天界が、その門を開けることによって天界と下界が繋がれる。するとだ」

辰巳ならぬカマエルは、人差し指を立て、言う。
「混ざるんだよ。ここでいう違う色の絵の具と絵の具を混ぜたかの

ようにな。そうなつちまうと下界で天使が普通に見られるようになつちまう。ようは世界の裏表がなくなるっつゝ事だ。それでも、そうなつてでも、この門を開かなきゃいけねー理由でもあるっているんか？」

カマエルが尋ねると、キツシムは表情を強張らせた。

「それでも、やらねばいけない。その為に私はここまでやってきたのだ」

しかし、それを聞いたカマエルは、軽くあしらう。

「それ私情？ だったらダメだな。いや、その以前の問題だ。そんなちんけな理由で世界のバランスを崩すような真似はしてもらっては困るな」

言つと、近くに、未だに気を失っているセラフィを見て、近くに寄つていった。

「それくらい、自分たちでどうにかしろよな。お前らにはその魔法があるんだから。それで殺すなり言いなりにさせるなりどうにかしろ」

カマエルは、そこらにいるダークマターの暗黒組織の面々を蟻を見るかのような呆れた視線を送ると、側にいるセラフィを担ぎ上げた。

「それと——」カマエルは言う。「自分たちの私情にこの子を巻き込むな。ヴァルキリーの末裔は思っている以上に危険だぞ。こいつらの力を使えば天界の征服も夢じゃなくなる。分かったな」

その一言に、暗黒組織ダークマターの要員は息を飲んだ。

逆らつたら躊躇なく殺られる。

そう本能が叫んでいたのだ。一種の防衛反応だろう。

が、ここで止めるものがいた。

「行かせると思つか？」

静かに、決してカマエルの威圧に臆することなく、キツシムは言つた。

しかし、その落ち着いた印象はすぐに消える。

「私たちが何年待ったと思つているんだ！！ そんな世界がどうこ

うなろうと関係ない。あいつら、あの忌々しいクズどもを殺れればいいんよ！！　その為なら何んだってやってきた！　一国にも等しいこの組織の存在を知り、魔法も必死こいて覚えてきたんだ！！　ここで諦める？　無理だ、私たちは既にもう止まらない。やるしかないんだ」

言葉は既に、絶叫の域に達していた。

「そして、我々は目的の為にこの組織を裏切った！　一国にも等しい組織を！　それも、ヴァルキリーの末裔という存在を知ってから、方法が分かってからはただただ待つだけの時間、この娘、セラフィが十四になるまでの時間。実に長かった。それを諦めると、貴様は言っているんだぞ。出来るわけがない」

それも、キツシムの意見もある程度は的を射ていた。復讐の為に自己犠牲だつていとわれない。覚悟は座っていた。しかし、しかしだ。それはあくまで私情だ。カマエルも言った。この門を開ければ世界のバランスが崩れると。そういう事が考えられるにであれば、その話はまた別だ。キツシムたちの目的に関係のない人たちも下手したら死んでしまう。だからカマエルは止める。正直、カマエルも面倒が臭いのだ。人間のいざこざに付き合っているなんて面倒くさい。だが、事がこの大きさだ。レベルは人間の考えている範囲を優に越していた。いや、まだ起こってはいないが、起ころうとしている。まだ未然の状態なのに天使が騒ぐほどだ。きっと門を開けてしまったら想像もつかない、想像も絶する出来事が、この世界飲み込むのだろう。

だからこそ、カマエルは止める。

だが――

「そこまでしてこの門を開けてーのか。分かった」

カマエルは頷くと、殺気を込めた視線をキツシムに向けた。

「だったら俺を倒してから開けるんだな」

その発言に、キツシムは背筋にゾクツ、とした寒気を感じる。

しかし、キツシムは己の信念を貫くため、その場に踏みとどまる。

「皆はここから立ち去れ。巻き込まれるぞ」

キツシムが言うと、暗黒組織ダークマターの面々はその場を退いた。
ここに残ったのはキツシムとカマエルだけ。

広大な空間に、静寂という名の時間が訪れた。

人間対天使。

聞いただけでも結果がわかってしまう。だが、キツシムは逃げなかった。

キツシムは構えをとる。

「久々に本気を出そうか」

微笑を浮かべるキツシムに、カマエルは、

「ほほう、本気とな。まあ実力を見せてもらうぜ人間さんよ」

ほざけ、と天使に挑戦状を叩きつけた。

「ヴァージョンは人間が使う魔法に変換。これでよし」

カマエルは、何やら作業をしたのだろうか、よくはわからないが、一言終えて、構えも取らずに戦闘大勢に入る。

そして、音も無く、戦闘が開始された。

戦闘開始（後書き）

面白いと思っていただけでは幸いです

決着！？

動作は単純だった。

キツシムは一気にカマエルの懐に入り込むと、鳩尾目掛けて拳を放った。だが、その速度が尋常ではなかった。

速度は音速に等しい。

両者は肉体を魔法で強化しているからこそ着いてこれる領域。

もし仮に、肉体を魔法で強化していなかったら、その場合は体がバラバラになるだろう。

そんな中、キツシムとカマエルは激突した。

瞬間。

ドバツ！ という衝撃波が放射状に広がった。

辺りに置いてあったイスやテーブルは数十メートル飛ばされ、壁にぶつかる。その他の安易に設置されているものは吹き飛ばす。

それほどまでに強力な衝撃。

しかし、両者は拳を握り締めるような形でたいじしていた。

キツシムの放った拳はカマエルの鳩尾前で受け止められていた。

「くっ！」

キツシムは攻撃が効いていない事を瞬時に確認すると、瞬きの時間の内に行動を移した。

今度は回し蹴り。音速に等しい速度——つまり威力を持った蹴りだ。

しかし、それをカマエルは余裕をもって後ろへと退き、それを躲す。

「人間にしちゃあやるほうだな。だからこそあんなことはさせたくなくなる。天使も人間も関係なくな」

余裕の発言に、キツシムは憤怒する。

「ざけるな！！ こっちは必死なんだ！！」

冷静な判断を失う。

そのせいで反撃を受けた。

グガ！？ と体を剃らすような大勢で後ろへと飛んだ。

すぐにキツシムは立ち上がる。

目の前には天使。気を抜く暇などない。

だが、その件の天使は未だに蹴った足を中にぶら下げ場から言った。

「油断大敵。いかんぜよ」
と。

一体どこの歴史上の偉人だ！ と突っ込みたくなるが、今はそんな場合ではない。

カマエルもキツシムが立ち上がるのを確認すると、自身の目の前に魔方阵を組み上げた。

「即席魔方阵、名付けて『アングリーエンジェル憤慨する天使』」
瞬間だった。

その魔方阵から数多の火の玉がキツシム目掛けて飛び出した。青色の輝く高温の火の玉。その数およそ百、いや、それすら優に越しているだろう。

圧倒的な火の玉の量。

さすがのキツシムも瞬間に呑み込まれていった。

ジュウ、とキツシムがいる箇所から焦げた臭いが漂ってきた。

「・・・・・・・・」

それを、カマエルはただ黙って見ている。

たとえ、肉体を魔法で強化していたとしても、その強化している肉体の防御現界を越えてしまえば肉体にはダメージが伝わる。しかし、今回は火の玉だ。温度は人間がいくら訓練しても、いや、並大抵の努力を怠っては適応することはできないだろう。

だからこそ、カマエルは確信した。

これで終わりか、と。

この焦げた床にはきつと黒い炭と化したキツシムがあるのだろうと。惜しい人間を殺したな、とカマエルは考えた。

あっけなかった――

――そうであるはずだった。

後ろから魔力を感じた。

無論、カマエルのものではない。となると――

「――ッ!？」

カマエルは咄嗟に横へと飛んだ。

そこに、さっきまでカマエルがいた場所に、光線のような一本の線が通っていた。

横に飛び退いたカマエルは、すぐに魔力を感じた場所を見る。

そこにはやはり、キツシムの姿がある。しかし、服装の所々は焦げたように黒い部分があった。

「生きていたのか」

そう、カマエルは生きていた事に、称賛を送った。

「・・・・・・」

キツシムは黙って何も喋らない。それどころか肩を激しく動かし、息を乱していた。

「まあそれくらい、が妥当だろうな。即席で完成させたとはいえ、天使が作り出した魔法だ。生きてただけで称賛に値する。やっぱ強えよお前さんは」

その言葉に、キツシムは怒りを覚えるが。ただそう思っただけで、何もしなかった。

それほどまでに蓄積したダメージ。

「それでも」カマエルは言う。「まだやるのかい？ 自分の命を捨ててまでも」

その質疑に、キツシムは当たり前だ、とだけ答え、付け加える。

「あいつらだけは――いや、あいつらに関わりを持つすべての存在を殺らなければ、私たちの怒りは収まらない」

眼光には鋭さがあつた。

「それをされても可笑しくないことをあいつらはやってきたんだ。報いを受けるのは当然のことだろう。そうは思わないのか？」

キツシムは両手を使い、ボロボロの体でカマエルに語った。

「それは確かに正しいな。人間つてのは、恨みをどうしてもはらしたいがために、己を犠牲にすることがある。お前がその典型的なパートナーだな。でもよお、そいつらを殺して何になるってんだよ。もう一度考えてみるよ。そんな下らない奴等を殺して、その後何になる。昔はもう戻ってこねーんだ。今を一生懸命生きろよ、そうした方が楽しいと思うぜ、やっぱり」

いい終えると、カマエルは微笑を漏らす。

しかし、キツシムは説得には応じなかった。

「違う私は自分のことだけを考えてはいない。私が昔、どんな酷い行いを受けたか、お前は知らないからそんな事を言っていられるんだ。今もなお、昔の私と同じ行いを受けている奴等がいるかもしれないんだぞ！ それを見捨てる？ ふざけるな。私はもうあんな酷い環境で育ちたくなどない、働かされたくもない。だからこそ、この方法で、劣悪なあのかうソつたれどもを殺るんだ！！」

わがままだな、とカマエルは嘆息をはき、目に鋭い光を灯した。

「お前がどうなるかと知ったこっちゃねえんだ。そうだ、どんな酷い行いを受けていようと俺にとっちゃあどうでもいい。ただ、俺はこの《門》を開けるな、と言っているだけだ。それ以外の方法で殺ればいいだろ、その劣悪な奴等を。もうやめだ。どうもお前は言うことを聞かないバカらしいからな。武力で解決させてもらう」

言った瞬間だった。

キツシムの背中を、先程感じた寒気とはレベルが違う何かを感じた。

「——ッ！？」

これからがこの、天使の本気。

キツシムは脚力のみで一氣に後退し、十数メートル距離をとった。さらに、瞬時に防御魔法を何重にも渡って展開する。ミサイルなら

簡単に防ぐことが出来る魔法だ。

その瞬間。

キツシムが作り上げた魔法を意図も簡単にカマエルが放った未知の魔法によって吹き飛ばされる。

轟！！ という爆風を伴う強力な衝撃波。

キツシムは既にその場にはいなく、別の場所に姿が見えた。

「まだやるか？」

本気を出してまだ数秒、それでも、キツシムには数時間の時に思えて仕方がなかった。

そして、キツシムは考える。

本当にこのままやって勝てるのか？ と。確かに、こんな化物染みた奴とやりやって、勝てる勝率なんてほぼ〇に等しい。

「当然、私には目的がある」

だが、キツシムはその考えを捨てた。

絶対に奴等を殺す。それだけが今のキツシムを動かす原動力となっている。

「懲りないやつだ——ッ」

意図を確認すると、カマエルは己の足で、一気にキツシムとの距離を詰める。

「——ッ」

キツシムも、何とかその行動に対応し、カマエルの右足の蹴りを右腕でガードする。

ゴギッ！ と嫌な音がキツシムの腕に響いた。

「が——ッ——！」

顔をしかめるも、カマエルは攻撃の手を緩めなかった。キツシムとしてはいち早く、腕に回復魔法を施し、時間稼ぎをしたいところだが、出来ない。

隙がない。嵐のような乱舞。

それをキツシムは魔法で強化させた左腕、足を巧みに使い分け、何とかカマエルの攻撃を受けていく。しかし、どうしても交わせな

い。いくらやつても受け止める、という行為が精一杯だった。

「クソが——!!」

「喋っている暇があるのか？」

瞬間だった。その『喋る』という行為に使った意識が、キツシムの本当に僅かな隙を生み出してしまった。その隙をカマエルは見逃さなかった。

腕のみで攻撃をしていたカマエルは、足を足で払った。

「——ッ!？」

まさかの攻撃に、さすがのキツシムも、転けてしまった。

「終わりだな」

そう言い、カマエルは転けて中に浮いているキツシム目掛けて拳を落とした。

さすがにその拳を交わすことも、受け止めることも出来ずに、諸にそれを喰らった。

胃から胃液が込み上げ、さらには鉄の味まで感じられる。

ドス! とキツシムはそのまま床に激突した。

呻き声が聞こえた。

「終わりだ人間」冷たく、吐き捨てるように、「まあこれだけ俺と渡り合えたんだ、よしだな。あばよ」

直後、切れ味鋭い音が、キツシムめがけて放たれた。

決着！？（後書き）

面白いと思っていただければ光栄です

禁忌魔法

しかし、キツシムはいなかった。

跡形もなく、そこにいなかった。さすがのカマエルも驚きを隠せないのか、額に汗を浮かべていた。

（どこに……？）

辺りを見回すが、どこにもいなかった。

「逃げた、か」

まあそれはそれでいいか、と言うと、その場に座った。

（確かに、逃げるという選択は正しいな。俺とやりあうなんて当分——いや、数百年速い。むしろ、あれほどまでにやりあえただけで相当なものだ。だがしかし、あの野郎がこんな簡単にはこのヴァルキリーの娘を手放すとは考えられんな。天使相手に喧嘩を売った奴だ。きつと、すぐに何らかの策を用意して俺の前に現れるだろう。それまでここにしているとするか、ヴァルキリーの娘のこともあるし。気がつくまで見張るしかねーし。っーか起きないんかな、コイツ）
思い、カマエルはセラフィに近づいていった。さらにはセラフィの頬を指でツンツンして遊んだりもしてみたところ、想像以上に柔らかく、カマエルは驚いた。きつと辰巳の意識が少なからず働いてしまっているのだろう。

しばらく突っついていっていると、異変が起きた。

そう、セラフィが起きかけてしまったのだ。

「うお!？」

そこで、声を出さなければいいのに、カマエル兼辰巳は、大きな声を出してしまった。

その影響で、セラフィが完全に目を冷ましてしまった。

「う……、たっちゃん？」

当初は意識がはつきりしない。その為、カマエル兼辰巳が顔の側にあっても気が付かなかった。しかし、数秒後——

「なッ、顔が近い!!」

ドス! とカマエルの顔面めがけてセラフィの渾身の右ストレートが銃弾のごとくつき放たれた。

「ぶほらべ——!？」

それを諸に喰らったカマエル兼辰巳。先程まではとんでもない戦いを行っていたのに、なぜか少女の右ストレートは交わせなかった。そのまま、倒れていくカマエル兼辰巳を嘲笑うかのような表情で見ながら、

「私を、舐めるなよ!!」

この緊迫した状況には似合わない台詞を吐いた。

すぐにカマエル兼辰巳は倒れた体を起こし、言った。

「痛ってーなーおい! こちとりや結構必死になってお前を守ってやってたのによ、何だよその言いぐさは」

ジト目で呆れたかのような顔つきになった。

「何をいつている。貴様に守られるほど私は軟弱では——」

そうセラフィが言った時、指を指された。もちろん、セラフィに對してではない、後ろをだ。

そこには無惨にも木っ端微塵になっている。テーブルやイス、それよりか、所々にクレーターののような溝だっただけ出ていた。

「・・・・・・、は？」

セラフィは呆然とする。

訳がわからなかった。自分が意識を失っていた間に、一体何が起きていたのが、想像できなかった。

「まあちーとやりすぎたけどよ、また来るぜ、キツムっつー奴は。だからお前はそこにはここを動くな。一応お前さんも魔法を使えるみてーだが、ちんけなレベルじゃすぐに突破されちまう。俺が防御魔法を施しておくから、そこにずっといなよ」

それでもまだちつと。それより、セラフィは別のことに意識がいつていた。

「たっちゃん、何で魔法を使えるんだ？」

上半身だけ起こした状態で、考える。

前にも言ったが、今のこの姿は辰巳であって辰巳ではないのだ。そんなこと、今の今まで意識を失っていたセラフィは知らなくて当然だ。

カマエルはその事を一字一句間違えずにセラフィに教えた。

聞いた当初は信じられなかったが、無理矢理カマエルは理由をつけ、信じさせたというわけだ。

「で、だ」

話終えたカマエルは、中腰から立ち上がり、話題を切り出した。

「あそこに薄気味ワリー門があんだろ？ それを閉じるのに力を貸してくれねーか」

グイ、と後ろを指差す。

それに、セラフィは尋ねた。

「何だあれは………？」

その質問に、カマエルはあれか？ と言うと、説明を始めた。

「ありゃあヴァルハラとここ下界とを結ぶ門だ。お前さんを軸に呼び出されたんだけど、まあ気を失っていたから覚えちゃあいねーだろうな」

「ヴァルキリーの力を使つてか？」

もちろん、とカマエルは答えると、セラフィの目付きが変わった。「分かった。そもそも原因は私たちヴァルキリー家だろう。一族の失態はその一族が責任をもって解決せねばならんのだしな」

いやいや、そこまでアンタに責任はないから、と言うカマエルを置いて、セラフィは続ける。

「それで、何をすればいいのだ私は」

「まあ結果的に言うと、アンタはなにもしなくていい。ただそこで突っ立っていてくれればいい。それと、死体が一つ欲しいところだ。分かつてる。嫌なのは分かるが、無いとダメなんだよ。いや、ダメか。俺はお前を守っている。それに、キッシンだってそのうち来るだろうから——」

むう、と考え込んでしまう。

待つこと数分。

「そうだな、やっぱ俺一人で行こう。どうせお前さんには防御魔法を使っているんだしな。外の状況を見ると夥しい残留魔力が散らばっていやがる。となると、さっきまで戦闘が行われていたみたいだしな。死体見るの嫌だろ？」

言っと、カマエルは消えた。虚空にだ。

カマエルは英国騎士団本部のありとあらゆる場所を探し漁った。

結果から言おう。

一応見つかったには見つかったが、

「無惨だなこりゃあ」

見つかったのは肉片——と称しても違和感を感じられないものだった。

体の一部であるが、それがどこであるかが分からない有り様だった。

「これさすがにあいつに見せたらヤベーな」

どーすっかなー、と思考を巡らす天使がそこにはいた。

例の大ホールに戻ったらカマエルは、肉片を隠しつつ、遠くからセラフィに言った。

「あー、いいか？ お前はなにもしなくていいからな。ここにいてくれればそれでいいんだ。あくまでヴァルキリーを呼び出すまでの仮のヴァルキリーがお前、だと思ってくればそれでいい。それと、何時なとき、キッشمが襲撃してくるかわからない。だから、お前はそこにいるだけでいい」

動くなよ、と念を推してから、カマエルは作業にはいった。

まず、具現化されている《門》の前に 先程回収してきた肉片を落とす。

嫌な音が聞こえたが、カマエルは気にしない。

その後、さらに肉片の回りに魔方陣を書いていった。

「それは？」

セラフィの言ったことに、カマエルは即答した。

「まあ簡単に言うと、ヴァルキリーを呼び出すための、魔法だ」

視線は魔方陣を見つめたまま、作業は止めない。

「そうではない。その肉だ。それが何なにかを聞いているのだ」

うぎ、とビクつくカマエル。なんと説明したらいいのか分からず、そわそわし始めた。

「まあこれはあれだよ——そう！ 鶏肉。特売セールがやってたから——」

「なわけあるか——！」

怒鳴るセラフィに、カマエルは仕方ない、と言い、頬を掻きながら確認を取った。

「怒るなよ」

「怒らん」

「本当に？」

「本当だ」

「じゃあ言う。これは人の肉だ」

ゾワ、とセラフィの背筋に悪寒が通った。

「言っておくが、冗談なんて甘ったるい話じゃねえぞ。この肉を使ってヴァルキリーを呼び出す。まあ正確にはこの肉片に宿っていた魂に用があるんだけだな。じゃ、始めんぞ」

言うところ、カマエルは人間には理解できない不可解な言語を放ち始めた。

その時だった。

「させるか——！」

突如、声がかかる。

カマエルは構わず作業を続けるが、その声の主はそんなことも気に止めず、一気にカマエルとの距離を積み、攻撃魔法を繰り出した。

水。

それがこの魔法の表現方法に最も適していたに違いない。

洪水。

そうとも言える。

まさに水の嵐。それが、カマエルに向かって進んでいった。

「――e f s――p i x x」

カマエルは止めなかった。

だが、天使と言えど、さすがに人間の身を借りている状態で、この洪水を完璧に受け流すことなど無理だった。

いや、その前にそんなことする気すらなかったのかもしれない。

そして、この場に現れたのはキッシンⅡエライダムだ。

洪水で押し流されたカマエルは、大ホールの壁際まで移動していた。

「チツ、面倒なタイミングで現れやがる。お陰で詠唱が止まっちゃったじゃねーか」

「貴様こそ、あれで何をしようとしていた」

「何って、そりゃあ一つしかねーだろいが」

「《門》の破壊、か」

まあそんなところだな、とカマエルは言った。

セラフィは唐突の出来事に、まだ頭が反応していならしく、啞然とした表情で、カマエルが作り上げた防御魔法の中で座っていた。

「で、その肝心な《門》の破壊は出来たのかな？」

「ほざけ、オメーさんが強制終了させちまったんだろーが」

そうか、とキッシンは満足そうな表情を取った。

「それで」カマエルは言う。「対策は出来たのかい？ まさかお前さんが何の策も無しにまた突っ込んでくとも思えんから、何らかの策は用意して来たんだろ？」

「お見通しか。まあそんな事はどうでもいい。要はその策で貴様を殺せば私の勝ち。そうでなければ貴様の勝ちというだけの事だ」

言っと、キッシンは瞬時に次の魔法陣を組み上げた。その早さに、

セラフィは驚く。

「光と闇は対の存在、決して交わることはない純粋な輝きは天使のごとく。輝け！」

ピカッ、とキツシム中心に、強烈なまでの光が放たれる。

思わずカマエルも目を庇うように腕を持ってきた。だが、完全には光をシャットアウトできはしなかった。

しばらく、白いモヤが視界全体を染め上げるが、それも収まる。

（クソ、単純な手に引かかっちゃった。あいつは——ッ）

辺りを見回すと、近くにはキツシムの姿は見当たらなかった。

（また逃げた——）

いや、と、カマエルは思った。

そう、いたのだ。このホールの隅に。

そして、キツシムは言う。

「天地鳴動する時、世界はわかる。新しき生命が生まれしとき、旧なる存在は消え失せる。旧なる存在はカマエル！ 新たな生命はフルキューレ！ この世界に引きずり出せ！」

瞬間。

カマエルを中心とする場所が一斉に光始めた。

「まさか——ッ!？」

「そうだ。人間が作りだし禁断の魔法。禁忌魔法の内の一つだ!! いくら天使といえども、この攻撃を喰らって生きていられるはずがない!!」

禁忌魔法（後書き）

面白いと思っていただけでは光栄です。

戦闘終了そして――

ようやく、目に染み付いた光の残像が消え始めた時の出来事だった。一瞬でもあった。だが、あの二人にとってはその一瞬が命に関わる瞬間だ。

ズゴンッ！！ という地をも揺るがす轟音と衝撃。その衝撃音で、防御魔法で守られているはずのセラフィも思わず顔を庇ってしまう。圧倒的。

しばらくし、カマエルがいたところが見えてきた。

そこにはズシンと《門》があった。あの爆発の中で、傷一つ付かず存在していた。それは、その《門》の恐ろしさをも示唆しているように見えた。

だが、肝心のカマエルの姿は跡形もなく消し去られていた。いや、それどころか、カマエルがいた場所を中心に、半径数十メートル単位の大きさで、クレーターが完成していた。

これでは――

「どうだ！ これで貴様ももうこの世にはいないだろう。やっと邪魔者がいなくなった」

両腕を掲げて、満面の笑みを取った。

「さあ殺つてやるあのクズ野郎どもをな！！」

ようやく目的に手が届きそうなくらいに近づいたキッシムは、ホルの隅で啞然としているセラフィなど目に入らなかった。

キッシムは言つと、《門》の前に立った。

キッシムの目標。それは、世界に蔓延る道楽者^{ユミ}の掃除。それさえ達成してしまえばどうなってもいい、とキッシムは考えている。

自分も同じ体験をしたからこそ、行動できる――いや、それプラス勇気も必要だ。

「開け、ヴァルハラへ繋がる門よ。美しく、華麗なヴァルキリーはここにいる。エインヘリヤルを導き、ラグナレクへの戦いに励む勇

姿ある者たちを導け、この現界に！！　そして、戦え。世に蔓延る人喰い共を。そのために、汝ら法を犯し、戦うのだ！！　ヴァルハラにてもてなされた恩をここで返せ！！　そして、結束しろ！！」

詠唱も言い終わり、とうとう《門》が開かれる。

生々しいまでの冷氣がこの大ホールに吹き込んできた。

遠くにいるセラフィも、思わず息を飲む。キツシムから五十メートル以上離れているのにここまで冷氣――否、悪寒が全身を強ばらせている。

悪寒Ⅱその《門》の中にいるものたちの力量も示しているのかもしれない。セラフィはあの《門》が天井の宮殿ヴァルハラに繋がっている事を知っている。小さい頃から耳に蛸が出来るほど聞かされていた。だからこそ、その《門》の危険性も聞かされていた。それでも、何千回も聞かされていても――

まさかこれ程までに恐ろしい物だとは思わなかった、想像も出来なかった。

そうセラフィが思っても、警告したとしても、キツシムは止まらない。天使の追撃を打ち負かしてまでも、果たしたかった目的。もう既に説得したところで止まらない。

そしてついに《門》が開いた。軋む音が空間内を木霊した。

そして――

キツシムは腹部に痛感を覚えた。

そのまま数メートル飛ばされる。二、三回地面をバウンドし、ようやく体勢を整えた。

「――ッ、まだ生きていたのか」

キリッ、とキツシムは一点を睨み付ける。

「まあな、結構危なかったんだぜ、それでも。俺の魔力を半分も削りやがって、ヘトヘトだ」

化物め、とキツシムは呟いた。

「そりゃどうも。どうせ俺はお前さんたちから見たら化物ですからね」

「いや、そんな事はどうでもいい。貴様が化物だろうが何だろうが、まず私が知りたいのはどうやってあの攻撃から身を守った

ということだ。あの攻撃は防御魔法でどうこうなる代物ではない。いつたいどうやって助かった」

「そうだな、確かに、あの攻撃は防御魔法でどうこうなる威力じゃねー。でも、魔法つてのはいつたい何でできていると思う？ それ俺らが作る魔力からだ。魔力つてのはこっちの世界で例えると汚い川の水と一緒にだ。汚い水は、飲むと体を壊す。まず飲むようにするためには浄化しなけりゃなんねー。浄化していけば、汚い水だつて飲めるようになるんだ。ほら、魔力と一緒にだ。俺らから作り出される魔力は汚い。それを浄化するのが魔方阵だ。ついでにそこで魔力の変換も行われる。つまり、だ」

カマエルは自信満々の表情を取った。

「その魔力の浄化元——つまり、魔方阵自体を破壊しちまえば、魔法は発動しない。それは別に、魔方阵全体を壊せ、つつー事でもねーんだ。一部、どこでもいいから一部だけ破壊させることができれば、魔法は発動されねー。まあ結果的に、あれはとんでもねー魔法だったから一部だけ破壊しても完全には停止させることが出来なかったけどな。まああのレベルまで下がれば、何とか防御魔法でカバーできる。それが俺の生還の理由だ」

さらに、カマエルは付け加えた。

「それで、魔方阵の線とかの部分は魔力によって地面に焼き付けたり中に浮かびあげたりするかが、今回は地面に焼き付けタイプだったみてーだな。まあそれのお陰で魔方阵を一部破壊させること自体には苦労しなかったけどな」

「クソ！ 地面に書かれていた魔方阵を抉って一部を破壊したというのか」

そうだな、とカマエルは答えた。

「そうか、それは残念だったな。あれは私のほぼ全ての魔力を使い果たして完成させた物だったんだが、それを破られるとはな。私の

負けのようだ。しかし、それでも、本来の目的で言うのなら、私の勝ちだ。見るがいいこの美しき光景を。ヴァルハラのエインヘリヤルたちが我が先という状態で現界に出ようとしている。出てしまえばこちらのもの――」

「どうかな？」

言った瞬間だった。

突如、カマエルから悶絶するほどの魔力が放たれた。

「――ツツ!?」

キツシムは息が出来なかった。それほどまでに圧倒的な魔力量。セラフィはカマエル自身が作り上げた防御魔法中にいたが、それでも、その圧倒的な魔力感じ取った。恐怖に包まれ体を動かすことが出来なかった。

そして、その魔力に圧倒されたのは、キツシム、セラフィたちだけではなかった。

そう、ヴァルハラに繋がりし《門》から出てきた、過去の猛者たち。彼かもまた、カマエルから放たれた圧倒的な魔力に身を強ばらせた。ヴァルハラという特別な環境で数百年という長い年月鍛練を積んできた彼らでさえも、その魔力の量に驚く。

そして、カマエルは腹に力を込め、言った。

「いいか、こつから先に一步でも出てみる。お前らを塵にする、それでも出てきてーやつがいたらその時はその時だ。相手になつてやる」

猛者たちは、その言葉に従った。静かに、ゆっくりと、カマエルを見据えながら《門》の中へと立ち去っていった。

それをキツシムは静かに見ていた。しかし、我を取り戻すと、言った。

「！ 何をツ――ブフ!?」

口を塞がれた。もちろん、カマエルに。

「まったく、なんつー危ねー事してくれやがった！ あいつらが後一歩、つまりここ下界に踏み込んだらどうなるかってことは先に言ったよな！？ 確かに、俺を倒したら開けてもいいつつたけど、俺はまだ倒されてねー。約束破りやがって、お仕置きだこの野郎！」

口を塞いでいた手をどけ、今度は両手で頭をグリグリと押した。

キッシムが痛がつていたのは言うまでもない。

もう体力の限界が訪れていて抵抗できない。それを、キッシムは体全体で振り払った。

「もうこんなことすんじゃねーぞ。ガチでやべーんだから。どうしてもその憎い奴等に見返してやりたかったんなら、武力じゃなくてもいいじゃねーか。例えば、こいつの頭の中にある経済とかつーやつでよ」

自分の頭を指差しながら説得を試みるカマエル。

「いや、確かにそうだ。方法ならいろいろとある。経済なんて小さい頃に捨てた方法の内の一つにすぎん。できないから捨てたんだ」

その台詞にカマエルはくちばさんだ。

「でもよお、この——言い方は悪いけど、武力つー選択肢はここまで出来たんだろ？ だったら、今のお前なら、その方法でいけんじゃねーか？ もう小さい時のお前さんじゃねーんだ。それに、まだ若い。三十代後半って辺りだろ？」

頭はハゲてるけど、とキッシムのコンプレックスを心の中で呟いた。

「そうか、だが、どうやって経済から奴等を蝕んでいく？ 方法が分からないから捨てた」

キッシムの表情が暗くなる。

しかし、それとは対照的にカマエルは自身満ち溢れていた。

「あんた、経済についての情報は持つてるんだろ？ だったら、こゆーのはどうだ」

戦闘終了そして——（後書き）

面白いと思っていただければさいわいです

恩師との別れ

セラフィはホールの隅で啞然としていた。

(消えた……)

考える。

確かあれは辰巳——いや、カマエルから放たれた圧倒的な魔力を感じてから、すべてが変わった。

キッシンも戦闘を放棄しており、今はカマエルと話をしていた。それも、何やら楽しそうにだ。

分らなかった。

しかし、戦闘が終了したということは分かる。

だが、なぜあの敵同士であったあの二人がああやって話していることも疑問だが、それよりもっと根本的な疑問があった。

それは、辰巳の中になぜ天使という霊的存在であるべき存在が宿っていたか、ということだ。だったら、あのカマエルという天使が持つ莫大な魔力が無意識下の内に流れ出し、気づくはずだ、と。そうあるべきなのに、全く感じられなかった。

そう思っている頃だ。

キッシンとの愉快的な会話から離脱し、カマエルがセラフィの方へと近寄ってきた。

「すまねえな。怪我はなかったか？ ついムカッとして最後本氣を出しちゃった。精神的なダメージとかは？」

それもない、とセラフィは返した。

それより、よセラフィは疑問をぶつける。

「本当に天使なのか？ だとしたら、なぜたっちゃんの中にいた」「そりゃあ——」

言葉を濁す。

「堕ちたんだよ。と言っても堕天使ってわけじゃねーぞ。ただ、ヘマをして天界から下界に堕ちたっつー意味での、だ。そしたら丁度

こいつの中に入っちまったってわけだ。そしてこの数年間、出る方法も分らず、眠ってた。そしてたある日いきなり身に覚えがある感覚がして、その攻撃を軽くあしらったんだよ。多分それはお前が放った『ウィル・オー・ウィプスの輝き』っつーやつだったかなー。そんな、やつだった。それでもまだ寝ぼけてて、また眠っちまったんだよ」

その台詞の一部分に、セラフィは着目した。

だから、たっちゃんに攻撃が当たらなかったわけかと。ようやくモヤモヤが吹き飛んだ。

さらに、カマエルは続ける。

「そいで、そこにいるキツシムっつーやつは魔力で目覚めたってわけだ」

「そうだったのか……」

少し恐怖も残るが、セラフィはふう、と溜め息をつき、一段落つこうとした。だが、またしてもカマエルが言った。

「そうそうそれとだな、キツシムについてなんだが、あいつはここから、逃がしてやってくれ。あいつはこれからちよっくらやんなきやいけねー大切な用事が出来ちまってよ。部下を引き連れて、ある場所へと行かなくちゃなんねー。もちろん、武力とかは使わねーし、喧嘩なんて物騒なモンはしねえ。ただ、ちよっと昔の因縁を絶ちきりに行くだだけだ。その後は——まあ楽しくどこかで暮らしていくだろっさ」

言われているキツシムはその場を立ち上がり、ホールの外に出て行ってしまった。

それを不安そうに見つめていたセラフィが嘆息を漏らした。

「本当に……大丈夫なのか？」

「まあやらかしはしねーだろうな。でも、今度の作戦が失敗しちまったらまた戻るかもしれねー。でも、今のアイツなら大丈夫だろう。立ち直った、つつたほうが良いのかもな」

そして、先程出ていったキツシムはホールの外に待機させていた

暗黒組織の要員を引き連れて、カマエルとセラフィたちの側までやって来た。

要員たちの表情は、今もなお警戒の色を消してはいなかった。そんな中、キツシムは言った。

「では、私は新たな方法で道楽者を見返してやる。それと、その道楽者にこきつかわれていた人たちも救出する。色々と迷惑をかけてすまなかった」

軽く頭を下げるキツシムを見て、カマエルは照れ臭そうに、

「なんだよそんなことか。いって、別に気にしちやいねーよ。それに、礼を言うのはこっちの方だ。久々に楽しい事が出来たからよ。こんなのは数千年ぶりだった」

これを、満面の笑みで言うカマエル。

セラフィは何かおかしくないか！？ と心のなかで疑問に思いながらも、ここは両者の思いを優先して、ぐつと堪えることにした。

その後キツシムたち暗黒組織はその場に消えた。

静寂がセラフィの周りを包み込んだ。

「やはり、本当に大丈夫だったのか？」

その静寂の中で、セラフィはカマエルに尋ねた。

「知らねーよそんなこと。さっきもいっただろ、あいつは心を入れ換えた。それでいいじゃねーか。問題を起こしたら俺が止めに行きやあいいだけだろ」

そうか、とセラフィは言うど、キツシムの事を思い返した。

大いに世話になった。そして、その恩も返せないままキツシムはどこか知らない遠くに行ってしまう。そう考えると、今までの悪行はともかく、礼をしないと気が済まなかった。

もう足が勝手に動いていた。

出ていった扉を乱暴に開け、十数メートル先にいたキツシムに言う。

——今までお世話になりました、と。

キッシムは振り返らずに、腕だけあげ、振ってきた。それだけで良かった、と思う。

「気がすんだかい、ヴァルキリー家のお嬢さんよ」
後ろにいたにはカマエル。

その受け答えに、ああ、とだけ答えた。
会話は繋がらずとも心は繋がっている。

その後、セラフィはあることを思い出した。

「そういえば教授はどうした？ それと英国騎士団の皆は！？」

「？ 何だそんな事か。それならあっちの方のここみたいな感じのホールに押し込めておいたぞ。念のため、扉の鍵は閉めておいた。
邪魔されちゃあ面倒だから」

カマエルはそのホールがある方向を指差す。

それと、『邪魔されちゃあ面倒』というのは、キッシムとの戦闘の事だろう。

セラフィは聞いた瞬間、直ぐ様そのホールがある方向へと足を進めた。

だが、後ろから声がかかる。

「あ、それとすぐに辰巳コイツが起きちまうから、倒れるぞ」言っと、カウントダウンを始めた。「三、二、一、——」

「は！？ ちょっと待て——」

セラフィは慌ててカマエルに駆け寄った。

すると、カマエルの体から力が抜けるようにボタン、とセラフィの腕の中に倒れこむ。

ズシリ、と辰巳の全体重がセラフィにのし掛かった。

「・・・・・・・・」

しばらくそのままにして、数秒たったらセラフィの背中に乗せた。
(さて、と。教授のところにも行かないとな)
思うとセラフィはその場を後にした。

教授がいるというホールには、セラファイが激戦が繰り広げられた例の大ホールから出発して四十分近く経ったらの事だった。

理由は簡単。カマエルの説明不足だったからだ。このホールと似ている、と言われても、ここ英国騎士団本部には十数も存在する。その為、セラファイは背中に辰巳を背負いながら縦横無尽に駆け回った。その体力と気力は相当なものだ。

事前に鍵は開けてある、という話は事実だったらしく、扉を押した瞬間にギイ、という耳にさわる音と共に扉が開いた。

「教授無事か!？」

無事を確認する台詞を飛ばすと、それはすぐに返ってきた。

「セラファイ!? 無事だったの!？」

扉から数メートル横に教授がいた。

「そっちこそ、怪我はないのか?」

「大丈夫。一回術式が発動したんだけど、何か停止したらしくて、なんとか生き残れたんだ——ってそんなことより、大変なんだ!」
急に慌ただしくなる。「辰巳が、いなくなっちゃったんだよ!」

それで今の今まで探していたんだけど全然見つからなくて、と嘆き言葉を教授は吐露した。

それを聞いて、セラファイは疑問符を頭に浮かべた。

「たっちゃんならここにいるが……」

えっ? と驚く教授。セラファイは説明をした。

「そうなの? おかしいなあ、確かに術式が発動するまではすぐ隣にいたはずなのに——」

それはきつと術式発動時にカマエルが目覚めたからだろう。それを教授たちは知らないから、『ここどこかに埋められているかもしれない』という概念が生まれたのだ。

「まあそれについてはどうでもいいじゃないか。まずは生き残れただけで良ししよう。それで、負傷者の人数は?」

「いや、不思議なことにはないんだ。術式が停止したとはいえ、後
に上から瓦礫が落ちてきたんだ。それでも怪我人は○」

ならいい、とセラフィは言うと、視線を教授から辰巳に向けた。こいつがここにいる全員を助けたのか、という視線を。だがそれは正確に言うと天使であるカマエルの仕業と知っているが。

「で」教授は言う。「何で辰巳がセラフィと一緒にいるわけ？」

「ああ、そのことか。私がここに来る途中で見つけたんだ」

そうなの？ と顔をしかめつつ、教授が聞いてくるのを無視した。カマエルからは自分が関与したことは内密にして欲しい、と言われた。セラフィはその事を忠実に守っている。どうやらこの事を言くと、自分が危険視され、この仮の体である辰巳が狙われ兼ねないからだ、というのがカマエルの持論だ。

だが、それはまだ想像に過ぎない。それでも想定できる事柄は潰しておかなければならない。それもカマエルが言っていた。

それよりも教授！！ まだ重大な事を聞いていないぞ。

「そうだ！！」

教授は手をポンと叩いて言った。

「キツシム先生はどうなったの！？ 僕らはこのホールの上に見えて以来のキツシム先生の行動が分からないんだ」

「それが、それなら——」

セラフィは言った。

キツシムの過去について、相当酷い目に遭ったということをカマエルから聞いたすべての事柄を一字一句間違えずに教授に教えた。それで、キツシムは自分のしようとしていた事を考え直し、ここを去っていったということもだ。

「そう……」

少し悲しいような、だが厳しさを持っている表情を教授は取った。「でも逃がしちゃっていいのかな？」

「大丈夫だろう。キツシム先生はちゃんと心を入れ換えたらしいかな。武力は使わないらしい」

すると、教授から不意を付かれたような質問を受けた。

「何だかキツシム先生と話したみたいない方だよね」

えっ？　と思わず怯む。

「ん、その反応はそうらしいね。でも、何でそんなに驚いているの？　セラフィが話でキツム先生の事を説得したんじゃないの？　その前にセラフィしかないじゃん。まあ事件は終わった、ということでもいいのかな？」

それに、セラフィはああとだけ言っと、付け足した。

「後はこの事を――まあ知っているだろうが、上の人たちに報告だけしておくか」

面倒だがな、と呟いた。

「仕方ないよ。僕たちは下っ端戦闘員なんだから」

そして、この暗黒組織ダークマターによる英国騎士団侵略作戦は終了した、と言えるだろう。だが、その本来の目的がセラフィーナ・ヴァルキリ―であったということは殆どの人たちが知らないことだった。本人からも言わなかった。

帰国

あの事件から十日後、その事をセラフィは上の人に言った。

まあ別に大した事じゃあないさ、と適当に振り払われたそうだ。

そして教授だが、教授はまたあの隠し部屋に引きこもり、何やら機器のメンテナンスをしているそうだ。この前の戦闘で（本人は参加していないが、戦いの余波で）、所々に修理が必要な箇所が出来上がったらしい。

で、だ。肝心の主人公である辰巳はセラフィと共に帰国した。セラフィは付き添いで嫌々ながらの来日だった。

帰国した時の時刻は午後六時。一旦イギリスにて休息を取ったため、多少ながら遅くなった。

それで、本人曰く、『でさあ、俺って今まで何やってたの？』らしい。正確には一時間近くの間何をしていたのだが、まあ大した変わりはない。

話は戻り、帰国後の事だった。

辰巳は空港にてセラフィにタクシーを手配してもらい、それに乗って帰れ、とセラフィに言われた。

まあこのくらいならと言うことで、零番ゲート入り口にて別れた。何だか寂しい気もするが、危険と離れられる辰巳にとってはこのくらいはまだ感情をコントロール出来る範囲内だった。

それで、この後が大変だった。

空港の外で待っているというタクシーを見つけるべく、空港から出ようとした時だった。

ふと、辰巳の肩に手がポンと置かれた。

何だ？ と面倒に振り返る辰巳の考えは、セラフィから声をかけられる、また屈強な（イギリスの）警官さんに取り押さえられると

いう二択のみだった。確立的には前者のほうかと思っただ、いざ振り返ってみると――違かった。もちろん、それは後者の方でもない――いや、近いかもしれない。

そこにいたのは日本の警官だった。

すぐに名前と住所を話すと警官は無線機で連絡を取った。

俺、何かしたっけ？ と呆然としている辰巳だったが、暫時考えていると、思い当たる府がたった一つだけあった。

そう――

母さんに何も言わずに旅立ってしまった事を。

冷や汗が全身を濡らした。嫌な感じだった。

辰巳は思わず警官に尋ねた。

「もしかして俺――」

「行方不明の少年を確保しました。……、了解、待機してお待ちしております」

やっぱり――ッ！！ と心の中で絶叫する辰巳。吹き出す冷や汗はよりいっそう多くなった。

後、辰巳は空港の事務室にて警官とその他職員さんとの挟み撃ちで縮こまっていた。

「それで君、私が聞くのは何だが、今までどこに行っていたんだい？」

それ日辰巳はどこでしょうねえ、と少し緊張ぎみに言った。

警官はまったく、とため息を漏らし、会話は途切れた。

しばらくし、事務室のドアが砲弾のごとく開け放たれた。

「たっちゃん！！」

そこにいたのは辰巳の母だった。目には涙が浮かんでいる。

「バカ！」

すぐに辰巳の元へと駆け寄ると、パシン、と一発平手打ちを頬に放った。場が騒然とする。

「どれだけ心配してたと思ってるのよ！！　どこ行ってたの！？」
その言葉に正直には答えられなかった。

辰巳は今、心配してもらって嬉しいが、答えられなかった。まさかイギリス行っていました、なんて言えるわけがない。

「プチ家出してました」

頬を掻きながら辰巳は言った。

「本っ——当に心配したんだから。もうこんな事しないでよ。母さん買い行かせて連れていかれたんだと思って悔やんでたんだから」
いや、殆ど当たってる、と辰巳は母の腕の中で呆れながらに思った。

すべての原因であるセラフィはここにはいない。まして言った所で母は何も覚えていないだろう。

「お母さん、会えて良かったですね」

隣から声をかけてきたのは先程、辰巳と喋っていた警官だった。

満面の笑みを辰巳の母に向けると、

「ええ。ご迷惑をお掛けしました。ほらアンタも頭下げんだよ！」

イテ、と腕を机の角にぶつけながらも、強引に頭を下げられた。

「もうこの子にはちゃんと言い聞かせておきますので——」

いえいえ仕事ですからと言い、警官はこの部屋を出ていった。気をきかせてくれたのだろう。

「本当にどこ行ってたの？　正直に言ってごらん」

その問いに辰巳は言葉を濁らせた。

「言いたくないの？　悪いことはしてないでしょうね。ならいいわ、本当に心配したんだから」

辰巳の母はもう一度見つけた事に感激を覚えながら、目尻に浮かべた液体を指で拭った。

「もう……帰ろっか。夕飯作ってあげるから」

それに、辰巳はコクリと頷いた。

そしてすぐに辰巳とその母は事務室を出た。

外にいた警官さんに挨拶を交わすとすぐにその場を後にした。

帰国（後書き）

面白いと思っていただけでは幸いです

転校生

それから数日後の事だった。後日談とも言えるかもしれない。

辰巳は朝のニュースをちらりと見ると学校へと足を運んだ。

そのニュースの内容は――

『数日で急成長を遂げている株式会社「」は、とうとう推定年間売上額数十億円という急成長を見せています。今回はその「」の社長であり創設者であるキツシム「エライダムさんにインタビューをいただきました。キツシムさん』

『我々「」は難民や貧困層の人々を助ける事を目標に、日々働いています』

だそうです、というアナウンサーの声が響き、中継が終わった。

どうやらキツシムは経済による救済への一步を無事に成し遂げたようだった。

そして辰巳は学校にて大変な――災いともいえる目に遭った。

教師陣からの質疑が行われたのだ。

まあそんなのは適当に誤魔化し、教室へと向かった。また入ると入ったで大変だった。葛野にいろいろと聞かれたのだ。ネチネチネチ聞かれた。その受け答えをしている時の辰巳の表情は笑い物だった。

そして、だ。

授業始まった。いつもと変わらない日々、それが辰巳には微笑ましく思った。

担任である磯部が教壇に教科書類の資料を広げ、授業を始めようとした時だった。唐突に磯部が話始めた。もちろん、授業のことについてではない。

「今日は皆に紹介したい人がいる」

教壇に両手をつき、ハキハキとした声で言った。
場が騒がしくなる。

「転校生だ——」

その言葉を聞いた瞬間、後ろの葛野が『新たなフラグ来た——！』と叫んでいた。

そして、磯部の合図と共に、教室のスライド式ドアが静かに開かれた。

「転校生を紹介する——」

そこにいたのは——

「セラフィーナ＝ヴァルキリーです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1349w/>

ヴァルキリー家の娘事情

2011年10月18日13時00分発行